罪と罰「6」（ドストエフスキー）

第六篇

一

ラスコーリニコフにとって、不思議な時期が襲ってきた。ちょうどふいに霧が目の前に立ちこめて、出口のない重苦しい孤独の中へ、彼を閉じ込めてしまったようなぐあいである。ずっと時がたった後で、この時期のことを思い起こしてみると、その当時意識がもうろうとしていたらしく、しかも途中いくたびか切れ目はあったものの、それが最終の破局まで続いていたのに、彼は自分でも気がついた。彼はそのころさまざまなこと、たとえば起こった事の期間とか時日とかで考え違いしていた――それを彼ははっきりと確信することができた。少なくとも、その後何かの事を思い起こして、その思い出したものを自分にはっきりさせようと努めた時、彼は多く第三者から受けた情報にたよりながら、いろいろ自分のことを知ったのである。彼は一つの事件を別の事件とごっちゃにしたり、またはある事件を目して、自分の思念裡にのみ存在する事件の結果みたいに思い込んだりした。時とすると、極度な恐怖に変じた病的に悩ましい不安が、彼の全幅を領することもあった。かと思うと、これまでの恐怖に打って変わった、弛み切った倦怠が彼を領する数分、数時間、いや、あるいは数日さえもあったように覚えている――それはある種の瀕死の病人に起こる、病的な無関心状態に似た倦怠だった。概してこの最近数日間というもの、彼は自分でも自分の状態を明瞭に、完全に了解するのを避けようと苦心していたような風であった。特にゆうよなく闡明を要するある種の緊急な事実が、かくべつ彼の心に重くのしかかった。それを忘れたら、彼の立場としていやおうなしに、完全な破滅を招来する恐れがあることでも、彼はある種の煩いをのがれて自由になれたら、どんなにうれしいかと思った。

ことに彼の心を騒がせたのはスヴィドリガイロフであった。彼の心はスヴィドリガイロフの上に縛りつけられていた、と言ってもいいくらいである。カチェリーナの臨終の時、ソーニャの住まいでスヴィドリガイロフの言ったことば――彼にとってあまりにも恐ろしい、あまりにも明白に語られたことばを聞いて以来、彼の平常の思想の流れはかき乱されたようなぐあいになった。しかし、この新しい事実が極度に彼を騒がしたにもかかわらず、ラスコーリニコフはなぜか事態の闡明を急ごうともしなかった。時々彼はどこか遠くの淋しい場末で、みすぼらしい安料理屋のテーブルに向かって、一人瞑想に沈んでいる自分をふと見出して、どうしてこんなところへ来たのか、ほとんど合点のいかない有様でいながら、急にスヴィドリガイロフの事を考え出すのであった。すると、ふいに、一時も早くあの男と話し合って、できるだけきっぱり解決してしまわねばならぬという不安な意識が、

明瞭すぎるほどはっきり浮かんできた。一度など、どこかの見付け外へさしかかったとき、彼は今ここでスヴィドリガイロフを待っているので、二人はここで会見する約束になっていたっけ、などという妄想を起こしたことさえあった。かと思えば、またある時は夜明け前に、どこか藪の中の地べたで目をさまし、どうしてこんなところへさ迷って来たのかと、われながらわけのわからなかったこともある。もっとも、カチェリーナが死んでから二、三日の間に、彼はソーニャの住まいで、すでに二度もスヴィドリガイロフと会っていた。彼はそこへなんの当てもなく、ちょっと一、二分のつもりで寄ってみたのである。彼らはいつも簡単に一言二言口をきき合っただけで、一度もかんじんの点には触れなかった。ちょうど、それについてはある時機まで待つという黙契が、二人の間に自然と成立しているようなぐあいであった。カチェリーナの遺骸はまだ棺にはいったままだった。スヴィドリガイロフは葬式の世話で奔走していた。ソーニャも同じく忙しそうにしていた。最後に会った時、スヴィドリガイロフはラスコーリニコフに向かって、カチェリーナの子供たちは自分が始末をつけた。しかも巧く始末をつけた、自分は多少いい手づるがあるので、適当の人をいくたりか見つけたから、その助力をかりて、三人の孤児をしごくぐあいのいい孤児院へさっそく入れることができた、何しろ資産を持っている孤児は、まる裸の孤児よりずっと始末がしいいので、自分の提供した金がいろいろ役に立った――などと報告した。彼はソーニャの事も何やら言って、二、三日のうちに、自分でラスコーリニコフを訪ねようと約束した。そして、『よくお話しした上ご相談したいと思っております。重大な用件がありますのでな』と言った。この会話は、階段に近い入り口の廊下でかわされたのである。スヴィドリガイロフは、ラスコーリニコフの目をじっとみつめていたが、しばらく無言の後に、ふいに声を落として問いかけた。

「いったいあなたはどうなすったんです、ロジオン・ロマーヌイチ、まるで生きた空もないみたいじゃありませんか？　まったく、聞きもし見もしていらっしゃるけれど、なんにもおわかりにならない様子だ。もっと元気を出しなさいよ。まあ、一つよくお話ししましょう。ただ残念なことには、用事が多くてね、人のことだの自分のことだの……ああ、ロジオン・ロマーヌイチ」と彼は急に言い足した。「人間は誰しも空気が必要ですよ。空気がね……それが一番ですよ！」

折からそこへ階段を上って来た司祭と補祭を通すために、彼はいきなり脇へ身を引いた。彼らは看経に来たのである。スヴィドリガイロフの指図によって、看経は日に二度ずつきちょうめんに行なわれた。スヴィドリガイロフは自分の用で行ってしまった。ラスコーリニコフはしばらくそこに立って考えていたが、やがて司祭のあとについて、ソーニャの住まいへはいって行った。

彼は戸口に立ち止まった。勤行は静粛に秩序整然と、物悲しげに始められた。彼はずっと子供の時分から、死を意識し死者の存在を感じるたびに、なんとなく重苦し

い神秘的な恐ろしいものが、そこに伴うのであった。それに、彼はもう久しい以前から、こうした法要の席に、連なったことがなかった。おまけに、そこにはまだ何かほかの、あまりにも恐ろしい、不安なものがあったのである。彼は子供たちを見やった。彼らはみな棺の傍に膝を突いていた。ポーレチカは泣いている。その後ろには、ソーニャがおじけたように、声を忍んで泣きながら祈っている。『そうだ、彼女はこの二、三日、おれを一度も見もしなければ、一言も口をきかなかったっけ』とラスコーリニコフはふとそんなことを考えた。太陽は明るく家内を照らしてい、香の煙は渦まきながら立ち昇っている。司祭は『主よ、やわらぎを与え給え』を読み上げた。ラスコーリニコフは勤行の間ずっと立ち尽くした。祝福して暇を告げながら、司祭はなんとなく妙な目つきであたりを見回した。勤行が終わってから、ラスコーリニコフはソーニャの傍へ寄った。彼女はふいに彼の両手を取り、その肩へ頭をのせた。このちょっとした親しみの動作はラスコーリニコフに、ぎょっとするほど不思議な感じを与えた。彼は合点がいかないくらいだった。どうしたことだろう？　自分に対していささかの反撥も、いささかの嫌悪も見られないし、彼女の手にいささかのおののきも感じられない！　これは何か一種無限の自己卑下に相違ない。少なくとも、彼はこう解釈した。ソーニャは何も言わなかった。ラスコーリニコフは彼女の手を握りしめ、そのまま外へ出た。

彼はたまらなく苦しくなった。もしこの瞬間どこかへ行ってしまって、完全に一人きりになれたら、よしやそれが一生続こうとも、彼は自分を幸福と思ったに相違ない。けれど困ったことには、このごろ彼はほとんどいつも一人でいるくせに、どうしても自分が一人だと感じられないのであった。彼はしょっちゅう郊外へ去ったり、街道へ出たり、一度などは、どこかの森の中までさまよい入ったこともあるが、淋しい場所へ行けば行くほど、何物かの間近な不安にみちた存在が、いよいよ強く意識された。それは恐ろしいというのではないにせよ、何かしら非常にいまいましい気持を呼び起こすので、彼はいつもあわてて街の方へ引っ返し、群衆の中に交じったり、安料理屋や酒場へ行ったり、古物市や乾草広場へ足を向けたりするのであった。こういう場所にいると、それこそなんだか気が楽で、かえって孤独な感じさえするのであった。日暮れ間ぎわに、ある居酒屋で歌をうたっていた。彼はそれを聞きながら、まる一時間も腰をすえていたが、それが非常に愉快にさえ思われたのを、後々までも覚えていた。しかし、終わりごろになると、彼はまたぞろ急に不安になった。それは良心の呵責がにわかに彼を悩ましはじめたような風であった。『おれは今こうして腰かけて歌を聞いているが、俺がしなくちゃならないのは、いったいこんなことなんだろうか！』このように彼は考えたものらしい。もっとも、すぐその瞬間、自分の心を騒がせるのはあながちこればかりでないのに気がついた。そこには、何かゆうよなく解決を要求しているものがあったけれど、それは考えに表わすことも、こと

ばに伝えることもできないものだった。すべてが一つの糸玉にくるくるまき込まれてしまうのであった。『いや、もうなんでもいいから闘った方がましだ！　いっそまたポルフィーリイとやり合うか……それともスヴィドリガイロフとでも……誰でもいいから一刻も早く挑戦して来ればいい、攻撃してくればいい……そうだ！　そうだ！』と彼は考えた。彼は居酒屋を出ると、ほとんど駆け出さないばかりに歩いた。ドゥーニャと母親を思う心が、なぜか矢も楯もたまらない恐怖を呼びさました。つまりこの夜の明け方に、彼は全身を熱に打震わせながら、クレストーフスキイ島の藪のなかで目を覚ましたのである。彼は家路をさして歩き出し、まだごく早朝に帰り着いた。幾時間か眠った後、熱はようやく下がったけれど、もうすっかり遅くなってから、彼は目を覚ました。それは午後の二時だった。

　彼はカチェリーナの葬式が今日だったことを思い出して、これに参列しなかったのを喜んだ。ナスターシャが食事を運んできた。彼は飢えに近いほどの異常な食欲をもって、食いかつ飲んだ。彼の頭はいつもよりせいせいして、彼自身もこの三、四日に比べると、だいぶ落ち着いていた。そして、先ほどの矢も楯もたまらぬほどの恐怖に、われながら不思議な感じがした（もっとも、それはほんの頭の一角をかすめただけであるが）。そのときドアがあいて、ラズーミヒンがはいって来た。

「ああ！　食ってるな、してみると病気じゃないんだね！」とラズーミヒンは言いながら、椅子を取り、ラスコーリニコフに向き合ってテーブルについた。

　彼は興奮している様子で、それを隠そうともしなかった。彼は明らかにいまいましそうな調子で話したが、しかし急ぎもしなければ、かくべつ声を高めるでもなかった、彼の心中には何か特殊な、容易ならぬ意向が蔵されているようにも考えられた。

「おい聞けよ」彼は断固たる調子で切り出した。「僕はもう君らのことはどうなったっていっさい知らん。僕には何もわかりっこないということを、今こそ明瞭に悟ったからだ。しかし、どうか僕が君を尋問に来たなどと思わないでくれ。くそくらえだ！　こっちがごめんだよ！　よし君がいま自分で秘密を全部打明けたって、僕は聞こうともしないで、唾を吐きかけて出てしまうかもしれないよ。僕はただ第一に、君が気ちがいだっていうのは事実かどうか、それを親しく根本的に確かめようと思って来たんだ。君の事についてはね、もしかすると気ちがいか、さもなければ、非常にその傾向を持った男だという確信が存在している（まあどこかそこらあたりに、そういう確信があるんだ）。実を言えば、僕自身もこの意見を支持する方へ、かなり傾いているのだ。それは第一に、君の愚劣な、しかもいささか忌まわしい（なんとも説明のしようもない）行為によって、また第二には、お母さんと妹さんに対する君のこの間の態度によって判断したわけなんだ。君があの人たちにとったような態度は、もし気ちがいでなければ、悪党か卑劣漢以外には、とてもできないことだからね。してみれば、君は気ちがいだ

……」
「君はよほど前に二人に会ったのかね？」
「たった今だ。ところが君はあの時以来会わないんだな？
いったいどこをほっつき歩いてたんだ、お願いだから聞かせてくれ、僕はもう三度も君んとこへ寄ったんだぜ。お母さんが昨日から病気で重態なんだ。君のとこへ来る来ると言ってね、アヴドーチャ・ロマーノヴナがいくら止めても、まるで聞こうとしないんだ。『もしあの子が病気だったら、もしあの子が気でも触れてるのなら、母親でなくて誰があの子の看護をします？』とこう言うのさ。で、あの人を一人うっちゃっとくわけにもいかないから、我々はみんなでここへやって来た。この戸口へ来るまで、二人でお母さんをなだめなだめしたんだ。ところが、はいってみると、君がいない。お母さんはここんとこに腰かけておられたんだ。十分ばかりじっとすわっておられた。僕らは黙ってその傍に立っていたよ。するとお母さんは立ち上がって、『もしあの子が外へ出られるとすれば、病気ではないわけだ。そして、母親のことも忘れてしまったのだろう。そうだとすれば、わが子のしきいぎわに立って、施し物でももらうように、優しくしてくれとねだるのは、母親として不見識な恥ずかしい話だ』とおっしゃってね、家へ帰って、どっと床に就かれたのだが、いま熱が出てるんだよ。そして『わかった、あの子は自分の女のためになら暇があるんだろう』なんて言われるのさ。自分の女というのは、お母さんの腹では、ソフィヤ・セミョーノヴナのことなのさ。君の許婚(いいなずけ)だか、恋人だか知らないがね。そこで、僕はすぐソフィヤ・セミョーノヴナのところへ行ったんだよ。だって、いっさいをはっきり知りたいと思ったもんだからね――行ってみると――棺が置いてあって、子供たちは泣いているし、ソフィヤ・セミョーノヴナは、子供たちに喪服の寸法を取ってやるって騒ぎじゃないか。しかも君はいない。僕はそれをざっと見てから、失礼を詫(わ)びて帰ってきた。そして、アヴドーチャ・ロマーノヴナにありのまま報告した。してみると、みんなくだらない噂話で、自分の女なんてものはてんでいやしない。してみると、一番確かなのは、やっぱり発狂ということになる。ところが、君はこのとおりすわり込んで、まるで三日もものを食わなかったみたいに、子牛肉のシチュウをむしゃむしゃやっている。そりゃまあ、気ちがいだって食うことは食うだろうさ。だが、君は僕に一言も口をきかないけれど、しかし君は……気ちがいじゃない！　これは僕が誓ってもいい。何はさておいても、けっして気ちがいじゃない。こうなると、君たちなんかもうどうとも勝手にしやがれだ。だって、これには何か秘密がある、秘密があるに相違ない。しかし、僕は君の秘密に頭を悩まそうとは思わないよ。ただ君を罵倒(ばとう)して、気分をすっとさせるために寄っただけなんだ」と彼は立ち上がりながらことばを結んだ。「僕はいま何をしたらいいか、ちゃんと心得ているからね！」
「いったい君はいま何をしようと思ってるんだい？」
「僕がいま何をしようと思ってたって、君の知ったこと

じゃないよ！」
「気をつけろよ、君は無茶飲みを始めるんだろう！」
「どうして……どうして君それがわかった？」
「わからなくってさ」
　ラズーミヒンはちょっと口をつぐんだ。
「君はいつも非常に思慮の深い男だった、けっして、けっして気なんか狂やしなかったんだ」と彼はふいに熱した調子で叫んだ。「まさに君の言う通り、僕は無茶飲みをやるんだ……失敬！」
　こう言って、彼は出て行きそうにした。
「一昨日だったと思う、僕は妹と君の話をしたんだよ、ラズーミヒン」
「僕の話？　だって……一昨日どこで君はあのひとに会えたんだい？」ラズーミヒンは急に立ち止まって、いくらか顔の色さえ青くした。
　彼の心臓がその胸の中で徐々に緊張して、鼓動を始めたのが察しられた。
「あれがここへ来たのさ、一人で。ここに腰をかけて、僕と話したんだ」
「あのひとが！」
「そうだ、あれが！」
「で君は何を言ったんだね……つまりその、僕のことで？」
「僕はあれに君のことを、非常にいい、正直な、よく働く男だといった。君があれに惚(ほ)れてることは別に言わなかった。だって、そんなことはあれが自分で知ってるからね」
「自分で知ってるって？」
「そうさ！　あたり前だ！　たとえ僕がどこへ行こうと、僕の身に何が起ころうと――君はいつまでも二人の保護者でいてくれるだろうね。僕は、いわば君に二人を手渡しするんだよ、ラズーミヒン。僕がこんなことを言うのは、君がどんなにあれを愛しているか十分に知り抜いてる上、君の心の純潔を信じているからなんだよ。そのほかに、あれも君を愛するようになるかもしれない、いや、もしかすると、もう愛してるかもしれないのを、ちゃんと承知しているからさ。さあ、これで君自分の好きなように決めるがいい――無茶飲みをやってもいいかどうか」
「ロージカ……実はね……つまり……ええい、くそっ！　まあ、それが秘密だというなら、それはそうでかまわないさ！　しかし僕は……僕は今にその秘密を探り出すよ……そして、きっとくだらないばかばかしいことに違いないと信じてるよ。君は始終一人で何かたくらんでるんだよ。が、とにかく、君はすばらしい男だ！　実にすばらしい男だ！……」
「僕さっき言い添えようと思ったのに、君がじゃまをしたので言いそびれたが、君はさっき神秘だの秘密だの、そんなもの知る必要がないと言ったが、あれはすこぶるいい考えだよ。時の来るまではうっちゃっといてくれ、心配しないがいいよ。何もかもそのうちにわかる、つま

り必要な時が来ればだ。昨日あの男が僕に向かって、人間には空気が必要だ、空気が、空気がと言ったが、僕はこれからすぐその男のとこへ行って、どういう意味か聞いてこようと思うんだ」

ラズーミヒンは、物思わしげに興奮した様子で立ったまま、何やら思い合せていた。

『これは政治上の秘密結社に関係してるんだ！　てっきりそうだ！　そして何か思い切った事を断行しようと考えているのだ――もうそれに違いない！　ほかには全く解釈の仕方がないじゃないか。それに……それにドゥーニャもこれを知ってるんだ……』と彼は急に心の中で考えた。

「じゃ、アヴドーチャ・ロマーノヴナが君のとこへ来るんだね」一語一語に気をつけながら、彼は言った。「ところで、君自身は、もっと空気がいる。空気がと言った男に、会いに行こうてんだね。で……で、でみると、あの手紙も……あれもやはり同じ所から出たものだろうね」と彼はひとりごとのようにことばを結んだ。

「手紙って？」

「妹さんがある手紙を受け取ったんだ、今日。で、あのひとはたいへん心配そうな様子だったよ。たいへん。あまりたいへんすぎるくらいだったよ。僕が君のことを言い出すと――あのひとは黙っててくれと言ったっけ。それから……それから、ことによると、我々は遠からず別れるようになるかもしれないと言われた。それからまた、何かしら熱心に僕に礼を言ったあとで、自分の部屋へはいって、鍵をかけてしまわれたんだ」

「あれが手紙を受け取った？」考え深そうな調子で、ラスコーリニコフは問い返した。

「そう、手紙だ。じゃ君は知らなかったのかい？　ふむ」

二人ともしばらく黙っていた。

「じゃ失敬するよ、ロジオン。僕はね、君……一時ちょっと……いや、しかし、さよならだ。実はね、一時ちょっと……、しかし、さよなら！　僕もやはり行かなきゃならない所があるんだ。飲みゃしないよ。今はもうやめた……なんのくそっ！」

彼は急いだ。けれども、もう外へ出ていったんほとんどドアをしめてから、ふいにまたあけて、どこかそっぽを見ながら言いだした。

「ついでにちょっと！　例の人殺しを覚えてるだろう？　ほら、あのポルフィーリイさ、婆さんさ？　いいかい、あの犯人がわかったんだよ、つまり自白してね、証拠をすっかり提供したのさ。それが例のペンキ屋の一人なのさ。ほら、僕があのとき弁護してやった、覚えてるだろう？　どうだい、君は本当にできないだろうが、庭番と二人の証人が上がって来た時に、階段で仲間を相手に喧嘩したり笑ったりしたのは、ごまかしにわざとやったんだとさ。あんな若造にしちゃ、なんて狡猾なやり方だろう、なんというくそ度胸だろう！　とても信じられないくらいだ。ところが、自分ですっかり白状して説明したんだから仕方がない！　実に僕もまんまといっぱいくったもんだよ！　もっとも、僕に言わせると、これはただ

仮面かぶりと頓知の天才、法律的ごまかしの天才なんだからね――してみれば、なにも特に驚くにゃ当たらない！　いったいこんなのがあり得ないことかい？　だが、やつが持ち切れなくなって、白状したという点に至っては、僕はその方をよけいに信用するよ。その方がずっと本当らしいものね！……が、あの時は僕も実に、僕もまんまといっぱいくったもんだよ！　やつらのために一生懸命で大騒ぎしたんだからなあ！」

「どうか聞かしてくれないか、いったい君はそんなことをどこから知ったんだい？　そして、なぜ君はこんなことにそう興味を持つんだい？」明かに興奮の様でラスコーリニコフは尋ねた。

「あれ、あんなことをきいてるよ！　なぜ僕が興味を持つかって？　きいたもんだね！……ほかの人からも知ったが、ポルフィーリイの口からも知ったんだよ。もっとも、おもにポルフィーリイから一部始終を知ったんだ」

「ポルフィーリイから？」

「ポルフィーリイからよ」

「いったい何を……何をいったいあの男は？」とラスコーリニコフはおびえたように問い返した。

「あの男は実にうまく説明してくれたよ。先生一流の心理的闡明なんだ」

「あの男が説明したのかい？　自分で君に説明したのかい？」

「自分でだよ、自分でだよ。失敬！　あとでまた何やかや話すとして、今は少し用があるから。いずれ……僕も実は一時そう思った事があるんだよ……が、まあ、そんなことはいいや。あとにしよう！……僕ももう飲む必要なんかない。君は酒なしで僕を酔わしてくれた。僕は酔ってるんだぜ、ロージカ！　今は酒なしで酔ってるんだよ。じゃ、失敬。またくるよ、じきに」

彼は出て行った。

『あいつは、あいつは政治上の秘密結社に関係してるんだ、確かにそうだ、それに違いない！』とラズーミヒンはゆっくり階段をおりながら、すっかり心の中で決めてしまった。『そして、妹まで引っ張り込みやがった。それはアヴドーチャ・ロマーノヴナの性質として、大きに、大きにありそうなことだ。二人はしょっちゅう会ってるんだ……そういえば、あのひともおれにおわせたことがある。あのひとのいろんなことば……ちょっとしたことばの端々や……におわすような話しっ振りから見ても、つまり、そういうことになる！　だってそれ以外に、このごちゃごちゃを説明しようがないじゃないか？　ふむ！　俺もちょっと一時あんな事を考えかけたが……ちょっ、いまいましい、俺はいったい何を考え出したんだろう。そうだ、あれは一時の心の迷いだった。俺はあの男に対してすまんことをした！　それはあの男があの時廊下で、ランプの傍で、俺にそういう迷いを起こさせたのだ。ちょっ！　あれは俺としては実に汚らわしい、無作法な、卑劣な考えだった！　ミコールカのやつ、自白してくれてえらいぞ……これで以前のこともすっかり説明がつく！　あの時のあの病気も、ああした奇怪な振舞

いも……それから以前まだ大学にいた時分だって、いつもああいう陰鬱な気難かしい男だったんだからな……が、さてあの手紙はいったいどういう意味なんだろう？　これにも確か何かあるに違いない。いったい誰から来た手紙なのだろう？　どうも怪しい……ふむ。いや、俺が何もかも洗い上げてやる』

彼はドゥーニャのことを思い浮かべて、いろいろ心に照らし合わせていた。と、急に心臓がしびれるような気がしてきた。彼はいきなりおどり上がって、そのまま一もくさんに駆け出した。

ラスコーリニコフは、ラズーミヒンが出て行くが早いか、立ち上がって、くるりと窓の方へ向き、まるで自分の部屋の狭いのを忘れたように、隅から隅へと一、二ど歩き出したが……再び長椅子へ腰をおろした。彼はなんだか身も心も新しくなったような気がした。また、闘うんだ――それはつまり、出口が見つかったことになる。『そうだ、つまり出口が見つかったわけだ！　これまではあまり始終ぴったりしめ切って、堅く栓をしてしまっていたものだから、苦しくて圧迫に堪えなかったのだ。まったく頭が妙にぼうっとしてしまったのだ。ポルフィーリイのとこでミコールカの一件を見て以来、おれは出口もない狭くるしい中で、息がつまりそうだった。ミコールカ事件の後で、同じ日にソーニャの所でも一幕あった。おれはその一幕を、予期したのとは全然ちがった結末にしてしまった……つまり瞬間的に急激に心が弱ったのだ！　一どきに！　そして、あの時おれはソーニャに同意したじゃないか。自分で同意したのだ、心底から同意したのだ。こんな事実を胸に抱いていては、とても一人で生きて行けるものではないってことに同意したのだ！　ところで、スヴィドリガイロフは？　スヴィドリガイロフは謎だ……スヴィドリガイロフのことは気になる。それは事実だが、なんだか方面が違うような気がする。スヴィドリガイロフとも、やはり闘わなければならんかもしれない。ことによると、スヴィドリガイロフは立派な出口になるかもしれない。しかし、ポルフィーリイは別問題だ』

『そこで、ポルフィーリイは直接ラズーミヒンに説明したんだな、心理的に説明したんだな！　またしても、あのいまいましい一流の心理的方法を持ち出したのだ！　あのポルフィーリイが？　あのポルフィーリイが、二人の間にああいうことのあった後で、ミコールカの現われる前に二人が面と面をつき合わせて、ああいう一場を演じた後で、よしただの一分でも、ミコールカを犯人だと思い込むなんて、そんなことがあってたまるものか！　あの時の出来事に対しては、正しい解釈を見いだすことはできない。ただ一つの解釈を別として（ラスコーリニコフはここ四、五日いくたびも、ポルフィーリイとのこの一幕を、きれぎれに思い出した。ひとまとまりにしては、どうしても記憶を引き出すことができなかった）。あの時二人の間には、もうこうなった以上ミコールカなどの力では、ポルフィーリイの確信の根底を動揺さすべくもないようなことばが発せられ、そうした挙動やしぐ

さが演ぜられ、そうした視線が交換され、そうした声である種の事が語られ、どんづまりの境目まで押して行ったのだ（ポルフィーリイはミコールカの腹の中など、最初の一言一動で、そらんずるように見抜いてしまったのさ）』

『だが、いったいなんてことだろう！　ラズーミヒンまでが嫌疑をかける気になったとは！　してみると、あの廊下の、ランプの傍の一場は、あの時ただではすまなかったのだ。そこで、あの男をポルフィーリイのとこへ駆けつけたわけだ……しかし、ポルフィーリイはどういうわけであの男をだましにかかったのか？　ラズーミヒンの目をミコールカの方へそらせたのは、どういう目的なんだろう？　いや、確かにやつは何か考え出したに違いない、これにはきっと計画がある、だがどんな計画か？　もっとも、あの朝からずいぶん時日がたっている――あまり、あまりたちすぎてるくらいだ。それだのに、ポルフィーリイのことは噂も影もない。ともかく、これはむろんいいことじゃない……』ラスコーリニコフは帽子を取って、考えに沈みながら、部屋を出て行った。この間じゅうから、彼が自分で少なくも健全な意識を持っていると感じたのは今日が初めてだった。『まず、スヴィドリガイロフの片をつけなくちゃ』と彼は考えた。『どうでもこうでも、一刻も早く。あの男もきっと俺がこっちから行くのを、待っておるに違いない』と、ふいにこの瞬間、彼の疲れた心の底から、なんともいえない憎悪の念がこみ上げてきて、スヴィドリガイロフかポルフィーリイか、二人のうちどちらでも殺してしまいかねないような気がした。少なくも、もし今でなければ、いつかあとでやっつけられそうに感じた。『まあ見てみよう、見てみよう』と彼は心にくり返した。

しかし、彼が入り口の廊下へ出るドアをあけた拍子に、思いがけなく当のポルフィーリイにばったり出会った。こちらは彼の部屋へはいって来るところであった。ラスコーリニコフはちょっと一瞬間、棒立ちになってしまったが、それはほんの瞬間のことだった。不思議にも、彼はさしてポルフィーリイに驚きもしなかったし、ほとんどおびえもしなかった。彼はただぴくっとしただけで、たちまちとっさの間に心構えをした。

『ことによると、これで大団円かもしれない！　だが、なんだって猫みたいに、こっそりやって来やがったんだろう？　おれはちっとも気がつかなかった！　まさか立聞きしていたのでもあるまい？』

「こんな来客は思いがけなかったでしょう、ロジオン・ロマーヌイチ」とポルフィーリイは笑いながら叫んだ。「もうだいぶ前から一度お寄りしようと思ってたもんですから、ふとそばを通りがかって、五分ぐらいおじゃまをしたってよかろうじゃないか、とこう考えましてな。どこかへお出かけのところですね？　じゃ、お暇をとらせません。ただ煙草を一本すうだけ、もしお許しくだされば」

「さあおかけなさい。ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、どうぞ」もし自分で自分を見ることができたら、ま

ったくわれながらあきれたろうと思われるほど満足らしい、親しげな様子をして、ラスコーリニコフは客に席をすすめた。

それはびんの一ばん底に残った滓(おり)までかきさらうような努力だった！　人はよくこんな風に、強盗に直面した死のごとき恐怖の半時間を持ちこたえるものである。そして、いよいよ喉へ刃(やいば)を擬せられた場合には、かえって恐怖も通り越してしまうことがある。彼はまともにポルフィーリイの前に腰をかけ、またたき一つしないで彼を見つめていた。ポルフィーリイは目を細めて、煙草をふかし始めた。『さあ、言ってみろ、言ってみろ』まるでこういうことばが、ラスコーリニコフの心臓から飛び出そうとでもするようであった。『さあなぜ、なぜ言わないんだ？』

二

「いや、実際この煙草というやつは！」一本のみ終わって息をつきながら、やっとポルフィーリイは口を切った。「毒ですよ、まったく毒ですよ。ところが、どうしてもやめることができないんですからな！　咳(せき)が出る、喉(のど)がむずむずする、ぜんそくは起こる。わたしは臆病(おくびょう)な方でしてね、この間もBのところへ診(み)てもらいに行ったんですがね、患者をひとりひとり最小限(ミニマム)三十分ずつも診るんですよ。わたしを見ると、笑い出したくらいでしたよ。こつこつたたいたり聴診器をかけたりしたが――あなたには、わけても煙草がよくない、肺が拡大してるから、とこう言うんです。といって、これがどうしてやめられましょう？　何を代わりにしろと言うんでしょう？　酒を飲まないもんですから、これに全く困ってしまうんですよ。へ、へ、へ、飲めないのが不幸なんですからなあ！

何事もすべて相対的なものですよ、ロジオン・ロマーヌイチ、何事もすべて相対的なものですよ」『いったい何を言ってやがるんだ、またいつかのお役人式な紋切型を始めやがるのかな！』とラスコーリニコフは嫌悪を感じながら考えた。この前の会見の光景が細大もらさず、たちまち彼の記憶によみがえった。そしてあの時の感情が、波のように心臓へ打ちよせた。

「わたしは一昨日の夕方にも、一度お寄りしたんですよ。あなたはご存じありませんか」部屋の中をじろじろ見な

がら、ポルフィーリイはことばを続けた。「部屋の中へ、この部屋の中へはいったんですよ。やはり今日のように、傍を通りかかったもんだから――一つ訪問してみようかなと思いましてな。はいって来ると、戸があけっ放しになっている。で、様子を見てしばらく待っていましたが、女中にも言わないで、そのまま出てしまったのです。鍵はおかけにならんのですか？」

ラスコーリニコフの顔はいよいよ憂鬱になっていった。ポルフィーリイは彼の意中を見抜いたように、「実は、お話をつけに上がったんですよ、ロジオン・ロマーヌイチ、お話をつけにね！　わたしはあなたに対して、話をつけなけりゃならぬ義務があるのです、責任があるのです」と彼は微笑を含みながらことばをついで、軽く手でラスコーリニコフの膝までたたいた。

しかし、それとほとんど同じ瞬間に、彼の顔はまじめな、気がかりらしい表情になったばかりでなく、ラスコーリニコフの驚いたことには、なんとなく一抹の憂愁の陰すら帯びたかに見えた。彼はこれまでかつて彼のこういう顔つきを見たこともなければ、そんな表情ができようなどと想像したことさえなかった。

「ロジオン・ロマーヌイチ、この前はわれわれ二人の間に、実に妙なことが起こったものですなあ。もっとも、初めてお会いした時も、われわれの間には、奇妙なことが起こったとも言えます。しかしあの時は……いや、今になってみれば、どっちもどっちですがね！　そこで、わたしはあなたに対して、大いに申しわけがないのかもしれません。わたしはそれを感じております、実際、あの時のわたしたちの別れ方はどうでした、覚えていらっしゃいますか？　あなたも神経がおどって膝頭ががくがく震えていたし、わたしも神経がおどって、膝頭ががくがくしていましたからね。それにあの時は、二人の間がどうもめちゃくちゃで、非紳士的でしたね。しかし、わたしたちはなんといってもやはり紳士ですよ、つまりいかなる場面にも、何よりもまず紳士ですからね。これは心得ておく必要があります。ねえ、あの時どんなところまでいったか、ご記憶でしょう……まったく不作法と言ってもいいくらいでしたよ」

『こいついったい何を言ってるんだ、おれをなんだと思ってやがるんだ？』とラスコーリニコフは頭を上げ、目をいっぱいにみひらいて、ポルフィーリイをみつめながら、あきれてこう自問した。

「で、わたしはこう考えたんですよ――お互いにざっくばらんにやった方がよかろうって」ポルフィーリイは、以前の犠牲を自分の視線でこの上当惑させたくもなし、また以前のやり口や小細工を用いたくもないというように、少し顔をそむけて目を伏せながら、ことばを続けた。「そうです、あんな嫌疑やあんな場面は、長く続けていられるものじゃありません。あの時はミコールカが引込みをつけてくれたからいいようなものの、さもなければ、われわれの間はどこまで進んだか、見当もつかないほどです。あの時わたしのところでは、あのいまいましい町人のやつが、仕切り壁の向こうにずっと待っていたので

す――あなた想像がおつきになりますかね？　もっとも、あなたはもちろんこのことをご存じだ。あの時、やつがあとからあなたのとこへお寄りしたことは、わたしにもちゃんと知れてるんですから。しかし、あの時あなたが想像しておられたような事、そんな事はなかったんですよ。わたしもあの時はまだ誰を呼びにやりもしなければ、なんの処置もとりはしなかったのですからな。なぜ処置をとらなかったか、とおききになるでしょうが、さあなんと言ったらいいか、あの時はわたし自身も、ああいういろんな事にぶっつかって、いわばまごつき気味だったんですな。庭番を召喚の手筈をするのも、やっとこさだったくらいですから（多分あなたも通りすがりに、庭番に気がおつきになったでしょうな？）あの時、わたしの頭に、ある考えが稲妻のようにぱっとひらめいたんです。何しろあの時は、その、てっきりそれに違いないと、信じ切っていたんですからな、ロジオン・ロマーヌイチ。そこでわたしはこう考えたんです――なに、一時ひとつの方を逃がしても、その代わりほかの方の尻尾を押えてやる。自分の方は少なくとも自分の方だけは逃がしっこないとね。ところで、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたは生まれつきどうもあまり癇癖が強くていらっしゃる。あなたの性格と感情のさまざまな根本的特質から考えると（わたしもその一部は了解したつもりで、ひそかに自負していますがね）、どうもあんまりだと思われるくらいですよ。いや、なに、もちろん、わたしはあの時だって、人がちょっと立ち上がったかと思うと、いきなり大事の秘密をぶっつけにしゃべるなんてことが、そうざらにあるものでないくらいの判断はできなかったんですよ。なるほど、そんなこともあるにはあります。特に、人がいよいよ堪忍袋の緒を切った場合なんかはね。けれど、いずれにしても稀ですな。それはわたしにも判断がついた。で、わたしは思いましたな――いや、ほんのちょっとした、目にはいらぬようなものでもいい！　よしどんな小さな針で突いたようなものでもいい、単なる心理だけでなく、こう手でつかめるもの、形のあるものでさえあればいい、と思ったわけなんです。というのは、もしある人に罪があるなら、いずれにしても、必ず何か具体的なものが現われねばならぬ、とこう考えられるからです。全く、きわめて意想外な結果さえ期待することができるくらいですよ。あの時わたしは、あなたの性格を当てにしていたんです、ロジオン・ロマーヌイチ、何よりも一ばん性格を当てにしていたんです！　あの時はそれこそ、あなたの人となりに望みをおいてたんですよ」

「ですがそれにしても、あなたはなんだってそんな事をおっしゃるんです？」自分の質問の意味をよく考えもしないで、とうとうラスコーリニコフはこうつぶやいた。『やつはいったいなんのことを言ってるんだろう？』と彼は内心ひそかに途方に暮れていた。『ほんとうにおれを無罪だと思ってるんだろうか？』

「なんだってこんなことを言うのかですって？　話をつけに来たんですよ。つまり、これを神聖な義務と心得ま

してね。わたしは何もかも洗いざらい、あの時のいわば心の迷いを一部始終、ありのままお話ししてしまいたいのです。わたしはあなたにもずいぶんくるしい目をおさせましたね、ロジオン・ロマーヌイチ。しかし、わたしだって悪人じゃありませんからね。わたしだってわかっていますよ。いろいろの事情に虐げられながら、しかも気位の高い、誇りの強い、気短かな――特にこの気短かな人にとって、こういう苦しみを背負っていくのがどんなかというくらいは、十分承知しておりますとも。わたしはいずれにしても、あなたをこの上もない高潔な方として、いや、それどころか、寛大というものの胚子を持った方として、尊敬しておるのです。もっとも、あなたの信念に一から十まで、同意するわけじゃありません。これは義務として率直に、十分な誠意をもって、あらかじめ申し上げておきます。わたしは何よりも、人をだますのが嫌いなのですからね。あなたの人となりを認識して、わたしは心ひかれる思いがしたんですよ。あなたはわたしのこういうことばを聞いて、あるいはお笑いになるかもしれませんね？　いや、その権利がおありですとも。あなたがわたしを最初の一目から嫌っていらっしゃるのは、わたしは知っております。また事実、好きになるわけがありませんやね。けれど、あなたはなんとお思いなさろうとご勝手ですが、わたしは今自分としては、あらゆる方法を尽くしてこれまでの印象を消した上、自分が誠意もあれば良心もある人間だということを、証明したいと思うのです。これはまじめに言ってるんですよ」

ポルフィーリイは品位を見せてことばを休めた。ラスコーリニコフは一種あたらしい驚愕の襲来を感じた。ポルフィーリイが、彼を無罪のように見なしているという想念が、突如かれを驚かしたのである。

「そこで、あのとき急に起こった顛末を一々順序立ってお話しする必要は、まあまあありますまい」とポルフィーリイはことばをつづけた。「わたしはむしろ余計なことだと思います。それに、わたしにはとてもできそうもありません。だって、これがどう得心のいくように説明できましょう？　まず最初は風評が立った。それがどんな風評で、いつ誰から出たか……そして、いかなる動機であなたの身にまで及んだかということも、やはりわたしはくだらない話だと思います。わたし一個についていうと、これは偶然の結果として起こったことなんです。全く最高の意味における偶然で、起こることもありうれば、起こらない事もありえたのです――では、いったいどんな偶然かというと、ふむ、これもやはり改めていうがものはないと思います。つまりいっさいのことが、風評と偶然が、その時わたしの頭の中で符合して、ある考えになったんですな。どうせもう白状するくらいなら、何もかもきれいに白状してしまいますが――あの時あなたに嫌疑をかけたのは、わたしが第一だったんですよ。なに、たとえば、あの質物に婆さんの覚え書きがあったとか、なんとかいう――あんなのは皆くだらないことです、あんなことは百でも、二百でも数えあげられますよ。それから、またあの時たまたま、わたしは例の警察署の

一件を詳しく聞いたんです。しかも、通りすがりにちょっと聞いたなどというのじゃなくって、ある特別なすばらしい話し手から聞いたんですからね。その男は自分ではそれと気がつかないで、この一幕を驚くほど飲み込んだのですな。こういうことがみんなあとからあとから、あとからあとからと重なっていったんですよ、ロジオン・ロマーヌイチ！　ねえ、それですもの、どうしてあの方向へ考えが傾かないでいられますか？　百のうさぎが集まったって、一ぴきの馬を創ることができんわけで、百の嫌疑も結局一つの証拠にはなりません。それはもうあのイギリスのことわざがいってるとおりです！　しかし、それは落ち着いた時の分別で、かっとなった時にそういうことが言っておられますか。何分、判事だって人間ですからね。そこへもってきて、わたしはあなたの論文を思い出したんです。ほら、初めてあなたがお訪ねくだすった時、くわしくお話しした雑誌の論文ですよ。わたしはあの時あなたをからかいました。しかし、あれはもっと先の方へあなたを釣り出すためだったんです。くり返して申しますが、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたはあまりこらえ性がなくて、あまり病的ですよ。あなたが大胆で、誇りが強く、まじめで、そして……感じていらっしゃる、あまり感じすぎるくらい感じていらっしゃる、そういうことは、わたしもずっと前からよく知っておりました。こうした色々な感じは、わたしには馴染の深いもので、あなたの論文にしても、わたしはなんだか覚えがあるような気持で読みました。それは眠れない晩、気ちがいみたいに興奮した気分で着想されるのです。胸がおどり高鳴って、圧迫された興奮の中に書かれたのです。この圧迫された誇りにみちた興奮というやつは、若い人にとって危険なものですて！　わたしはあの時愚弄しましたが、今はあえて言います。わたしは全体に、いや、文字の愛好者として、あの若々しい熱烈な最初の試作を非常に愛しているのです。あれは煙です、霧です、霧の中に絃が響いているのです。あなたの論文はばかばかしい空想的なものです。しかし、そこにはなんともいえない真摯な気持がひらめいています。若々しい不屈の誇りがあります。自暴自棄の勇気があります。あれは陰鬱な論文ですが、それもけっこう。わたしはあなたの論文を読むと、別にしまっておきました……その時わきへしまっておいて考えたのです。『この男はこのままじゃすむまい』ってね。さあ、こういうわけですもの、こういう前置きがあった後で、どうしてその次に起こったでき事に夢中にならずにおられましょう、考えてもごらんなさい！　ああ、とんでもない！　わたしは何も言ってるんじゃありませんよ！　わたしは今なにも断定してるんじゃありませんよ！　あの時わたしはただちょっと気がついたのです。いったいこれはなんだろう、とわたしは考えました。なんにもありゃしない、全くなんにもない、それこそ本当になんにもありゃしない。それに、そんな事で夢中になるのは、わたしとして、予審判事として、全く不都合なくらいです。わたしの手にミコールカというものがあって、しかも事実までそろってるんです

からね――いやそりゃなんとおっしゃっても、事実に相違ありません！　彼もまた自分相応の心理的方法をやっておるのです。この男も調べなきゃならん。何しろ生死にかかわる問題ですからね、ところで、今なんのためにこんなことを色々説明すると思います？　ほかでもありません、あなたはその知と情によって事態をよく了解していただき、あの時のわたしの毒々しいやり口に対して、わたしをお責めにならんようにというそのためです。もっとも、けっして毒々しいことなんかありませんがね、全くのところ、へ、へ！　あなたはなんですか、わたしがあの時あなたの住まいへ、捜索に来なかったとお思いですか？　来ましたよ、来ましたとも、へ、へ！　あなたがここで病床についておられた時に、やって来たんですよ。正式にでもなければ、またわたしという人間としてでもありませんが、とにかく来たんですよ。そして、あなたの住まいにあるものは、まだ証跡の消えないうちにと、髪の毛ひと筋残さないように、一々調べ上げたんですよ。しかし――umsonst（徒労）でした！　わたしはこう思ったのです――今にこの男はやって来る、自分の方からやって来る、しかも遠からずやって来る。もし罪があるなら、それこそ、もう必ずやって来るに違いない。ほかのものは来なくても、この男はやって来る、とこう考えたのです。それから、覚えていますか、ラズーミヒン君がいろんなことをしゃべり出したのを？　あれはあなたを興奮させるために、われわれのしくんだことで、あの男があなたにしゃべるように、わざと風説を放ったんですよ。何しろラズーミヒン君はああいう風な、公憤を押え切れない男ですからな。ザミョートフ君は何より一番に、あなたの憤りとあけっぱなしの大胆不敵さに、目をつけたんですよ。ねえ、だって料理店なんかで、だしぬけに、『おれは人を殺した！』などとずっぱり言ってのけるなんて、あまりに大胆ですよ、あまりに不敵ですよ。そこでわたしは、もし彼が有罪であるとすれば、実に恐るべき闘士だと思った！　実際その時そう思ったんですよ。それから待ちました！　あなたの来るのを一生懸命に待ちました！　ザミョートフはあの時あなたに圧倒されてしまったのです……つまり、そこが例のどっちにでもとれる心理というやつでしてな！　そうして、わたしはあなたを待っておると、どうでしょう神の恵みか、あなたがみえたじゃありませんか！　わたしは全く胸がどきんとしましたよ。ねえ！　なぜあなたはあの時いらっしゃる必要があったんでしょう？　それからあの笑い、覚えておいででしょう、あのときはいって来ながら立てられた笑い声、わたしはまるでガラスごしに見るように、すっかり見抜いてしまった。もしああいう特殊な事情の下にあなたを待っておるのではなかったら、それこそ何一つ気がつかなかったでしょうが、その気持でいるということは恐ろしいもんですな。それからあの時はラズーミヒン君が――あっ！　そうだ、石、石、覚えておいでですか、贓品（ぞうひん）をかくしてある石？　ね、わたしはその石がどこかの菜園にあるのが、まざまざと見えるような気がします。あなたはザミョートフに菜園とおっ

しゃったでしょう、それからわたしの所でもまた二度めにね。ところで、あの時例のあなたの論文を解剖しかけたとき、あなたが説明を始められたとき――それこそあなたの一語一語が、まるでその陰に別なことばを隠してでもいるように、二重になって響いたものです！　いやね、ロジオン・ロマーヌイチ、そうしたわけで、わたしは最後の柱まで来て、そこで額を打っ突けると、やっとわれに返ったんですよ。いや、おれとしたことが、これは何をしているのだ！　もしその気にさえなれば、こんなことはみな最後の一点一画に至るまで、反対の方面へでも説明ができるじゃないか。それどころか、その方がかえって自然に見えるくらいだと、自認せざるを得ないのでした。わたしも苦しみましたね！　『いや、せめて何かほんの毛筋ほどでも証拠が握れたら！……』と思っている矢先へ、例の呼鈴一件を聞き込んだ。わたしは思わずぞくぞくっとして、身震いがついたくらいでしたよ。さあ、これこそ毛筋ほどの証拠だ！　まさにそうだ！　もうその時わたしはとかくの判断などしなかった。ただもうそんな事をしたくなかったのです。実際その時は、あなたを自分の目で見るためなら、千ルーブリくらい自腹を切って投げ出したろうと思われるほどでしたよ。ほら、あの町人があなたに面と向って『人殺し』と言った後で、あなたはその男と百歩も並んで歩きながら、まるで百歩の間、一言もその男をなじることができなかった、その時のあなたの顔が見たかった！……ねえ、その背筋を走る寒けはどうです？　病中なかば熱に浮かされながら引いた呼鈴はどうです？　こういうわけですから、ロジオン・ロマーヌイチ、あの時わたしがあなたにあんな悪ふざけをしたのも、あながち驚くには当たらないでしょう？　それに、あなたはなぜちょうどあの時、わたしのところへみえたのです？　あなたもやはり、何者かに背中を衝かれたようなぐあいだったのでしょう、まったく。もしあの時ミコールカがわたしたちを引分けてくれなかったら、それこそ……あの時のミコールカを、あなた覚えておいでしょうな！　よく覚えておいでですか？　実際、あれは青天のへきれきでしたよ！　あれは雷が黒雲の間からとどろいて稲妻の矢がさっと一閃ひらめいたのです！　さあ、そこでわたしがあれをどう迎えたでしょう？　わたしはあんな稲妻の矢なんか、これっから先も信じなかった。それはあなたも自分でごらんになったとおりです！　どうしてどうして！　あの後、あなたがお帰りになってから、何かの点に対して、なかなかどうもつじつまの合った答弁を始めたので、さすがのわたしも驚いたくらいですが、しかしこれっぱかしも本当にはしませんでした！　ねえ、わたしも金剛石のように、うんとがっちりがんばり通したわけなんですよ。で、わたしは思いましたよ――どっこい赤ん目！　ミコールカなんかにそんな事ができてたまるもんか！」

「ラズーミヒンが今さき、僕にそう言いましたよ――あなたは今でもニコライを有罪と認めて、それを自分でラズーミヒンに力説なすったって……」

彼は息がつまり、しまいまで言うことができなかった。

彼は相手の腹を底の底まで見破って、自分で自分を拒否した人のように、名状し難い興奮のていで、耳をすましていた。彼は信ずるのを恐れた、そして信じなかった。まだ二様にとれることばの中をむさぼるようにかき回して、何かもっと正確な、もっとはっきりしたものをつかもうとあせった。

「ラズーミヒン君ですか！」今までずっと黙り続けていたラスコーリニコフのこの質問が、さもうれしくてたまらないように、ポルフィーリイは叫んだ。「へ、へ、へ！　いや、ラズーミヒン君なんかはあんな風に、わきの方へどけとかなくちゃいけなかったんですよ。二人（さし）の方が好ましい、他人は出しゃばらないでくれ、というやつですな。ラズーミヒン君のは見当ちがいだし、それに門外漢ですよ。わたしのところへ、それはそれはまっさおな顔をして駆け込みましてね……が、まあ、あの男なんかうっちゃっとけばいい、ここへ一緒にすることはありません！　ところで、ミコールカのことですがね、あれがどんな面白い創作の題材だか、ご存じないでしょう。つまり、わたしの解釈しているような意味でですよ。まず第一に、あれは未成年のからねんねえです。そして臆病者というのでもないが、まあ、一種の芸術家みたいなものですな。いや、全く。わたしが彼をこんな風に説明したからって、お笑いになっちゃいけません。無邪気で、何事に対しても感受性を持っていて、真情があります、つまり夢想家（ファンタスト）なんですな。あの男は歌もうたえば、踊りもやるし、話をさせれば、よそからわざわざ聞きに来るほど上手だそうです。学校へも通ってるし、箸（はし）のころんだことにもぶっ倒れるほど笑いこけるが、また正体なしに酔いつぶれもする。しかしそれも道楽で飲むのじゃなく、時々飲まされるとやるんで、まだ子供っぽいんですよ。あの時彼は盗みを働いたが、自分じゃそれを知らないんですな。『床の上に落ちたのを拾ったのが、なんで盗みだ？』というわけでね。ときに、あなたはあの男が分離派教徒（ラスコーリニック）なのをご存じですか？　いや分離派教徒というでもないが、何か別派の教徒なんですよ。あの男の一族には、ベグーン派（最も原始的な民間の一宗教）の者がいたんですからね。かれ自身もつい最近までまる二年間も、村のある長老（スタレッツ）の下で聴法者生活をしておった。こういう話はすべてミコールカ自身と、同郷のザライスクの人間から聞いたんですよ。それどころか！　いきなり荒野へ苦行に出かけようとしたこともあるんですからな！　なかなか熱心でね、毎晩神さまにお祈りもすれば、古い『本当の』書物を読んで、読みふけったものなんですよ。ところが、ペテルブルグ――ことに女と酒が、彼に強烈な作用を及ぼしたんです。もともと感受性の強い男だもんだから、すぐ長老のことも、何もかも忘れてしまったのです。こういう話も聞いて知っとります。ここのある画家があの男を可愛いがって、ちょいちょい訪ねて行くようになった。そこへ今度の騒ぎがやって来たんですな！　すると、すっかりおじ気がついてしまって、首をくくろうとする、ね！　逃げようとする、ね！　いや、わが法律に対する民衆の観念と来たら、どうも始末

におえない。中にはただ『裁判される』ということばを恐れるのがいるんですからな。これは誰の罪でしょう！

新制度による裁判は、今に何か答えを与えるでしょう。どうかそうありたいものですて！　さてそこで、監獄へはいってみると、また有難い長老さまのことが思い出されたとみえるんです。でまた聖書が出てきたわけです。ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、彼らのある者にとって、『苦患（くげん）を受ける』ということが何を意味するか、おわかりですか！　それはもう誰のためというのではなく、『ただ苦しまねばならぬ、苦患を受けねばならぬ』というのです。ましてお上から受ける苦患なら、なおさらだってわけですよ。わたしの知っている中にも、こういう例がありました。あるきわめて恭順な囚人が、まる一年ばかり入獄している間、毎晩毎晩暖炉の上で聖書ばかり読んでおりました。一生懸命に耽読（たんどく）して、それに凝り固まってしまいましてな、別にどうという訳もないのに、煉瓦（れんが）を拾って来て、何一つひどい扱いもしない典獄にほうりつけたものです。ところで、そのほうりつけ方がふるってる、つまりけがのないように、わざわざ一アルシンも脇へよけて投げたんですよ！　が、長官にものを投げつけた囚人がどんなことになるか、わかり切った話です。そうしてつまり『苦しみを受けた』というわけですよ。そこでわたしも今、ミコールカが『苦しみを受けようとしている』か、あるいは、それに似寄ったことをしたがっていると、こう疑うのです。いや、もう事実上明確にわかってるくらいです。ただわたしが知っているってことを、当人が知らないだけなんですよ。どうです、あんな民衆の中から、空想家が出て来るということを、あなたは否定なさいますか！　いや、もうざらですよ。そこでまた長老が心に働きかけてきた。ことに首をくくろうとした後では、いっそうしみじみと思い出されたのです。もっとも、今に自分からやって来て、何もかもわたしに打ちあけますよ。あなたあれに持ち切れるとお考えですか？　まあ待ってごらんなさい。今にかぶとを脱ぐにきまっているから！　わたしはもう今か今かと、あの男が口供を否定にやって来るのを、待っているんですよ。わたしはあのミコールカが好きになったので、根本的に研究するつもりです。ねえ、あなたはどうだとお考えになりました！　へ、へ、へ！　あの男はある点に対しては、実によくつじつまの合った答弁をしましたよ。必要な材料を供給してもらったとみえて、うまく準備していましたよ。ところが、その他の点になると、もうまるで水たまりへでも落ちたように、てんで何一つ知りゃしない、芋の煮えたもご存じない。しかも自分が何も知らないことを、ご当人いっこうご存じないんですからな！　いや、ロジオン・ロマーヌイチ、これはミコールカじゃありませんよ！　これは幻想的な事件です、陰鬱（いんうつ）な事件です、人心が溷濁（こんだく）し、血で『一掃する』という文句が到るところに引用され、全生活が安逸（コムフォート）を旨とする現代のでき事です。そこには机上の空想と、理論的にいらいらさせられる心があるのです。そこには第一歩に対する決断が見られます。しかし、これは特殊な性質の決断です――ま

るで山からころげ落ちるような、あるいは鐘楼から飛びおりるような気持で決心したので、犯罪に向かっていくのにも、まるで足が地についていない。自分のはいったあとのドアをしめることも忘れながら、とにかく殺した、二人まで殺した、理論によってね。殺したには殺したが、金をとることはし得ないで、どうやらこうやら持ち出したものは、石の下へ隠してしまった。しかも、兇行（きょうこう）の現場でドアのかげに隠れていたとき、外からドアをたたいたり押したりして呼鈴をがらがら鳴らしたりした――その時の苦痛だけでは足りないで、その後また半ば熱に浮かされながら、その呼鈴を思い出すために、もう空き家になっているその住まいへ出かけて行った。背筋を走った悪寒を、いま一度経験したいという要求が起ったんですな……しかし、まあそれは病気のせいとするにしても、まだこういうことがある。人を殺しておきながら、自分を潔白な人間だと思って、他人を軽蔑（けいべつ）し、青ざめた天使のような顔をして歩き回っている――なんの、これがどうしてミコールカなもんですか、ロジオン・ロマーヌイチ、これはミコールカじゃありませんよ！」

この最後のことばは、その前に語られた否定めいたことばの続きとしては、あまりに思いがけないものだった。ラスコーリニコフはまるで突き刺されたように、全身わなわなと震え出した。

「では……誰が殺したんです？……」彼はがまんし切れなくなり、あえぐような声で尋ねた。

ポルフィーリイは、まるで思いもよらぬ質問にあきれ果てたように、椅子の背へさっと身を反らした。

「え、誰が殺したかですって！……」自分の耳が信じられないように、彼はこう問い返した。「そりゃあなたが殺したんですよ、ロジオン・ロマーヌイチ！　あなたがつまり殺したんです」彼はほとんどささやくような、とはいえ十分確信のこもった声で、こう言い足した。

ラスコーリニコフは椅子からおどり上がって、幾秒間か突っ立ったままでいたが、やがて一言（ひとこと）も言わずにまた腰をおろした。小刻みなけいれんがふいに彼の顔面を走った。

「唇がまたあの時のように震えていますぜ」とポルフィーリイは同情さえ帯びたような調子でつぶやいた。「ねえ、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたはわたしのことばを見当ちがいに解釈なすったようですな」しばらく無言の後、彼はまた言い足した。「だから、そんなにびっくりなすったんです。わたしがこんにち伺ったのは、つまり何もかもすっかり言ってしまって、事柄を明らさまに運ぼうと思ったからなんです」

「あれは僕が殺したのじゃありません」何か悪いことをしている現場を押えられて、びっくりした小さい子供のような調子で、ラスコーリニコフはささやいた。

「いいや、あれはあなたです、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたです、ほかに誰もありません」いかつい確信に満ちた声で、ポルフィーリイはこうささやいた。

彼らは二人とも口をつぐんだ。沈黙は奇妙なほど長く、ものの十分ばかりも続いた。ラスコーリニコフはテーブ

ルに肘づきして、無言のまま指で髪をかき回していた。ポルフィーリイはおとなしく腰かけたまま、じっと待っていた。ふいにラスコーリニコフは、さげすむようにポルフィーリイを見上げた。

「ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、またあなたは古い手を出しましたね！　相も変わらず、例のあなたの手口だ！　よくそれで飽きないもんですねえ、実際？」

「ええ、もうたくさんですよ、今のわたしに手口も何もあるもんですか？　もしここに証人でもあれば別の話ですが、われわれは二人きり差し向かいで、内証話をしてるんじゃありませんか。ごらんの通り、わたしはあなたをうさぎのように追いかけて、つかまえに来たのじゃありません。自白をなさろうとなさるまいと――今この場合おなじことです。あなたがなんとおっしゃらなくても、わたしの腹の中でちゃんと確信してるんですから」

「それなら、なぜおいでになったんです？」とラスコーリニコフはいらだたしげに尋ねた。「僕はまた以前の質問を発しますが、もし僕を有罪と認めておられるなら、どうして収監しないんです？」

「はあ、その質問ですか！　よろしい個条を追ってお答えしましょう。第一、あなたをそういきなり逮捕するのは、わたしにとって不利だからです」

「なぜ不利なんです！　もしあなたが確信しておられるなら、そうしなくちゃならないはず……」

「ええっ、わたしの確信がなんです？　こんな事はすべて今のところ、わたしの空想にすぎないんですからね。それに、あなたを監獄へ入れて落ち着かせる必要が、どこにあるんです？　あなたは自分から要求していらっしゃるくらいだから、自分でもおわかりになるでしょう。たとえば、あなたをあの町人に突き合せたって、あなたはただこう言われるだけです。『きさまは酔っ払ってるのかどうだ？　おれがきさまと一緒にいたところを誰が見た？　おれはただきさまを酔っ払いと思ったんだ。それに実際、きさまは酔っ払っていたじゃないか』――さあ、その場合わたしはこれに対して、なんと言えばいいんです。まして、やつの言うことより、あなたの申し立ての方が本当らしいんですからな。だって、やつの口供は、ただ心理だけですが――そんなことはああいう面をしてちゃ、第一柄に合いませんよ――ところが、あなたの方は急所を突いてるわけですからね。何分あの野郎、大酒呑みで通っておるんですよ。それに、わたし自身がもう幾度となく、この心理主義が両方に尻尾を持っていることを、ちゃんと白状しましたからね。それどころか、うしろの尻尾の方が大きくて、ずっと本当らしいほどですが、今のところわたしはそれ以外、あなたに対抗すべく何一つ持っていないことまで白状しました。それに、結局はあなたを収監することになるでしょうし、第一、こうして何もかもあらかじめあなたに声明するために、自分からわざわざやって来たのですが（世間並みのやり方じゃありませんやね）、それでも結局あなたに向かって（これも世間並みじゃありませんが）、こんな事をするのはわたしにとって不利だと、真っ直ぐに言ってるん

ですからね。さて第二に、わたしがやって来たわけは……」

「さあ、それで第二の理由は？」（ラスコーリニコフはやはりまだ息を切らしていた）

「そのわけはもうさっき言ったとおり、わたしはあなたと話合いをつけるのが、自分の義務だと考えるからです。わたしはあなたに悪人と思われたくない、まして、本当になさろうとなさるまいとご勝手ですが、わたしは心からあなたに好意を持っているんですから、なおのことです。したがって第三に、わたしはいさぎよく自首なさいと、真正面から歯を衣（きぬ）きせずおすすめしようと思って、ここまでやって来たのです。これはあなたにとってどれだけ有利かしれないし、またわたしにとってもやはり有利なんです――肩の荷がおりますからね。さあ、どうです、わたしとしてざっくばらんな態度じゃありませんかね？」

ラスコーリニコフはちょっと考えていた。

「ねえ。ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、あなたは自分で心理だけだと言いながら、やっぱり数学に入りこんでおしまいになりましたね。それで、もしあなたの考え違いだったらどうします？」

「いや、ロジオン・ロマーヌイチ、考え違いじゃありません。例のほんの毛筋ほどの証拠を握ってるんですからね。その毛筋ほどのやつを、わたしはあの時見つけたのです。神さまが授けてくだすったんです！」

「毛筋ほどのやつって？」

「それは言いますまい、ロジオン・ロマーヌイチ。それにどっちみち、わたしも今はもうこの上ゆうよする権利がないから、いよいよ収監します。だから、あなたもよく分別なさい――今となったら、わたしにとってはどちらでも同じことです。したがって、唯（ただ）あなたのために言ってるだけなんです。全くその方がいいですよ。ロジオン・ロマーヌイチ！」

ラスコーリニコフは毒々しい薄笑いを漏らした。

「こうなると、もうおかしいのを通りこしますよ。それは無恥というものです。まあ、仮りに僕が有罪だとしても（そんなことは僕けっして言やしませんが）、あなた自身がもう僕を収監して、落ち着かせてやると言っておられるのに、僕の方からわざわざ自首して出るわけがないじゃありませんか？」

「ええっ、ロジオン・ロマーヌイチ、そうことば通りにおとりなすっちゃいけませんよ。事によったら、そう落ち着くわけにいかないかもしれませんからね！　だって、これはただの理論で、しかもわたしの理論なんですよ。え、わたしなんかがあなたに対して、なんの権威（オーソリティ）になれます？　もしかすると、わたしは今でもあなたに、何かかくしているかもしれませんぜ。わたしにしたって、いっさいあなたにぶちまけてしまうわけにはいきませんからね、へ、へ！　そこで第二段として、あなたにとってはどんな利益があるかという問題です。ねえ、そうすればどんな減刑を受けることになるか、それはおわかりでしょうな！　だってこの自首がどういうとき、どうい

う瞬間に当たるのか、よく考えてごらんなさい！　もうほかの男が自分に罪を引受けて、事件をすっかりこんぐらかしてしまった時じゃありませんか？　わたしは神の前に誓って申しますが、あなたの自首はぜんぜん突発的に起こったことのように、『あすこで』（法廷の意）うまくつくろってこしらえて上げますよ。あんな心理はまるでないものにします、あなたに対する嫌疑はみな闇から闇に葬ってしまいます。そうすればあなたの犯罪も、一種の頭脳の混迷という風になります。もっとも、正直なところ、混迷に違いありませんからね。わたしは潔白な人間です、ロジオン・ロマーヌイチ、自分のことばは守ります」

　ラスコーリニコフはもの悲しげに沈黙して、頭（こうべ）をたれてしまった。彼は長いことを考えていたが、ついにまたにやりと笑った。けれど、それはもうつつましい沈んだ笑いであった。

「ええっ、いりません！」まるでポルフィーリイにかくそうともしないような調子で彼は言った。「そんなことをする価値はない！　僕は何も、あなた方に減刑してもらう必要はないんだ！」

「さあ、それをわたしは恐れていたのですよ！」ポルフィーリイは熱した調子でほとんどわれしらずといったように叫んだ。「つまり、それをわたしは恐れていたのですよ――減刑なんかしていらないというやつをね」

　ラスコーリニコフはもの悲しげな、しみ入るような目で彼を見ていた。

「いや、命を粗末にしちゃいけませんよ！」ポルフィーリイはことばを続けた。「あなたはこの先まだまだありますよ。どうして減刑が不必要なんです、どうして不必要なんです！　あなたは実にこらえ性（しょう）のない人ですなあ」

「何がそんなにあるんです？」

「生活が！　いったいあなたは予言者でもあるんですか、いったいどれだけのことをご存じなんです？　求めよさらば与えられんですよ。おそらく、神もここにあなたを期待しておられるのかもしれませんからね。それに、あれだって永久なものじゃありませんしね、鎖だって……」

「減刑がある、ですかね……」とラスコーリニコフは笑い出した。

「なんです、あなたはブルジョア的な恥辱でも気にしていらっしゃるんですか？　どうやらそいつをびくびくして、しかも自分で気がおつきにならんらしい――だからお若いと言うんです！　が、それにしても、あなたが恐れたり、自首を恥ずかしがったりすることは、別になさそうなもんですがね」

「ええっ、ばかばかしい！」ラスコーリニコフは口をきくのもいやだという風に、嫌悪の表情でさげすむように言った。

　彼はどこかへ出て行こうとでもするように、またちょっと腰を上げたが、ありありと絶望の色を面に現わして、すぐまた腰をおろしてしまった。

「それだ、それだ、それがばかばかしいなんて！　あなたは信頼の念というものをなくしてしまったもんだから、わたしがあなたに見え透いた世辞でも言ってるようにお考えになる。いったいあなたはこれまでに、十分生活をしましたか？　十分物事がおわかりですか？　理論を考え出したところが、まんまとしくじって、どうもあまり平凡な結果になってしまったので、恥ずかしくなったんです！　結果は俗だった、それは事実です。しかし、あなたは望みのない卑劣漢じゃありません。けっして、そんな卑劣漢じゃない！　少なくとも、あなたはあまり長く自己欺瞞（ぎまん）をやらないで、一度に最後の柱へぶっつかったのです。いったいわたしはあなたをなんと見ていると思います？　わたしはあなたをこう見ています。あなたはただ信仰とか神とかを見つけさえすれば、よし腸を引出されようと、じっと立ったまま笑みを含んで、自分を苦しめる連中をながめている、そういう人間の一人だと思っています。だから、早くそれをお見つけなさい、そうすれば生きていかれますよ。あなたは、第一、もうとっくに空気を一変する必要があったんです。なに、苦痛もいいものですよ。お苦しみなさい。事によると、苦しみたいというミコールカの考え方が、あるいは本当なのかもしれません。そりゃわたしだって、容易に信じられないってことはよく承知しています――がまあ、あまり理屈っぽく詮索（せんさく）しないで、何も考えずにいきなり生活へ飛び込んでお行きなさい。心配することはありません――ちゃんと岸へ打上げて、しっかり立たせてくれますよ。では、どんな岸かといえば、それはわたしにゃわかりっこありませんよ。ただあなたはまだまだ生活すべきだと、こう信じておるだけです。あなたが今のわたしのことばを、紋切り型のお説法のようにとっておられるのは、わたしも承知しております。しかし、またあとで思い出されたら、役に立つことがあるかもしれません。それだからこそ言うのです。あなたがただ婆さんを殺しただけなのは、まだしもだったんですよ。もしあなたがもっとほかの理論を考え出したら、それこそ百億倍も見苦しいことをしでかしたかもしれませんよ！　まだしも神に感謝しなきゃならんかもしれませんて。なんのために神があなたを守ってくださるのか、そりゃ、あなただってわかりっこありませんや。あなたは大きな心になって、もう少し恐れないようにおなんなさい。目前に控えている偉大な実践を、あなたはびくびくしてるんですか？　いや、この場に及んでびくびくするのは、それこそ恥辱です。いったいああいう一歩を踏み出した以上、歯を食いしばって我慢しなくちゃいけません。それはもう正義です。だから、正義の要求するところを実行なさい。あなたに信仰がないのは、わたしも承知しているが、しかし大丈夫、生活が導いてくれます、やがて自分から好きになりますよ。あなたは今ちと空気が足りない、空気が、空気がね！」

ラスコーリニコフはぴくりとなった。

「あなたはいったい何者です！」と彼は叫んだ。「いったいあなたは予言者なんですか？　どんな権利があっ

て、そう偉そうに落ち着き払って、さも高みから見おろすように、りこうぶった予言をするんです？」
「わたしが何ものかって？　わたしはもうおしまいになった人間です、そりゃまあ感じもあれば、同情もあり、何かのこともちっとは心得た人間かもしれませんが、しかしもうおしまいになった人間です。ところが、あなたは別ものです。神はあなたに生命を準備してくだすったって、何も残らないかもしれない、そりゃ誰にもわかりませんがね）。あなたが別な人間の部類へ移ったからって、それがなんです？　まさか、あなたのような心をもっている人が、安逸（コンフォート）なんか惜しむのじゃないでしょう？　またあまりにも長い間、人があなたを見ないことになるかもしれないが、いったいそれしきのことでなんです？　問題は時にあるのじゃなくて、あなた自身の中にあるのです。太陽におなりなさい、そうすればみんながあなたを仰ぎ見ますよ！　太陽は、まず第一に太陽でなければなりません。あなたはまた何をにやにやなさるんです？　わたしがこんなシラーめいたことを言うからですか？　わたしは賭（かけ）でもするが、あなたはきっとわたしのことを、今おべっかで取り入ろうとしていると考えておいでなんでしょう！　いや、実際おべっかを言ってるのかもしれませんよ、へ、へ、へ！　ロジオン・ロマーヌイチ、あなたはわたしのことばなんか、まあ信じないがいいですよ。けっしてこれっから先も信じないがいいかもしれない――これはわたしの性癖なんだから。それに異存はありません。ただ一言つけ加えておきますが、わたしが、どれほど卑しい人間で、どれほど潔白な人間か、それはあなた自身に判断がつきそうなものですね！」
「あなたはいつ僕を逮捕するつもりです？」
「さあ、まだ一日半か二日くらいは、あなたに散歩をさせてあげましょう。ねえ、よく考えて、神に祈っておきなさい。それに、その方がとくですよ、全くとくですよ」
「が、もし僕が逃亡したら？」なんとなく妙ににやにやしながら、ラスコーリニコフは尋ねた。
「いや、あなたは逃げやしませんよ。百姓なら逃げるでしょう、近ごろはやりの分離派教徒なら逃げるでしょう――他人の思想の奴隷なら――なぜってそんな連中は、海軍少尉補のドゥイルカみたいに、ただ指の先をちょっと見せさえすれば、なんでも好きなものを、一生涯信じさせることができるんですからな。ところが、あなたはもう自分の理論も、信じちゃいらっしゃらないんだから――何も持って逃げるものがないじゃありませんか！　それに、逃亡生活に何があります？　逃亡生活はいやな苦しいものですよ。ところが、あなたにはまず第一に生活が必要です、確固たる状態が必要です、適当な空気が必要です。逃亡生活にあなたの空気があると思いますか？　一たん逃げても、また自分で帰って来ますよ、あなたはわれわれを離れちゃ、やってゆけないんです。もしわたしがあなたを牢に入れれば――ひと月なり、二月なり、三月なり暮らすうちに、あなたはふいにわたしの

ことばを思い出して、自分から自白にやってみえます。しかも、自分でも思いがけないくらいにね。まさか自白に行こうなんて、つい一時間前までは、自分でもわからないくらいでしょうよ。わたしは確信しておりますよ――あなたは『苦患（くげん）を受けようと考えつかれる』に相違ありません。今はわたしの言うことをお信じにならないが、自然そこへ来るに決まってますよ。なぜって、ロジオン・ロマーヌイチ、苦痛というやつは偉大なものですからな。どうかわたしがぶくぶくふとっているからって、そんなことを気になすっちゃいけませんよ。おっしゃるまでもなく、自分でよく知ってるんですから。そんなことを笑っちゃいけません。苦痛の中には理念があります。ミコールカの考える通りです。いや、あなたは逃亡なんかしやしませんよ、ロジオン・ロマーヌイチ」

ラスコーリニコフは席を立って、帽子をつかんだ。ポルフィーリイも同じく立ち上がった。

「散歩にでもお出かけですかな？　今晩はいい天気でしょうな。ただ夕立がなけりゃいいが。もっとも、その方がいいかもしれません。空気を清めてくれますからね……」

彼も同じく帽子に手をかけた。

「ポルフィーリイ・ペトローヴィッチ、どうかそんなことを考えないでください」ときびしい執拗（しつよう）な調子で、ラスコーリニコフは言った。「僕はいま白状したわけじゃありませんからね。あなたがあまり不思議な人だもんだから、僕はただ好奇心であなたのことばを聞いていただけです。僕はけっして何一つあなたに白状はしなかった……これを覚えていてください」

「いや、そりゃもう心得ております。覚えときましょう――まあ、どうだ、この震えていることは。いやご心配には及びませんよ、あなたのお心任せですよ。少し散歩していらっしゃい。ただあまり長い散歩はいけませんよ。それから万一のために、ちょいとしたお願いがあるんですが」と彼は声を落として言い足した。「それは少々言いにくいことですが、かんじんなことなんで。もし万が一（そんなことは、しかし、わたしも信じやしません、あなたがそんなことのできる人とは思っていませんからね）、もし万一――つまりその万々一の場合――この四、五十時間の間に別な方法で、何か突拍子もない方法で事件を片づけようということが、あなたの頭に浮かぶようなことがあったら――つまり自分で自分に手をかけるようなことがあったら（これはばかばかしい想像ですが、まあ一つ許してください）、その時は――短くてもいいから、要領を得た書きものを残して行ってください。ほんの一、二行、ただの一、二行でよろしい。石のことも書いてください――その方が堂々としていますからね。では、また……いいご思案と立派なご行為を祈ります！」

ポルフィーリイは妙に身をかがめて、なんとなくラスコーリニコフの視線を避けるようにしながら、出て行った。ラスコーリニコフは窓ぎわに寄り、いらいらしたもどかしい気持で、客が往来へ出て少し離れる時間を、胸の中で計りながら待っていた。それからやがて、自分も

せかせかと部屋を出て行った。

三

彼はスヴィドリガイロフのもとへ急いだのである。この男から何を期待することができたか――それは彼自身も知らなかった。けれどこの男には、彼を支配する一種の権力が潜んでいた。一度このことを意識すると、彼はもう落ち着いていられなかった。それに、今はもうその時機が来たのである。

道々、一つの疑問が特に彼を悩ました――いったいスヴィドリガイロフはポルフィーリイの所へ行ったのだろうか？

彼が判断し得たかぎりで、何を賭けて誓ってもいいと思ったのは――いや、行ってはいない！　という答えであった。彼はまたくり返しくり返し考えて、ポルフィーリイの訪問の一部始終を思い起こした上、いや、行ってはいない、もちろん行ってはいない！　と推定した。

が、もしまだ行かなかったとすれば、今後ポルフィーリイを訪ねるだろうか、訪ねないだろうか？　が、今のところ、訪ねないだろうという気がした。それはなぜか？

彼はそれも説明がつかなかった。けれど、よし説明がついたとしても、今の彼は特にそれで頭を悩まそうとはしなかったに相違ない。これらはすべて気にかかる事ばかりだったが、同時に彼はそれどころでないような気がした。実に奇怪な話で、誰もそんなことを信じないかもしれないが、彼は現在目前に迫った自分の運命について、

ほんのぼんやりと微かな注意しか払っていなかった。何かそれ以外にずっと重大な、並々ならぬものが、彼を悩ましていたのである――それは彼自身に関したことで、ほかの誰のことでもないけれど、何か別のことで、何か重大なことである。それに、彼は限りなく精神的疲労を感じていた。もっとも、この朝はこの二、三日に比べて、彼の理性はずっと確かに働いていたけれど……

それに、ああいう事のあった今となって、こんなくだらない新しい困難を征服するために、努力を払う価値がはたしてあるだろうか？　たとえば、スヴィドリガイロフがポルフィーリイを訪ねないように、努めて策略をめぐらす価値がどこにある！　スヴィドリガイロフ風情のために、研究したり、調べたり、ひまをつぶしたりする価値があるものか！

ああ、こんなことはすべてたまらなくあきあきしてしまった！

が、それにもかかわらず、彼はやはりスヴィドリガイロフのもとへ急いだ。はたして彼はこの男から何か新しい暗示なり、逃げ道なりを期待しているのか？　じっさい、人はわらしべにでもつかまろうとするものである！

彼ら二人を一緒にしようとするのは、宿命とでも言うのだろうか、それとも何かの本能か？　事によったら、これはただ疲労の結果かもしれない、絶望のためかもしれない。またもしかしたら、必要なのはスヴィドリガイロフではなく、誰かほかの人かもしれない。スヴィドリガイロフはただ偶然そこに介在しただけかもしれぬ。ではソーニャだろうか？　しかし、今なんのためにソーニャのところへ行くのだ？　またしても彼女の涙をねだるためか？　それに、彼はソーニャが恐ろしかった。ソーニャは彼にとって頑として動かぬ宣告であり、変わることのない決定であった。問題は――彼女の道を選ぶか、彼自身の道を進むかである。特にいま彼はソーニャに会うことはできなかった。いや、それよりスヴィドリガイロフを試みた方がよくはなかろうか。そもそも彼は何ものだろう？　彼はずっと以前から、なんとなくこの男が何かのために必要なのをひそかに自認しないわけにはいかなかった。

が、それにしても、彼らの間にいったいいかなる共通点がありうるだろう？　彼らの間では悪事すらも一様ではあり得なかった。この男はその上、あまりといえば不愉快で、この上ない淫乱（いんらん）ものらしく、きっと狡猾（こうかつ）な嘘つきに相違ない。あるいは、恐ろしく悪意の強い人間かもしれない。彼については大変な噂が行なわれている。もっとも、彼はカチェリーナの子供の面倒をみたが、しかしそれはなんのためやら、どんな意味を蔵しているのやら、しれたものではない。この永久に何かの野心や、たくらみを持っているのだ。

この二、三日というもの、ラスコーリニコフの頭には、絶えずある一つの想念がひらめいて、恐ろしく彼を不安にしていた。もっとも、彼はしきりにそれを追い退けようと努めていたが、それほどこの想念は彼にとって苦しかったのである！　彼は時々こんなことを考えた――ス

ヴィドリガイロフは絶えず彼の身辺をうろうろしていた、今でもうろうろしている。スヴィドリガイロフは彼の秘密を嗅ぎつけた、スヴィドリガイロフはドゥーニャに野心をいだいていた。で、もし今もやはりいだいているとすれば？　この問いに対してはほとんど確実に、しかりと答えることができる。もし、いま彼がラスコーリニコフの秘密を知り、それによって彼に対する支配権を得た以上、それをドゥーニャに対する武器に使用する気になれば……

この考えは時々夢にさえ彼を苦しめたが、意識的にはっきりと現われたのは、今スヴィドリガイロフのところへ足を向けた、この時が初めてだった。彼はこう考えただけでも、暗鬱な憤怒に引込まれた。第一そうなれば、もう何もかも一変してしまう。彼自身の状態にすら変化が生ずる。つまり、今すぐドゥーニャに秘密を打明けねばならぬ。もしかすると、ドゥーネチカに何か不用意な行為をさせないために自分自身を法の手に渡さねばならぬかもしれない。手紙と言ったな？　今朝ドゥーニャは何かの手紙を受け取った！　ペテルブルグに来て、彼女が誰から手紙を受けるはずがあろう？　（まあ、ルージンくらいなものか？）もっとも、そんな時にはラズーミヒンが守っていてくれるけれど、ラズーミヒンはなんにも知らない。事によったら、ラズーミヒンにも打明けねばならぬかもしれない！　ラスコーリニコフは嫌悪の情を覚えながら、このことを考えた。

何はともあれ、一刻も早くスヴィドリガイロフに会わねばならぬ――と彼は腹の中できっぱり決心した。有難いことに、ここで必要なのは、詳しいこまごました事というよりも、むしろ事件の本質である。しかし、もし彼がそういう事をしかねない男だったら――もしスヴィドリガイロフがドゥーニャに対して、何かたくらんでいるとしたら――その時は……

ラスコーリニコフは最近、ことにこの月じゅう、ずっとへとへとに疲れ切っていたので、もはやこうした問題になると、「その時はあいつを殺してやる」という唯一の決心よりほか、どうにも解決ができなかった――彼は冷やかな絶望を覚えながらまたそれを考えた。重苦しい感じが心臓をおしつけた。彼は往来のまんなかに立ち止まり、どの道を通ってどこへ迷い込んだかと、あたりを見回し始めた。と、彼はいま通り抜けた乾草広場から三、四十歩隔てた××通りに自分を見出した。左手のとある家の二階は、そっくり一軒の料理屋で占領されていた。窓という窓はいっぱいにあけ放されている。窓に動いている人影から見ると、店は客でいっぱいらしかった。広間には歌声があふれ、クラリネットやヴァイオリンが響き、トルコ太鼓がとどろいていた。女の黄色い叫び声も聞こえた。彼はなんのために××通りへ曲がって来たのかと怪しみながら、引っ返そうとする拍子にふと見ると、片端のあけ放された窓の一つに茶テーブルに向かってパイプをくわえているスヴィドリガイロフの姿が目にはいった。これはなんとも言えないほど、ぞっとするほど彼の胸を打った。スヴィドリガイロフは黙って彼をじろじ

ろ観察していた。そして同じくラスコーリニコフを驚かした事だが、彼はどうやら自分に気づかれないうちに、こっそり逃げようと腰を持ち上げかけたらしい。ラスコーリニコフはすぐさま自分でも彼に気づかず考え込みながら脇を見ているような振りをして、引続き目の隅で彼を観察していた。心臓は騒がしく鼓動した。はたしてその通りである。スヴィドリガイロフは明らかに、人に見られるのを嫌がっているらしかった。彼は唇からパイプを離して、あわや今にも姿を隠そうとした。が、身を起こして椅子をのける拍子に、ふとラスコーリニコフが彼を見つけて観察しているのに気がついたらしい、二人の間には、彼が半醒半睡のラスコーリニコフをその部屋に訪れた、最初の会見の一場に似たものが生じた。ずるそうな微笑がスヴィドリガイロフの顔に現われ、それがだんだん広がって行った。そして二人ともお互い同士を見て、観察しているのを悟った。とうとうスヴィドリガイロフは、からからと大きく笑った。

「さあ、さあ！　よろしかったら、どうぞおはいりください。わたしはここにいますから！」と彼は窓から叫んだ。

ラスコーリニコフは料理店へ上がって行った。

彼は大広間に隣り合った、窓一つしかない、いたって小さな奥の部屋に、スヴィドリガイロフを見出した。広間では二十ばかりの小テーブルに向かって、歌うたい連の合唱を聞きながら、商人や、官吏や、その他あらゆる種類の人が茶を飲んでいた。どこからか、球を突く音が響いて来た。スヴィドリガイロフの前の小テーブルには口をあけたシャンパンの瓶と、半分ばかり酒をついだコップがおいてあった。そのほか部屋の中には、小形な楽器を持った手風琴回しの子供と、縞のスカートの裾をからげ、リボンつきのチロール帽子をかぶった、健康そうに頬の赤い十八ばかりの歌うたいの女がいた。娘は隣室の合唱にもめげず手風琴の伴奏に合わせて、だいぶ嗄れたコントラルトで、何やら下男くさい歌をうたっていた……

「いや、もうたくさん！」とスヴィドリガイロフは、ラスコーリニコフのはいって来るのを見て、彼女の歌をさえぎった。

娘はさっそく歌をぷつりと切って、うやうやしげな期待の格好で控えていた。彼女はその韻を踏んだ下男情調まで、やはりまじめなうやうやしい表情で歌っていたので。

「おい、フィリップ、コップだ！」とスヴィドリガイロフは叫んだ。

「ぼく酒は飲みません」とラスコーリニコフは言った。

「どうぞご勝手に、これはあなたのためじゃないんで。さあ、飲め、カーチャ！　今日はもうこれでいいよ、お帰り！」

彼は娘に酒を一杯ついでやり、黄色い一ルーブリ紙幣を一枚出した。カーチャは、女が誰でもするように一息に、つまり唇を放さず二十口ばかりに酒を飲み乾すと、紙幣を取ってスヴィドリガイロフの手を接吻した。こち

らは大まじめでその接吻を許した。娘は部屋を出て行った。手風琴を持った男の子も後ろに続いた。二人は往来から呼び込まれたのである。スヴィドリガイロフがペテルブルグへ来てまだ一週間にもならないのに、彼の周囲のものは何もかも古い族長的な感じになり切っていた。ここの給仕のフィリップもちゃんと『お馴染(なじみ)』になり、彼の前でぺこぺこしているし、広間へ通ずるドアはしめ切ることになっていた。スヴィドリガイロフはこの部屋をわが家(や)のようにして、幾日も幾日もここで居続けするらしかった。この料理店はやくざできたならしく、二流とまでもいかないくらいだった。

「僕はあなたんとこへ行こうと思って、捜していたとこなんですが」とラスコーリニコフは口を切った。「ところが、今どうして僕は急に乾草広場(センナヤ)からこの通りへ出たんだろう！　僕は今まで一度もこっちへ曲がったこともなければ、ここへ寄ったこともなかったのに。僕はいつも乾草広場(センナヤ)から右へ曲がるんです。第一、あなたんとこへ行く道はこっちじゃない。ところが、ふっと曲がると、この通りあなたに出くわした！　どうも不思議だ？」

「なぜあなたは率直におっしゃらないんです――これは奇跡だって！」

「なぜって、これはただ偶然にすぎないかもしれないじゃありませんか」

「いや、どうもこの人たちはなんという考え方をするんだろう！」とスヴィドリガイロフはからからと笑い出した。「腹の中じゃ奇跡を信じていたって、けっして白状しないんですからね！　あなたも現に、偶然にすぎない『かもしれぬ』とおっしゃるじゃありませんか。自分自身の意見というものについて、ここの人たちがみんなどれくらい臆病(おくびょう)者か、あなたにはとうてい想像もつきますまい、ロジオン・ロマーヌイチ！　わたしはあなたの事を言ってるんじゃありませんよ。あなたは自分自身の意見を持っていらっしゃる、そしてそれを持つことをびくびくなさらなかった。で、つまりあなたはわたしの好奇心をおひきになったわけです」

「そのほかには何もありませんか？」

「だって、それだけでもたくさんじゃありませんか」

スヴィドリガイロフは明らかに興奮しているらしかった。が、それはほんのちょっとだった。酒はやっとコップに半分しか飲んでいなかったのである。

「だってあなたは僕のことを、あなたのいわゆる自分自身の意見を持ちうる人間だとご承知になる前に、僕のところへ見えたように覚えていますが」とラスコーリニコフは注意した。

「いや、あの時は話が別でしたよ。誰にだってそれぞれ目的がありますからね。奇跡という点で、わたしはあなたに申し上げますが、どうやらあなたはこの二、三日、眠りとおされたらしいですね。わたしは自分であなたに、この料理屋をお教えしといたんですから、あなたが真っ直ぐにここへいらっしたからって、別に奇跡なんかありゃしません。わたしは自分で道筋を詳しく説明して、この店のある場所と、ここでわたしに会える時間まで、お

教えしといたんです。覚えていますか？」
「忘れました」とラスコーリニコフは驚いて答えた。
「本当でしょう。わたしはあなたに二度も言ったんですよ。だから、ここの所が機械的にあなたの記憶に刻み込まれたのです。それで、あなたも自分じゃわからないなりに、ちゃんとその指定どおり、しかも機械的にこっちへ曲がって来たんです。わたしはあの時そう言いながらも、あなたがわかってくださろうとは期待していなかった。どうもあなたはあまり自分の本性を暴露しすぎるようですな、ロジオン・ロマーヌイチ。ああ、それからついでに――わたしはこういう事を確かめました。ペテルブルグでは、歩きながらひとり言を言う人がたくさんあります。こりゃ半気ちがいの街ですよ。もしわが国に本当の科学があったら、医者も、法律家も、哲学者も、それぞれ自分の専門にしたがって、ペテルブルグを対象に極めて貴重な研究をすることができたでしょうよ。ペテルブルグほど人間の心に陰鬱険峻（いんうつけんしゅん）な、奇怪な影響を与えるところはまずあまりありますまいよ。気候の影響だけでも大したものです！　ところが、これは全ロシアの政治的中心なので、その特性が万事に反射せざるを得ません。しかし、今の問題はこんなことじゃありません。問題はわたしがもう幾度となく、あなたを脇から観察していたということです。あなたは家を出るときには、まだ頭を真っ直ぐにして歩いていらっしゃる。ところが、二十歩あたりからもうぐったりたれてしまって、両手をうしろに組む。そして目はあけていらっしゃるが、たしかに前も脇の方も、いっさい見てはいらっしゃらない。そしてしまいには唇をもぐもぐ動かして、ひとり言をお始めになる。その上、時には片手を振りまわして、朗誦（ろうしょう）のような事を始め、あげくの果てには、ながあく往来のまんなかに立ち止まっておしまいになる。これははなはだよくないですなあ。事によると、わたしのほかにまだ確か、あなたに目をつけてる人がないとも限らない。これなどははなはだ不利ですからな。わたしにしてみりゃ、実のところどうでもいいことです。わたしにあなたの治療ができるわけでもありませんし。ですが、あなたは、もちろん、わたしの言うことがおわかりでしょうね」
「じゃ、僕が尾行されてるのをご存じなんですか？」探るような目つきで彼に見入りながら、ラスコーリニコフは尋ねた。
「いや、なんにも知りませんよ」さもおどろいたような顔をして、スヴィドリガイロフは答えた。
「ふん、では僕のことはかまわんでもらいましょうか」とラスコーリニコフは眉をしかめ、つぶやくように言った。
「よろしい、あなたのことは構わんとしましょう」
「それよりも、あなたがここへよく飲みに来られ、しかも僕に来いと言って、自分で二度まで指定してくだすったのなら、なぜいま僕が通りの窓を見た時に、隠れるように行ってしまおうとなすったんです？　それを聞かせてください。僕はちゃあんとそれに気がつきましたよ」
「へ、へ！　ではいつぞやわたしがあなたの部屋のしき

いの上に立った時、なぜあなたは目をつぶって長椅子の上に横になったまま、自分じゃまるで眠ってもいないのに、眠ったような振りをなすったんです？　わたしはちゃあんとそれに気がつきましたよ」
「僕には……それだけの理由が……あったかもしれませんよ……それはご自分でおわかりのはずです」
「わたしだって、それだけの理由があったかもしれませんよ。もっとも、あなたはそれをご存じないけれど」
ラスコーリニコフは、右の肘をテーブルに突き、その指でおとがいを支えながら、じっとスヴィドリガイロフに視線をそそいだ。彼はちょっと一分ばかりの間、これまでもたびたびショックを感じた相手の顔を、しげしげとみつめた。それはなんとなく仮面を思わせる奇怪な顔だった。唇はあざやかな紅色して、顎ひげは明るい亜麻色をおび、同じく亜麻色の髪はまだかなり濃く、ばら色の頬をした色白な顔である。目はなんだか少し青すぎて、その視線は何かあまり重苦しく、じっと動かなさすぎた。年にしてはずぬけて若々しく見える美しい顔には、なんだか恐ろしく不愉快なところがあった。スヴィドリガイロフの身なりは軽快なしゃれた夏着で、特にシャツに贅を見せていた。指には宝石入りの大きな指輪をはめている。
「いったい僕はまだあなたまで相手に、やっさもっさしなくちゃならないんですか」とラスコーリニコフはけいれんするみたいにじりじりしながらいきなりぶっつけに切り出した。「たとえあなたが、害を加える気になったら、非常に危険な人物であるにしても、僕はもうこの上苦労なんかしたくない。僕は今すぐあなたに証明してみせますが、僕はあなたが思っているほど、自分というものを大事にしちゃいないんですからね。ちゃんとお断わりしておきますが、僕があなたを訪ねて来たのはほかじゃありません。もしあなたが僕の妹に対して、あの以前の野心を捨てず、そのために最近知られた事実を何かに利用しようと考えているのだったら、あなたが僕を監獄へぶち込むよりも前に、僕はあなたを殺してしまうから、その事をじきじき言いに来たのです。僕の言うことは正確ですよ。僕が自分のことばを守りうる人間だってことは、あなたもご存じのはずです。第二に、もし何か僕に言明したいことがあるなら――だって、どうもこの間じゅうから、あなたは何やら僕に言明したがっておられるようだから――もしそうだったら、早く言ってください。一刻の時も大事ですからね。事によったら、もう間もなく手遅れになるかもしれないんですから」
「あなたいったいどこへそうお急ぎなんです？」好奇の目で彼をじろじろ見ながら、スヴィドリガイロフは問いかけた。
「誰にだってそれぞれ目的がありますからね」と陰鬱な調子でラスコーリニコフは気短に答えた。
「あなたはいま自分からざっくばらんな話を申し込みながら、もう第一の質問に対して返答を拒絶していらっしゃるじゃありませんか」とスヴィドリガイロフは笑顔で注意した。「あなたはいつも、わたしが何か目算を持っ

ているように思われるので、それでわたしを疑いの目で見ておられるのです。なに、それはあなたの立場として無理もない話です。わたしはずいぶんあなたと意気相投合したいとは思っておりますが、しかしわざわざ骨折ってあなたの疑いを解こうとも思いませんな。なあに、それほど大した問題じゃありません。それに、何もそう特別なことであなたと話し合うつもりもなかったですからね」

「じゃ、なぜあの時僕があんなに必要だったんです？　あなたはしきりに僕の尻を追い回していたじゃありませんか？」

「それはただ興味ある観察の対象としてですよ。あなたの状態の奇抜な点が、わたしの興味をひいた――つまりそのためなんですよ！　その上あなたは、非常にわたしの興味をひいた婦人の兄さんで、しかも以前わたしはその当の婦人から、あなたのことをしょっちゅう色々と聞いていたので、あなたがその婦人に大きな勢力を持っておられる、とこう推定したわけです。これでもまだ十分でありませんかね、へ、へ、へ！　もっとも、実をいえば、あなたの質問はわたしにとって、だいぶ複雑なんですよ。だから、それにお答えするのは骨なんです。だって早い話が、今あなたがわたしのとこへ見えたのも、ただ用件ばかりじゃなくて、何か新しいことを探りにいらしったんでしょう？　え、そうでしょう？　そうでしょう？」ずるそうな微笑を浮かべながら、スヴィドリガイロフは言いはった。「さて、そこで考えてみてください、わたし自身こっちへ来る汽車の中で、あなたという人を当てにして、あなたもやはり何か新しいことを聞かしてくださるだろう、あなたから何か借り出すことができるだろう、と思ったわけなんですよ！　我々はお互いにこういった物持なんで！」

「そりゃいったいなにを借り出そうというんです？」

「さあ、なんと言ったらいいかなあ？　いったいわたしがそれを知ってると思いますか？　ごらんのとおり、わたしは始終こういう安料理屋に入りびたっておりますが、わたしにゃこれがいい気持なんで。いや、いい気持っていうのじゃないが、なんということなしにですな。わたしだってどこかにすわらなきゃなりませんからね。まあ、あの可哀いそうなカーチャにしたってごらんになったでしょう？……ねえ、たとえば、仮りにわたしが食いしんぼうだとか、クラブ通いの食道楽だとか、そんな者ででもあればまだ楽なんですが、わたしときたらごらんのとおり、こんなものでも平気で食べられるんですからね！　（彼は片隅を指でさして見せた。そこには小さいテーブルがあって、ばれいしょつきのひどいビフテキの残りが、ブリキ皿の上にのっかっていた）時に、あなたは食事は済みましたか？　わたしはちょっと一口やったから、もう欲しくないんです。また酒だって、まるで飲みません。シャンパンのほかはいっさいなんにも。ところがそのシャンパンも一晩じゅうかかってたった一杯、しかもそれで頭痛がするんですからね。今これを言いつけたのは、ちょっと景気づけのためなんですよ。と

いうのは、ちょっとあるところへ行こうと思ってるもんですから。だからごらんのとおり、わたしは特別のご機嫌でいるわけなんです。わたしがさっき小学生みたいに隠れたのは、あなたにじゃまされるかと思ったからなんで。しかし、多分（彼は時計を引出した）、まだ一時間くらいご一緒におられるでしょう。いま四時半ですからね。いや、全くのところ、せめてなんでもいいから、何かであるといいんですが、たとえば地主だとか、一家の父だとか、槍騎兵（そうきへい）だとか、写真師だとか、雑誌記者だとかね……それが、なあんにもないんですよ、何一つこれという専門が！　時には退屈なことさえありますよ。実際わたしは、何か珍しいことを聞かしてくださることと思っていましたが」

「いったいあなたは何者で、なんのためにこっちへ出て来たんです？」

「わたしが何者かって？　あなたはご存じじゃありませんか――貴族で、二年ばかり騎兵隊に勤めて、その後このペテルブルグでごろついていて、それから、マルファ・ペトローヴナと結婚して、田舎に暮らした。これがわたしの伝記でさあ！」

「あなたはカルタ師だったようですね？」

「いや、なんのわたしがカルタ師なものですか。いかさま師でさあね――カルタ師じゃありませんよ」

「あなたはいかさまカルタ師だったんですか」

「さよう、いかさまカルタ師でもあったんで」

「どうです、なぐられた事もあるでしょう！」

「そんなこともありましたよ。それがどうしたんです？」

「じゃ、決闘を申し込むこともできたわけでしょう……まあ、とにかくお目ざましの種になりますね」

「お説に反対はしますまい。それに、わたしは哲学めいた事は不得手ですからな。実のところ、わたしが急いでここへやって来たのは、どちらかといえばおもに女のためなんですよ」

「マルファ・ペトローヴナの葬式をすましたばかりなのに？」

「まあ、そうですな」とスヴィドリガイロフは押しの強い、露骨な表情でほほえんだ。「で、それがどうだと言うんです？　あなたはなんですな、わたしが女のことをこんな風にいうのを、どうやら悪く思っておられるようですな？」

「というと、つまり僕が淫蕩（いんとう）を悪とみるかどうか、という意味ですね？」

「淫蕩を？　へえ、そんな風に話を持ってこられるんですか！　もっとも順序として、まず女に関する問題にお答えしましょう。実はね、わたしは今おしゃべりしたい気分になってるんですよ。ねえ、いったいなんのためにわたしは自己を抑制しなくちゃならないんでしょう？　もしわたしが仮りに女好きだとすれば、なぜ女色を捨てなければならないんでしょう。少なくとも、一つの仕事ですからね」

「じゃ、あなたはここでただ淫蕩だけに望みをつないでるんですか？」

「ふん、それがどうなんです！　まあ、淫蕩にもつないでおりますよ！　だが、あなたはよっぽど淫蕩が気になるんですね。それに、わたしは少なくとも正直な質問が好きなんで。この淫蕩ってやつの中にゃなんといっても、自然に根底を持った、空想に堕さない、一種恒久なものがありますよ。絶えずおこっている炭火みたいなものが血の中にあって、こいつが始終焼きつくような働きをする。そして、年を取っても容易に消すことができないんですな。ねえ、そうじゃありませんか、これも一種の仕事でないでしょうか？」

「そんなことをしてみたって、何もうれしがるほどのこともないじゃありませんか？　それは病気ですよ、しかも危険なやつだ」

「ああ、またあなたはそんな方へ話を持っていく！　そりゃわたしだって、これが一定の尺度を越えたすべてのものと同様に、一つの病気だってことには同意です――しかも、この場合では、必ずや尺度を越えざるを得ないんですからな――がそうはいうものの、こいつは人によって、色々まちまちでしょう。これが第一だし、第二には、何事もむろん程度は守るべきで、たとえ卑屈でも何かと胸算用もしなけりゃならんでしょう。けれど、いったいそれがどうなるんです？　結局こいつがなかったら、ピストル自殺でもするよりか仕方がないじゃありませんか。そりゃわたしだって、相当な人間は退屈する義務がある、ということには賛成ですが、しかしそれでも……」

「あなたはピストル自殺ができますか？」

「ああ、また！」とスヴィドリガイロフは嫌悪の表情で、はね返すように言った。「後生ですから、そんな話をしないでください」と彼はせき込んで言い足したが、それまでずっと彼のことばに現われていた空威張りの調子がなくなり、顔つきまでが一変したようであった。「白状しますが、わたしはこの弱点を持っているんですよ。われながら勘忍ができないんだけれど、どうもいたし方がありません。わたしは死というやつが恐ろしいんで、人がそんな話をしてても厭なんです。実はね、わたしは多少神秘論者なんですよ」

「ああ、マルファ・ペトローヴナの幽霊ですか！　どうです、引続き出て来ますか？」

「いや、そいつは言い出さないでください――ペテルブルグはまだ出ないんです。それに、そんなことくそくらえだ！」と彼はなんとなくいらいらした様子で叫んだ。

「いや、いっそその話を……だが……しかし……ふむ！　ちょっ、もう時間があまりない。もうあなたとゆっくりお話ししておられません、残念ですな！　お話しすることはあるんですが」

「なんです、女でも待ってるんですか？」

「さよう、女が。なに、ちょっとした偶然のことでね……しかし、わたしが言うのは、そんな事じゃないんです」

「ふん、しかしこうした周囲の汚らわしさも、あなたはもう感じなくなってしまったんですか？　あなたはもう踏みとどまる力を失ったんですか？」

「あなたは力がご注文なんですか？　へ、へ、へ！　あなたにゃびっくりさせられますよ、ロジオン・ロマーヌイチ。もっとも、そうだろうとは前から知っていましたがね。あなたは淫蕩だの美学だのっておっしゃる！　してみると、あなたはシラーなんですね。理想家なんですね！　もちろん、すべてそうあるべきが当然で、もしそうでなかったら、それこそ不思議なくらいだが、しかし実際となると、やっぱり妙ですな……ああ、残念なことに時間がない。けれど、あなたは実に興味のある人物ですな。ときについでですが、あなたシラーがお好きですか？　わたしは恐ろしく好きなんで」

「だが、あなたは実に大したほら吹きだ！」といくらか嫌悪の語調でラスコーリニコフは言った。

「いいや、けっして、けっして！」スヴィドリガイロフはからからと笑いながら答えた。「しかし、あえて議論しません、ほら吹きなら、ほら吹きでもけっこう。しかし、かくべつ害にならなけりゃ、少しはほらを吹いたって構わんじゃありませんか。わたしは七年間、マルファ・ペトローヴナと田舎で暮らしたものだから、今あなたのように聡明な――聡明で、おまけにこの上なく興味ある人に出会うと、いきなり飛びかかっておしゃべりがしたいんですな。それに、ちょくちょく半杯ずつ飲んだ酒が、ほんのいささか頭へ回ったとこなんで。しかも何よりも第一、大いにわたしを得意にならせた事情が一つあるんだが、そのことは……まあ言いますまい。え、あなたはいったいどこへ？」急にスヴィドリガイロフは驚いたようにこう尋ねた。

ラスコーリニコフは立ち上がろうとした。彼は重苦しい、息づまるような気がして、ここへ来たのが妙にきまり悪くなったのである。スヴィドリガイロフなる人物については、もう世界じゅうでもっとも空虚なくだらない悪党だと確信してしまった。

「いいじゃありませんか！　もうしばらく、も少し話していらっしゃい」とスヴィドリガイロフはしきりにすすめた。「せめてお茶でも所望してくださったらどうです。さあ、も少しすわってください。いや、もうばかなおしゃべりはしません、つまり手前みそのおしゃべりはね。何かあなたに話してお聞かせしましょう。なんでしたら、ある女がわたしを――あなたのことばをかりていえば――『救ってくれた』顛末をお話ししましょう。これは自然と、あなたの第一の問いに対する答えにもなるんですから。なぜって、その婦人というのは――あなたの妹さんだからです。話してもいいでしょうか？　それに、時間つぶしにもなりますしね」

「お話しなさい。しかし改めてお断わりするまでもなく、あなたは……」

「おお、ご心配には及びません！　おまけにアヴドーチャ・ロマーノヴナは、わたし如きくだらない空虚な人間にさえも、深い尊敬の念しか起こさせないような方ですからな」

四

「ご存じかもしれませんが（いや、わたしが自分でお話ししましたっけ）」とスヴィドリガイロフは言い出した。わたしはこの土地で大きなカルタの借金に責められて、てんから払う当てもなく、とうとう監獄へくらい込んだことがある。その時マルファが救い出してくれた顛末は、くだくだしくお話しする必要もありません。ねえ、女ってものはどうかすると、すっかり現（うつつ）を抜かして男に打ち込めるものですからなあ！　あいつは正直で、中々りこうな女でした（もっとも、教育はまるでありませんでしたがね）。ところで、どうでしょう、その嫉妬（しっと）ぶかい律気な女が、いろいろ恐ろしい乱痴気騒ぎをやったあげく、身を屈してわたしとある契約を結んだのみか、二人の結婚生活じゅうずっとそれを実行したんですよ。実は、彼女（あれ）はわたしよりだいぶ年上だったし、おまけに年じゅう口からいやな臭いをさせていたので。わたしは多分のずうずうしさと、一種の正直さを持った男だもんですから、あれに対して完全に貞操を守り得ないということを、率直に当人に言ってのけたものです。この告白は彼女（あれ）を夢中になるほど怒らせましたが、しかしわたしのずうずうしい率直さが、ある意味において彼女（あれ）の気に入ったようでもありました。『つまり、前もってこう言ってしまうところをみると、自分でもわたしをだますのが厭（いや）なんだろう』ってな訳ですな――嫉妬ぶかい女には、これが一ばん大切なことなんで。かなり長く愁嘆場を演じた結果、わたし達の間にはこんな口約束ができました。第一に、わたしはけっしてマルファを見捨てないで、永久に彼女（あれ）の夫でいること。第二に、彼女（あれ）の許可なしにはどこへも旅行などしないこと。第三に、けっしてきまった情婦を持たないこと。第四、その代わりにマルファは時々わたしが小間使に手を出すことを許すが、しかし、これも彼女（あれ）の内諾によらなければならぬこと。第五、われわれとおなじ階級出の女はくれぐれも愛してはならぬこと。第六、こんな事があっては大変だが、万一激しい真剣な情欲がわたしを襲うようなことがあったら、わたしはマルファにそれを打明けねばならぬこと――こういうのです。しかし、最後の点に関してはマルファはいつもかなり安心しておりました。あれはりこうな女でしたから、したがってわたしのことを、真剣な恋などできない道楽者の女好きとよりほかには、見ることができなかったんです。しかし、りこうな女と嫉妬ぶかい女というのは、おのおの異った別々なもので、こいつが困るんですよ。しかし、ある種の人間を公平に批判するには、あらかじめ二、三の先入観念と、普通われわれを囲繞（いじょう）している人や事物に対する日常の習慣を、捨ててかからなくちゃなりません。あなたの批判なら、わたしは誰の批判にもまして、希望をかける権利を持っています。あなたはもうマルファのことで、ずいぶんおかしいことや、ばかばかしいことを聞いていらっしゃるかもしれない。実際、彼女（あれ）には何やかや非常におかしいくせがありました。け

れど、あえて端的に言いますが、わたしは彼女の数知れぬ悲嘆の因を作ったことを、心底から悔んでおります。しかし、優しい夫が優しい妻に捧げるためにきわめて当を得た〔oraison funèbre〕（弔辞）としても、まあこの程度でたくさんでしょう。喧嘩でもした時には、わたしはおおむね口をつぐんで、かんしゃくを起こしたりなどしませんでした。この紳士ぶりがたいていいつも目的を達したものです。これが彼女にある働きをして、御意にさえ召したくらいです。どうかすると、彼女はわたしを自慢にする事さえありましたよ。しかし、それでもあなたの妹さんだけは、我慢がし切れなかったんです。いったいどうして彼女がああいう絶世の美人を、家庭教師などに入れたのか！　それは、つまり、マルファが情熱的な感受性の強い女なので、自分から妹さんにいきなり惚れ込んじまった――字義通りに惚れ込んでしまったからだ、とわたしは解釈しております。いや、何しろ妹さんはねえ！　わたしはひと目みるなり、こいつはいかんという事が、わかりすぎるほどわかったのです――あなたはどうしたと思いです？――わたしはあの人に目を向けない決心をしたんです。ところが、アヴドーチャ・ロマーノヴナが、自分の方からまず進んで来られたんですよ――あなたは本当になさるかどうか知りませんがね。それはマルファ・ペトローヴナの熱もだんだん昂じてきて、妹さんの噂をしてもわたしが黙っていると言って、腹を立てるくらいでした。彼女がのべつ幕なしに妹さんを賞めたてるのに、こっちが平気な顔をしているのが気に入らないんですな。実際、あれがいったい何を望んでいたのか、わたし自身も今だにわからないくらいなんで！　まあ、そんなわけだから、もちろんマルファは、アヴドーチャ・ロマーノヴナに、わたしの秘密を洗いざらい話したに相違ありません。あれは一つなさけないくせがあって、まるでもう相手構わず家庭内の秘密をぶちまけ、やたらにわたしのことを壁訴訟するんです。だから、この新しくできた美しい友達を、どうしてただおけるものですか？　察するところ、二人の間にはわたしのことよりほかに話はなかったに違いありません。で、アヴドーチャ・ロマーノヴナにも、人がわたしに塗りつけたがっている不気味な神秘めかしい話が、すっかり知れてしまったのは、疑いもないことです……わたしは賭をしてもいいが、あなたもこういった種類の話を、もう何か聞き込んでおられるでしょう？」

「聞きましたよ。ルージンなども、あなたがある子供の死因にさえなっているって、あなたを責めていましたよ。いったいそれは本当ですか？」

「後生ですから、そんな汚らわしい話はやめてください」とスヴィドリガイロフは嫌悪の表情で、気むずかしそうに言った。「もしあなたがどうしても、そのばかばかしい話の顛末を知りたいとおっしゃるなら、またいつか別にお話しましょう。が、今は……」

「それから、村であなたが下男をどうとかしたって事も聞きました。それもやっぱりあなたが何か原因になっているとかで」

「後生です、もうたくさん！」とスヴィドリガイロフは目に見えてがまんのし切れない様子で、再びさえぎった。「それは、例の、死んでからもあなたのパイプをつめに来たという、あれと同じ下男じゃないんですか……いつか自分で僕にお話しなすった？」ラスコーリニコフは、だんだんいらだたしそうな様子になった。

スヴィドリガイロフはじっと注意深くラスコーリニコフを見つめた。ラスコーリニコフは、このまなざしの中に毒々しい薄笑いが電光のようにちらとひらめいたかに思われた。とはいえ、スヴィドリガイロフはそれをおさえつけて、ごくいんぎんな調子で答えた。

「そう、同じ男です。お見受けしたところ、あなたもこういう事にたいへん興味をお持ちのようですな。まあ、せいぜい機会のありしだい、あらゆる点であなたの好奇心を滅足させることを、自分の義務と心得ております。いやはや！　どうも見たところ、わたしはじっさい誰かの目にロマンチックな人物と見えるらしい。こうなってみると、マルファがわたしのことでお妹さんに、秘密めいた興味をそそるような話をうんとしてくれた事に対して、どれだけ故人に感謝しなければならぬかわからないほどです。そうじゃありませんか。自分が人に与える印象を判断することはできませんが、いずれにしても、それはわたしにとって有利でしたよ。アヴドーチャ・ロマーノヴナはわたしに対してきわめて自然な嫌悪を感じていられたにもかかわらず――またわたしがいつも陰鬱（いんうつ）な、虫の好かぬ顔つきをしていたにもかかわらず、お妹さんはとうとうわたしが可哀想になってきたのです。一個の滅びたる人間として惻隠（そくいん）の情を催してこられたのです。ところで妹さんの心の中に可哀想という気が起こると、もちろん当人にとって何より危険な事なんです。そうすればきっと必ず『救って』やりたい、反省させたい、復活させたい、より高潔な目的に向かわせたい、新しい生活と活動に向かって更生させたい――とまあこんな風のことで、空想しうる限りのことを考え出すのです。わたしはすぐとさっそく、小鳥は自分から網の中へ飛び込んで来るなと悟ったので、こっちでもその心構えをした。おや、ロジオン・ロマーヌイチ、あなたは顔をしかめられたようですね？　なに大丈夫、事件はご承知のとおり、くだらなくすんでしまったんですから。（ちょっ、わたしの酒を飲むことはどうだ！）実はね、わたしはいつも――そもそもの初めから、こう思っておりましたよ。あなたの妹さんを二世紀か三世紀ごろに、どこかのちょっとした王公なり、代官なり、小アジアの総督（プロコンスル）なりの姫君に生まれさせなかった運命の悪戯（いたずら）を、残念に思っているしだいですよ。妹さんは疑いもなく、殉教の苦患を堪え得た女性の一人です。真っ赤に焼けた火箸（ひばし）で胸を焼かれた時でも、もちろん微笑を含んでおられたに違いない。あのひとはわざわざ進んでその方へ向かう人です。ところで四世紀か五世紀ごろだったら、エジプトの砂漠へ隠遁して、そこで三十年くらい草の根と、歓喜と幻で生きていかれたことでしょう。あのひとはただもう誰かのために一刻も早く、何か苦痛を受けたいと、そればかり渇

望し要求していらっしゃるんですからな。もしその苦痛を与えられなかったら、自分で窓から飛びおりかねないほどですよ。わたしはラズーミヒンという人のことを、ちょっくら聞きました。噂によると、なかなか分別のある人だということですね（それは姓の示すとおり（ラーズムは叡知意）ですよ、きっと神学生なんでしょう）。まあその人にお妹さんを保護さしておけばいいでしょう。要するに、わたしはどうやらお妹さんを了解したらしいので、それを自分の名誉としているしだいです。けれどあの時、つまり初めてお知合いになったころは、ご承知の通り、いつも妙に軽はずみな、ばかげた了見になりやすいもんだから、誤った観察をしたり、ありもしないものを見たりするものです。ええっ、ちくしょう、なんだってあのひとはあんな美人なんでしょう？　だから、何もわたしが悪いのじゃありませんよ！　一口に言えば、もうどうにも押えようのない情欲の発作から事が始まったんです。アヴドーチャ・ロマーノヴナはとほうもない、聞いたことも見たこともないほど純潔な人です。いいですか、これはお妹さんに関する一つの事実として、あなたにお知らせするんですよ（あのひとはあんなに聡明な方なのに、おそらく病的といってもいいほど純潔です。そして、これがあの人のためによくないのですよ）。ちょうどそこへ、パラーシャという目の黒い娘が小間使の中におったのです。わたしは前に一度もその娘を見た事がなかった。そのころほかの村から連れて来たばかりなんでね――すてきに美しい娘でした。が、お話にならないくらい低能だもんだから、わたしがなにするとたちまち泣き出して、邸じゅうに聞こえるような大声を立てた。それがみっともない騒ぎになってしまったんですよ。ところが、ある時食事のあとでアヴドーチャ・ロマーノヴナは、わたしが庭の並木路に一人でいるところをわざわざ捜し出して、目に涙を光らしながら、可哀想なパラーシャを苛（いじ）めないでくれと要求されたんです。これがわたし達の二人でかわしたほとんど最初の会話だった。わたしはもちろん、あのひとの希望を満たすのを名誉と心得て、心（しん）から打たれたような間の悪そうな振りをしようと努めましたよ。まあ、一口に言えばうまく役をしこなしたわけなんです。それから交渉が始まって、秘密の会話、教訓、訓戒、懇願、哀願、そして涙まで流されたのです――どうです、本当に涙まで流されたんですよ！　全く若い娘さんによっては、伝道に対する情熱がこのような程度にまでなる事があるんですからな！　わたしはもちろんすべてを運命のせいにして、光明にあこがれ渇望するような振りをしていたが、やがて最後に女の心を征服するもっとも偉大な、一ばん間違いのない奥の手を出しました。それはけっして誰にもはずれのない方法で、いっさいの除外例なく、断然すべての婦人にきき目のあるものなんです。それは誰でも知っている方法で――世辞というやつですな。世の中に生一本ほどむずかしいものもなければ、また世辞ほど楽なものもありませんよ。もし、生一本な言行の中に、ほんの百分の一でも嘘らしい調子が交じったら、たちまち不調和を来して、その次に

は醜態が演じられるのです。それが世辞となると、初めから終いまで嘘っぱちであっても、多少の満足を感じながら気持よく聞いていられます。よし下品な満足にもあれ、とにかく満足を感じる。世辞というやつは、どんなにとってつけたようなやつでも、必ず少なくとも半分は本当に思われます。これは社会のあらゆる階級、あらゆる発達程度にも、間違いなく適用できるのです。お世辞でいけば、神に仕える聖女でも誘惑することができますよ。だから、普通の人間なんか申すまでもありません。今でも、思い出すたび笑わずにいられないのは、夫と、子供と、自分自身の善行に身をささげ尽くしている一人の夫人を誘惑した時の顛末です。いやはやその愉快なこと、そして仕事の楽なことといったらなかったですよ！

その夫人はじっさい徳行家だったんですよ、少なくとも、自己一流にね。わたしの用いた戦術はごく簡単なもので、ただしょっちゅうその夫人の貞操に圧倒されて、その前にひれ伏していただけなんです。わたしはずうずうしいお世辞を並べて、時たま握手なり一べつなりをかち得ると、すぐさま自分を責めるんです。『これはわたしが無理にもぎとったので、あなたは抵抗したのだ。もしわたしがこんな悪徳漢でなかったら、けっして何も受けることができそうもないくらい、一生懸命に抵抗なすったのです。あなたは自分が無垢なものだから、人のずるさを見破ることができないで、つい心にもなくわれしらずそれに引込まれたのです』しかじか云々というわけです。手っとり早く言えば、わたしは最後の目的を達してしまった。ところが、わが夫人はまだ自分が潔白で、貞淑で、すべての義務と責任を果たしている、ただふとした事でわれともなく貞操を汚してしまっただけだと、堅く信じて疑わない。ですから、とどのつまりに、わたしがざっくばらんに、自分の深い確信によれば、彼女もわたし同様に快楽を求めていたのだと言ってやった時、夫人はわたしにどれだけ腹を立てたことでしょう。可哀想にマルファ・ペトローヴナも、やっぱり恐ろしくお世辞に乗りやすい性質だったのです。だから、わたしが、その気にさえなれば、もちろんあれの財産はまだ存命中に、残らずわたしの名義に書きかえさせる事もできたんです（だが、わたしはどうもやたらに飲んで、おしゃべりしておりますな）。さあ、そこで今わたしが、それと同じ効果がアヴドーチャ・ロマーノヴナにも見えてきたといっても、おそらくご立腹にはならんでしょうな。ところが、わたしがばかでせっかちだったものだから、すっかりぶち壊してしまったのです、アヴドーチャ・ロマーノヴナは、前から時々（一度なんか特にひどかったようですが）、わたしの目の表情が恐ろしく気に入らなかったんですよ。あなたこれが本当にできますか？　一口に言えば、その中には一種の情火がだんだん強く、だんだん不用意に燃えてきたのです。それがあのひとを脅かして、ついに憎らしいほどになったんですよ。何も詳しくお話するがものはありません。わたし達は袂を別ってしまったのです。そこへもってきて、わたしはまた馬鹿なことをしたんですな。つまり思い切って無遠慮に、

あのひとの伝道だの、教訓だのを冷かしたわけなのです。パラーシャがまた舞台へ現われた、それも一人きりじゃないんです――手っとり早く言えば、すっかり乱脈が始まったんですよ。ああ、ロジオン・ロマーヌイチ、もしあなたが一生に一度でも、お妹さんの目が時おりどんなに美しく光るか、それをごらんになったらなあ！　今わたしが酔ってたって、もうこの通り一杯の酒を飲み干したって、そんな事はなんでもありません。わたしは本当のことを言ってるんですよ。全くのところ、わたしはその目を夢に見たくらいです。しまいにはあのひとの衣ずれの音を聞いても、たまらなくなってきました。実際、わたしはてんかんにでもなるんじゃないかと思いましたよ。かくまで夢中になれようとは、われながら思いも寄らぬほどでしたよ。一口に言えば、結局あきらめなくちゃならなかったのですが、それはもうできない相談でした。そこで、わたしがその時何をしたか、まあ想像してみてください。人は夢中になると、どんなにまで頭が鈍くなるものか、方図がしれませんなあ！　ロジオン・ロマーヌイチ、人は夢中になったら、もうけっして何一つろくなことはできっこありませんよ。で、わたしはアヴドーチャ・ロマーノヴナが正直なところ貧乏な（あっ、ごめんください、こう言うつもりじゃなかった……いや、しかし同じ観念を現わす事なら、どちらでも変わりないじゃありませんか）、つまり自分の手で働いて生きておられるのをつけ込んで――母親とあなたを養っていかなきゃならん（あっ、くそ、またあなたの事がちょっと頭に浮かんだものだから……）つまり、そこをつけめにして、わたしはあのひとに自分の全財産を提供しようと決心したのです（三万ぐらいまではその時でもまとめることができたので）。それにわたしと一緒にこの土地へ、ペテルブルグへなりと逃げ出してもらうのが条件なのです。もちろん、わたしはすぐその場で、永久の愛とか、無上の幸福とか、その他あらゆることを誓ったわけです。あなたは本当になさるまいが、実際わたしはその時すっかり参ってしまって、もしあのひとがわたしに向かって、マルファを斬り殺すか毒殺するかして、わたしと結婚してくれ、とでも言おうものなら、即座にやってのけかねないほどでしたよ！　けれど何もかも、先刻ご承知のとおりの騒動で終わったのです。その時マルファが、あの卑劣きわまる三百代言のルージンを手に入れて、結婚をまとめないばかりにこぎつけたことを知った時、わたしがどんな気ちがいじみた怒り方をしたか、その辺はご推察くださることと思います――だって、これは本質的に見ると、わたしの申し出と同じことなんですからね。そうでしょう？　そうでしょう？　ねえ、そうじゃありませんか？　見たところ、あなたはどうやらたいへん身を入れて聞いてくださるようになりましたね……実に面白いお方だ……」

　スヴィドリガイロフはたまりかねたように、げんこでとんとテーブルをたたいた。彼はすっかり真っ赤になった。ラスコーリニコフは、ちびりちびり一口ずつ舐めているうちに、いつの間にか飲み乾してしまった一杯か一

杯半のシャンパンが、病的にきいて来たのをはっきりと感じた――で、彼はこの機会を利用しようと決心した。スヴィドリガイロフは彼の目に、きわめてうさんくさく思われたのである。

「いや、それで僕もすっかり確信しました――あなたがここへ来たのは、妹のことを頭においてなんでしょう」彼はいっそう相手をじりじりさせるために、真正面から向きつけに言った。

「ええっ、もうたくさんですよ」急に気がついたように、スヴィドリガイロフは言った。「もうちゃんとお話ししたじゃありませんか……それにお妹さんの方じゃ、わたしが厭(いや)でたまらないんですからね」

「さよう、あれが厭でたまらないのは僕も確信しています。しかし、今はそれが問題じゃありません」

「あなたは確信していらっしゃる、厭でたまらないって？」

（スヴィドリガイロフは目を細めて、にやりと嘲(あざ)けるように笑った）。おっしゃるとおりです、あのひとはわたしを好いてはおられません、けれど、夫婦間や情人同士の間にあったことは、けっして他人に保証できるものじゃありませんよ。そこにはどんな場合でも、断じて世界中の誰にもしれない、ただ彼ら二人にのみわかっている、小さな片隅があるものです。アヴドーチャ・ロマーノヴナの場合にしても、嫌悪の目でわたしを見ていたなんて、あなた保証ができますか？」

「今まであなたのお話に出て来たちょいちょいしたことばの端で、あなたが今でもドゥーニャに対して何か特別な思わくと、のっぴきならぬ計画を持っておられるものと認めます。もちろん卑劣きわまる計画をね」

「なんですって！　わたしがそんなことばを口からすべらせましたかね？」ふいにスヴィドリガイロフは、自分の計画に冠せられた形容詞には、まるで注意を払おうともせず、きわめて正直な驚きの色を見せた。

「なに、それは今でも口からすべらせておられますよ。ねえ、たとえば、あなたは何をそう恐れてるんです？　いったいどうして今そう急にびくっとしたんです？」

「わたしが恐れてるんですって？　びくびくしてるんですって？　あなたを恐れてるんですって？　むしろあなたの方がわたしを恐れるべきですがね、cher ami（愛なる友よ）だが、なんてばかばかしい話だ……どうもわたしは酔った、自分でもわかりますよ。またうっかり口をすべらすところだった。もう酒なんかやめだ！　おーい！　水をくれ！」

彼はびんを引っつかんで、無遠慮に窓の外へほうり出した。フィリップが水を持ってきた。

「こんなことはみんなくだらない話です」スヴィドリガイロフはタオルを湿(しめ)して、それを頭へ当てながら言った。「わたしは一言であなたをへこまして、あなたの嫌疑をすっかり吹き飛ばすことができますよ。たとえば、わたしが結婚しようとしていることをあなたはご存じですかね」

「それはもう前にもお話ししておられましたよ」

「お話しした？　忘れていましたよ、しかし、あの時は

まだ確かなお話はできなかったのです。何しろまだ相手の娘も見ていなかったんで、ただその意向を持っていただけなんですからね。ところが、今じゃもう相手が決まって、話がすっかりまとまってしまったんです。もしのっぴきならん用事さえなかったら、わたしはもちろんあなたをお連れして、さっそくその方へご案内するはずなんですが――なぜって、あなたのご意見が伺いたいんですからね。ええ、ちくしょう！　もうあとたった十分しかない。ね、時計を見てごらんなさい。だが、やはりあなたにお話ししましょう。実際この話は、わたしの結婚はちょっと面白いんですから、もちろん、一風かわった面白さですがね――あなたはどこへ？　また帰ろうと言うんですか？」

「いや、もう今となったら、僕はけっして帰りません」

「けっしてお帰りにならない？　まあ、見てみましょう！　わたしはあなたをそこへご案内しますよ、ほんとうに。そして花嫁をお目にかけましょう。しかし今じゃありませんよ。今はもうあなたもお出かけになる時刻でしょうからな。あなたは右とね、わたしは左。ときに、レスリッヒ夫人をご存じですか？　ほらあのレスリッヒ、今わたしが下宿している――え？　おわかりですか？　ね、あなたはどうお考えです、ほら、娘の子が冬水ん中でなんとかしたって噂のある――ね、わかりましたか？　わかりました？　で、今度の話は、あの女がいっさいきり盛ってくれたんですよ――『それじゃあなたは退屈でたまらない、少し気晴しをなさるがいい』ってね。実際わたしは陰気な、うっとうしい人間なんですよ。あなたは快活な人間だと思いますか？　どうして、陰気な人間なんですよ。別に悪い事はしないが、いつも隅っこにくすぶって、どうかすると三日も口をきかないくらいです。ところが、あのレスリッヒなかなかのしたたかものでね、こんな計画を胸に持っておるんですよ。つまり、わたしが飽きてきて、女房を捨ててどこかへ行ってしまう、すると女房はあの女の手にはいるから、それをまた別口へ回す――やはり我々くらいの階級だが、も少し上のところへね。あの女のいうことには、父親はある退職官吏だが、体がすっかり弱り切って、もう足かけ三年安楽椅子に腰かけたきり、自分の足では動いたことがない、母親もあるが、これは分別のしっかりした女だ。息子はどこかの県で勤めているけれど、家計を助けようとしない、娘は嫁入りしてしまって、見舞いにも来ない。しかも、自分の子供だけで足りないで、小さい甥（おい）を二人も引取っている。で、一ばん末の娘をまだ卒業もしないうちに、女学校から下げてしまった。これがもうひと月すれば満十六になる。つまり、ひと月たてば嫁にやれるってわけで、その子をわたしに世話しようというんですよ。そこで、わたし達は出かけました。向こうの家じゃ実に滑稽（こっけい）でしたよ。わたしは自分のことをこう触れ出しましたよ――地主で、男やもめで、由緒のある家柄で、これこれの親戚（しんせき）知己があって、財産も持っている――さあこうなると、わたしが五十でその娘がまだ十六にもならないって、それがなんでしょう？　誰がそんなことを気にしま

すか？　ね、大いに食指うごくじゃありませんか、え？　食指うごくでしょう、は、は、は！　わたしがその父さん母さんと話し込んだところを、お目にかけたかった！　いや、その時のわたしときたら、見料を出しても一目見る価値がありますよ。娘が出て来て、ちょいと小腰をかがめて会釈するんだが、まあどうでしょう、まだ裾の短かい服を着て、綻び初めぬ蕾の花といった風情でね、赤くなって、朝焼けのようにぱっと燃え立つんですよ（もちろん、もうちゃんと言い聞かせてあるんで）。あなたは女の顔のことをどうお考えか知りませんが、わたしに言わせるとこの十六歳という年ごろ、このまだ子供っぽい目、このおずおずした様子と羞恥の涙――わたしに言わせると、これはまさに美以上ですな。しかもおまけにその娘は、まるで絵に描いたようなんですからね。細かくちぢれていくつも小さい環を作っている薄色の髪、ふっくらした真っ赤な唇、小さな足――すてきですなあ……まあ、こうしてわたしは知合いになると、家事の都合で急ぐからと言ったものだから、さっそくその翌日、つまり一昨日、われわれ二人はもう祝福してもらったんですよ。それからというもの、わたしは行くとすぐ膝の上へ娘をのせて、そのままおろそうとしない……すると、娘は朝焼けのように燃え上がる、わたしはひっきりなしに接吻してやる。もちろんおっ母さんが、これはお前の夫で、こうしなければならないのだよと、言い聞かせてやるんですよ。まあ一口に言えば、極楽ですな！　で今のこういう許婿なる状態は、実際の夫の状態よりいいのかもしれませんて。これがいわゆる〔La nature et la ve'rite'!〕（自然と真実！）ですな！　は、は、は！　わたしは娘と二度ばかり話をしましたが――いや、どうしてなかなかりこうな子ですよ。どうかすると、こっそりわたしを見るんですが、まるで焼き尽くさんばかりの目をしていながら、その顔はラファエルのマドンナみたいなんですよ。だって、シスチンのマドンナの顔は幻想的で、悲しめる狂信者の顔なんですものな。あなたそれが目につきませんでしたか？　まあ、こんな風の顔なんですよ。両親の祝福を受けるとすぐ、その翌日、わたしは千五百ルーブリの贈物を持って行きましたよ。ダイアモンドの装飾品を一つに、真珠を一つに、銀の婦人用化粧箱、これっぱかりの大きさで、いろいろ様々なものがはいってるんです。これには娘も――マドンナも、顔をぽっと赤くしたほどですよ。昨日もわたしはその子を膝の上にのせましたが、きっとあまり無遠慮すぎたのでしょう――すっかりまっかになって、涙がぽろぽろあふれた。けれど、それをけどられまいと思って、体じゅう火のようにほてらしてるんです。そのうちに、ちょっとの間みんなが出て行って、わたしたち二人きりになると、急にわたしの首っ玉にかじりついて（自分でこんなことをしたのは初めてなんで）、両手でわたしを抱きしめて接吻しながら、わたしはあなたのために従順で、貞淑で、善良な妻になって、あなたを幸福にする。そして自分の一生を、自分の生活の一分一秒まであなたにささげて、どんなことでも犠牲にする、その代わりに唯あな

たから尊敬だけしてもらいたい、その上はもう『なんにも、なんにもいりません、贈物なんか少しもいりません』とこう誓うんです。ねえ、こんな髪を環のようにちぢらせた、十六やそこいらの天使みたいな娘から、顔を処女らしい羞恥の紅(くれない)に染め、目に感激の涙をためながら、こんな風の告白を聞かされると、どんな気持がするか、およそお察しがつきましょう、――まったく魅惑的なものですよ！　たしかに魅惑的でしょう？　どれだけかの値打ちはあるでしょう、え？　ねえ？　値打ちがあるでしょう？　ねえ……ねえ、どうです……一つ、わたしの許嫁のところへ行ってみませんか……ただし、今すぐじゃありません！」

「手っとり早く言えば、その年齢と発達の恐ろしい相違が、あなたの情欲をそそったんですよ！　いったいあなたはほんとうに、そんな結婚をするつもりなんですか？」

「なぜ？　そりゃ是が非でも。人間て自分の事をめいめい好きなようにするもので、誰よりも一番うまく自分を欺(あざむ)きおおせたものが、一ばん愉快に暮らしていくわけです。は、は！　いったいあなたはなんだって、徳行の一本槍で突っかかっていらっしゃるんです？　お手柔かに願いますよ、あなた、わたしは罪業の深い人間ですからね。へ、へ、へ！」

「もっとも、あなたはカチェリーナ・イヴァーノヴナの子供たちの世話を引受けなすった。しかし……しかし、それにはまたそれだけの理由があったんだ……僕はいま何もかも合点がいった」

「わたしは全体に子供が好きなんです、非常に好きなんですよ」とスヴィドリガイロフはからからと笑い出した。「これについては、きわめて興味ある一つの挿話をお話しすることができます。それは現在まだ続いてる話なんですよ。こちらへ着くとその日さっそく、わたしは方々の魔窟(まくつ)を歩き回ってみました。何しろ七年ぶりなので、いきなり飛びかかったわけで。あなたもおそらくお気づきでしょうが、わたしは自分の仲間や昔の友達に会うのを別に急がないでいるんです。まあ、できる限りいつまでも、そうしていたいと思っています。実はね、田舎でマルファのそばにいた時分、こうした秘密な場所に関する思い出が、死にそうなほどわたしを苦しめたものですからね。もっともこうした場所にはいり込むと少しでもその方の知識を持った人なら、ずいぶんいろんな事が発見できますよ。大したもんでさあ！　誰もかれも酔っ払っている、教養階級の青年は無為のために、実現できそうもない夢や妄想の中に命を燃やして、さまざまな理論に精神的不具者になっていく。またどこからかユダヤ人どもが押しかけて来て、金を取りこんで隠してしまう。それ以外のものは、ことごとく淫蕩三昧(いんとうざんまい)でさあ。こんなぐあいで、このペテルブルグという街は、はいって来た瞬間からわたしの顔に、馴染(なじみ)の深いにおいをむっと吹きつけた。わたしはある舞踏夜会と称するものにぶっつかったのです――恐ろしい下水溜(だめ)です（ところがわたしはこういう魔窟でも、ちょっと薄ぎたない感じのする所が好きなんで）。むろんカンカン（卑猥な舞踏の一種）です。

それもほかにはとうていないような、またわたしの時代にもなかったようなやつです。さよう、これにも進歩（プログレス）が見えますよ。ふと見ると、可愛いらしく着飾った十三くらいの女の子が、斯道（しどう）の名手と一緒に踊っている。別に二人の一組（イザイー）が、娘の前で踊っている。そして、壁ぎわの椅子には、娘の母親がかけているんです。ところで、それがどんなカンカンだかとても想像がつくもんじゃありませんよ！　娘はきまり悪がって、顔を赤くしていましたが、しまいには口惜しがって、泣き出したのです。名手は娘をかかえて、きりきりっと回すと、娘の前でいろんな芸をして見せるんです。すると、まわりではどっと笑いくずれる――わたしはこういう時、ペテルブルグの弥次馬連が好きですよ、カンカン的な連中ではありますがね。どっと笑って、わめき立てるところがいい。『うまい、そうしなくちゃいけない！　子供なんかつれて来るのが間違ってるんだ！』などと言ってる。ところが、わたしは、くそくらえだ。皆がそんな慰みをやってるのが、論理的だろうと非論理的だろうと、わたしの知った事じゃない！　やがて、わたしはすぐ自分の割り込むべき場所にねらいをつけて、母親の傍へ腰をおろしました。そして、自分もやっぱり旅の者だということから、ここにいるのが誰もかれもお話にならん無教育なやつらばかりで、真に価値あるものを認めて、相当の敬意を払うことすら知らないのだという事に及び、自分には金がうんとあることをにおわせて、わたしの馬車で送ろうと申し出たのです。こうして宿まで送り届けて、改めて知合いになりました（親子はどこかの借家人から、小さい部屋をまた借りしているんですよ。田舎から出て来たばかりなんで）。そこで母親が言うには、わたしと知合いになったことは、母親にとっても娘にとっても、名誉とよりほか申しようがない、とこうなんです。二人はまる裸の無一物で、どこかの官庁で何かの嘆願運動をしに出て来たとの事なので、わたしは骨も折ろうし金も貸そうと申し出たわけです。聞いてみると、二人はほんとうにそこで舞踏を教えるんだと思って、うっかりあの夜会へ行ったんだそうです。で、わたしは自分の方から、若い娘のフランス語と舞踏の教育を引受けよう、とこう申し出たところ、それこそもう大喜びで、光栄の至りだといって受納した。それ以来、知合いの間柄なんで……なんなら行きましょう。ただし今すぐじゃない」

「よしてください、そんなげすなきたならしい話はよしてください。なんて堕落した野卑な好色漢だろう！」

「シラーよ、シラーよ、わがシラーよ！〔Ou´ va-t-elle la vertu se nicher?〕（徳はいずくに巣くうぞ）実はね、わたしはあなたの叫びを聞きたさに、わざとこんな話を持ち出すんですよ。実に愉快だ！」

「もちろんですよ、この瞬間、僕自身がこっけいでないと思いますか？」とラスコーリニコフはにくにくしげにつぶやいた。

スヴィドリガイロフは喉（のど）をいっぱいひろげてからからと笑った。やがて彼はフィリップを呼んで、勘定を済ますと、腰を持ち上げにかかった。

「ああ、だがわたしもすっかり酔払っちゃった、〔assez cause!〕（たくさんだ！）」と彼は言った。「ああ、実に愉快だ」

「もちろん、あなたが愉快を感じないはずがないさ！」ラスコーリニコフも同じく立ち上がりながら、こう叫んだ。「すっかり手ずれのした淫蕩漢にとって、――しかも、その淫蕩漢が何かしら奇怪な野心（アヴァンチュール）を持っている場合――そういう野心（アヴァンチュール）を話すのが愉快でないはずがない。おまけにこうした状況で、僕のような男を相手にするんだから……好奇心が燃え立つわけですよ」

「へえ、もしそうなら」やや驚きの色さえ浮かべて、ラスコーリニコフをじろじろ見ながら、スヴィドリガイロフは答えた。「もしそうなら、あなた自身もかなり無恥漢ですな。少なくとも大した素質を内部に蔵しておいでですよ。あなたは多くのものを認識することがおできになる、多くのものを……いや、それに、多くのものを実行することもおできになりますよ。しかしまあ、たくさんだ。十分お話ができなかったのは非常に残念ですが、なに、わたしはけっしてあなたを逃がしっこないから……まあ、ちょっと待っててください……」

スヴィドリガイロフは安料理屋から外へ出た。ラスコーリニコフもそのあとにつづいた。もっとも、スヴィドリガイロフはさほどひどく酔っているわけでもなかった。頭へ酔いが上ったのは、ほんのつかの間で、やがてじりじりさめていった。彼は何か非常に大きな屈託があるらしく、しきりに眉をしかめていた。何かに対する期待が彼を興奮させ、不安にしているのが、まざまざと見えていた。ラスコーリニコフに対する態度は、最後の四、五分で急にがらりと変わって、一刻一刻と無作法に皮肉になっていった。ラスコーリニコフはそれに気づき、同じく不安らしい様子であった。スヴィドリガイロフなる人物が、ますますうさんくさく思われてきた。彼はそのあとからついて行こうと決心した。

「さあ、あなたは右へ、わたしは左へ。でなければ、その反対かな。とにかく、adieu, mon plaisir,（さらば、わが喜びよ）またお目にかかりましょう！」

こう言って、彼は右手の乾草広場（センナヤ）の方へ歩き出した。

五

ラスコーリニコフは彼のあとからついて行った。
「これは何ごとです！」うしろをふり向きながら、スヴィドリガイロフは叫んだ。「わたしはそう言ったはずじゃありませんか……」
「なんでもありません、僕はもうあなたのそばを離れないということです」
「なあんですと？」
彼らは二人ながら立ち止まった。ちょっと一分ばかり、二人は互いに探り合うように、じっとにらみ合っていた。
「あなたが今ならべ立てた半生酔いの話で、僕は断然見きわめました」とラスコーリニコフは断ち切るように鋭く言った。
「あなたは僕の妹に対して、例の醜悪きわまる野心を捨てないのみならず、かえって前よりずっと一生懸命に、それに没頭しておられるんです。けさ妹が何やら手紙を受けとったということも、僕はちゃんと知っています。それに、あなたは始終じっと落ち着いていられない様子だった……よし仮りにあなたが方々ふらついてる途中で、花嫁を掘り出したというのが本当だとしても、それはなんの意味もないことです。僕はそれを自分の目で突き止めたいんです……」
そういうラスコーリニコフ自身も、自分がいま何を欲し、何を親しく突き止めたいのか、はっきり決めることはほとんどできない有様であった。
「これはこれは！　なんならすぐ巡査を呼びますぜ？」
「呼ぶがいい！」
二人はまた顔を突き合せながら、一分ばかり突っ立っていた。やがてスヴィドリガイロフの顔ががらりと変わった。ラスコーリニコフがいっこうおどかしに乗らないのを確かめると、彼は急に思いきり愉快らしい親しげな顔つきになった。
「どうも大したもんだ！　わたしはね、好奇心が燃え立っているんだけれど、わざとあなたの事件を言い出さなかったんですよ。幻想的（ファンタスチック）な事件ですからなあ。わたしはつぎの時まであずけておこうと思ったんだが、どうもあなたは死人でも怒らせる腕を持っていらっしゃる……じゃ、行きましょう。だが前もって断わっておきますが、わたしはいま金をとりに、ちょっと家へ寄って行くだけで、それから部屋に鍵（かぎ）をかけて、辻馬車をやとって、ずっと夜おそくまで、島の方へ行こうと思ってるんです。だから、あなた、とてもわたしについて回れっこありませんよ？」
「僕もさし向き家へ行きましょう、ただしあなたの住まいじゃありませんよ。ソフィヤ・セミョーノヴナの家へ、葬式に行かなかった詫（わ）びに」
「それはどうでもご勝手ですが、しかしソフィヤ・セミョーノヴナは家にいませんよ。あのひとは子供たちをみんな引きつれて、わたしのずっと古くからの知合いで、ある孤児院の監督をしている、年とった貴婦人のところ

へ行ったんです。わたしはね、カチェリーナ・イヴァーノヴナの子供三人の養育料として金を届けたり、孤児院の方へも寄付したりして、お婆さんをすっかり丸めこんでしまったのです。それから、ソフィヤ・セミョーノヴナの身の上も、いっさい隠し立てしないで、何から何まで話して聞かせたところ、まんまと素晴しい効果を奏したわけなんです。そういうわけで、今日さっそく、ソフィヤ・セミョーノヴナは、お婆さんが別荘から出て臨時に泊まっているNホテルへ、出頭することになったんで」

「どうだって構いません、とにかく僕は寄ります」

「どうぞご随意に。だが、わたしはあなたの仲間じゃありませんからね。わたしはどうだって平気でさあ。さあ、もう家へ帰りましたよ。ときにどうでしょう、あなたがわたしをうさんくさい目で見ておられるのは、つまりわたしの方があまり遠慮し過ぎて、今までいろんな質問でご迷惑をかけなかったからだと、こうわたしは確信しているんですよ……え、わかるでしょう？　あなたはこいつただでないぞ、という気がしたのでしょう。賭(かけ)をしてもいい、そうに違いないから！　ねえ、だから、これからはあなたも気をおきかせになるといい」

「そして、戸口で立聞きをしなさいか！」

「ああ、あなたはそのことを言ってるんですか！」とスヴィドリガイロフは笑い出した。「いや、わたしにしたって、ああいういろんなことがあったあとで、もしあなたがこれを言わずに済まされたら、かえってびっくりしたでしょうよ。は、は！　そりゃわたしもね、あなたがあの時……あそこで気ちがいじみたまねをして、ソフィヤ・セミョーノヴナに自分でぺらぺら話しておられたことは、多少合点のいった筋もありましたが、それにしても、あれはいったいなんでしょう、事によったら、わたしがまるで時代おくれの人間なために、何もわからないのかもしれませんが、後生ですから、一つ説明してくださいませんか！　もっとも新しい思想で開発していただきたいもので」

「あなたに聞こえるはずがない、あなたはでたらめばかり言ってるんだ！」

「いや、わたしが言ってるのはそれじゃありませんよ、それじゃありません（もっとも、わたしも多少は聞きましたがね）。わたしが言ってるのは、あなたがしきりに嘆息していらっしゃることですよ！　あなたの内部では、絶えずシラーがもだえている。だから今度は、戸の外で立聞きするな、なんてことになるんですよ。もしそうなら、出るところへ出て、これこれこうこうで、こんな事をやらかしました、理論の上でちょっとした間違いができましたと、お上の前で白状したらいいじゃありませんか。ところが、戸口で立聞きしてはならないが、自分のお道楽には、婆さんどもを手当たりしだいなもので殺してもいい、なんていう確信がおありでしたら、少しも早くどこかアメリカあたりへ逃げてお行きなさい！　逃げるんですよ、え、君！　多分まだ間に合いますよ。わたしはまじめに言ってるんですぜ。お金がないとでもいうんですか？　旅費はわたしがあげますよ」

「僕そんなことなど少しも考えていやしません」と、嫌悪の色を浮かべて、ラスコーリニコフはさえぎった。
「わかりました（もっとも、あまり無理をなさらんがいいですよ。もしなんなら、口数をおききにならなくてもいい）。わたしは現在あなたを悩ましている問題がわかりますよ。道徳的問題でしょう？　公民として、人間としての問題でしょう？　なに、そんなものは唾でも引っかけておやんなさい。そんなものが今のあなたになんになるんです？　へ、へ！　つまりなんといっても、あなたはやはり市民であり人間であるからですか？　それなら、何も出しゃばることはなかったんですよ。頼まれもしない事に手を出さなけりゃよかったんですよ。まあ、ピストル自殺ですな。どうです、それもお厭ですかね？」
「あなたは僕を追っ払いたいばかりに、わざと僕をからかってるようですね……」
「どうもあなたは変人だな。それにもう来てしまいましたよ。どうぞ階段をお上がりください。ごらんなさい。あれがソフィヤ・セミョーノヴナの部屋の入り口です。ほらね、誰もいないでしょう！　あなたは本当になさらないんですか？　じゃカペルナウモフにでもきいてごらんなさい。あのひとはあすこの家へいつも鍵をあずけるんだから。ああ、ちょうどあれがマダム・ド・カペルナウモフです。え？　なんですって？　（あの女は少しつんぼなんでね）出て行ったんですって？　どこへ？　さあ、今こそお聞きになったでしょう？　あの人は留守なんですよ。そしてことによったら、夜遅くまで帰らないかもしれませんぜ。じゃ、今度はわたしの部屋へ行きましょう。だって、わたしのところへも寄るとおっしゃったじゃありませんか？　さあ、これがわたしの部屋です。レスリッヒ夫人は家にいません。あの女は年じゅういそがしそうにしていましてね。しかしいい人ですよ、実際……あなたにもう少し分別があったら、あなたの役に立ったかもしれないんだがなあ。さあ、そこでごらんください。わたしは事務卓（ビュロー）から五分利つき債券を一枚出しますよ（こいつがまだこんなにあるんですよ）。ところで、この一枚をきょう両替屋で現なまにするんです。さあ、ごらんになりましたか？　だが、もうこの上時間をつぶしてる暇（ひま）がない。事務卓（ビュロー）に鍵をかけて、部屋に鍵をかけてと、我々はもう一度階段へ出たわけです。ところで、なんなら辻馬車（つじ）をやといましょうよ。わたしは島へ行くんですよ。少しばかりドライブはいかがですな？　そこで、わたしはこの馬車をやとって、エラーギン島へ行きますが、え、なんですって？　おいやですか？　とうとう意地が張り切れなかったんですね？　少しばかりドライブしましょう、なんでもありませんよ。どうやら雨がやってきそうだが、なにかまいませんよ、幌（ほろ）をおろしますからな……」
　スヴィドリガイロフは、もう幌馬車の中にすわっていた。ラスコーリニコフは、少なくともこの瞬間、自分の疑いが間違っていたと考えざるを得なかった。彼は一言も答えないで、くるりとくびすを返すと、もと来た乾草広場（センナヤ）の方へ向けて歩き出した。もし彼がこの時途中

で、ほんの一度でも振り返ってみたら、スヴィドリガイロフが百歩も行かぬうち馬車屋に勘定を払って、歩道の上へおりたのを見ることができたはずである。が、彼はもう何も見ることができず、街角を曲がってしまった。深い深い嫌悪の情が彼をぐんぐんスヴィドリガイロフから離れさせたのである。『ああ、どうして俺はあの野卑な悪党から、あの淫蕩な道楽者の陋劣漢(ろうれつかん)から、たとえ一瞬間にもせよ、何かを期待することができたのだろう?』と彼は思わず叫んだ。実際ラスコーリニコフはあまり性急に、あまり軽率に判決を下したのである。スヴィドリガイロフを取り囲んでいる全体の状況には、神秘とまではゆかなくても、少なくとも一種風変りな感じを与えるような何ものかがあったのである。しかし、こうしたいろんなことの中でも、妹に関する限りでは、ラスコーリニコフはやはりなんといっても、スヴィドリガイロフが彼女を打っちゃっておくまいと、堅く信じ切っていた。しかし、こういうことをくり返し巻き返し考えるのは、もうあまりにも苦しく堪えがたくなってきた!

いつものくせで、彼は一人になると、ものの二十歩も歩くうちに、深いもの思いに落ちてしまった。橋の上へ上がると、彼は欄干の傍に立ち止まり、水をながめ始めた。その間にアヴドーチャ・ロマーノヴナが彼の後ろへ来て立っていた。

彼は橋の袂(たもと)で妹と出会いながら、ろくすっぽ顔も見ないで、そのまま通り過ぎてしまったのである。ドゥーネチカはこれまで一度もこんな風にして、往来を歩いている兄を見たことがないので、ぎょっとするほど驚いた。彼女は足を止めたが、声をかけたものかどうかと思い迷っていた。とふいに彼女は、乾草広場(セナヤ)の方から急ぎ足に近づいて来るスヴィドリガイロフの姿を認めた。

けれど、こちらはそっと気を配りながら、近寄って来る様子だった。彼は橋へは上らずに、ラスコーリニコフに見つからぬよう一生懸命に苦心しながら、やや離れた歩道の上に立ち止まった。しかし、ドゥーニャにはもうずっと前から気がついていたので、手で彼女に合図を始めた。彼女はその合図によって、彼が兄には声をかけないで、自分の方へ来てくれと頼んでいるように思われた。

ドゥーニャはそのとおりにした。彼女はそっと兄のうしろを回って、スヴィドリガイロフに近づいた。

「さあ、早く行きましょう」とスヴィドリガイロフは彼女にささやいた。「わたしはね、ロジオン・ロマーヌイチにこの会見を知られたくないんです。前もってお断わりしておきますが、わたし達はついそこの料理屋で一緒にいたんですよ。兄さんが自分でわたしを捜し出されたので、わたしはやっとの事で、今まいて来たところなんでしてね。兄さんはどうしたわけか、わたしがあなたに差し上げた手紙のことをご存じで、何やら変に疑っておられるんです。もちろん、あなたが打明けなすったのじゃありますまいね。でも、あなたでないとすると、いったい誰でしょう?」

「さあ、わたし達はもう角を曲がりましたから」とドゥーニャはさえぎった。「もう兄に見られはしません。わ

たしちゃんと申し上げておきますが、もうこれから先へはご一緒には参りません。ここですっかりおっしゃってくださいまし、そんな事は往来でも言えることですもの」
「第一に、この話はどうしても往来じゃできませんし、第二に、あなたはソフィヤ・セミョーノヴナの話もお聞きになる必要があります。また第三には、二、三の書類もお目にかけようと思いますし……それに、なんです、もしあなたがわたしの所へ来るのを厭だとおっしゃれば、わたしもいっさい説明をお断わりして、すぐこのまま失礼することにいたします。その際お願いしておきますが、あなたにとって大切なお兄さんのごくごく重大な秘密が、完全にわたしの掌中にあるということを、お忘れなさらないように」
　ドゥーニャはけっしかねてたたずみながら、刺すような目でスヴィドリガイロフをみつめていた。
「あなたは何を恐れていらっしゃるんです！」とこちらは落ち着き払って注意した。「都会は田舎と違いますよ。それに田舎でも、わたしがあなたに仕向けたより、かえってあなたの方が余計わたしをひどいめに合わせなすったんですからね。ところでこの場合……」
「ソフィヤ・セミョーノヴナは承知してらっしゃるんですか？」
「いや、あのひとにはなんにも話してありません。それに、いま家にいるかどうか、それさえ不確かなくらいですからね。しかし多分いるでしょう。あのひとも今日は自分の身うちを葬ったばかりだから、お客のところを歩き回るような日じゃありませんからね。わたしは時期が来るまで、このことを誰にも話したくないので、あなたにお知らせしたのさえ、いささか後悔してるくらいなんですよ。この際ほんのわずかな不注意でも、密告と同じになるんですからね。わたしはすぐそこにいるんです、ほらあの家に。さあもうそばまで来ました。ほら、あれがこの家の庭番です。庭番はよくわたしを知っておりますよ。ほらおじぎをしているでしょう。あの男はわたしが婦人同伴で歩いているのを見たわけだから、もうむろんあなたの顔も見覚えたでしょう、もしあなたがひどくわたしを恐れて、疑っていらっしゃるとすれば、これはあなたにとって有利なわけですよ。いや、どうかこんなにずけずけ言うのをお許しください。わたしは借家人から部屋をまた借りしているんですよ。ソフィヤ・セミョーノヴナはわたしと壁一重の隣り合せで、やはり借家人からまた借りなんです。この階はすっかり間借人でいっぱいなんでしてね。あなた何をそう子供みたいにこわがることがあります？　それとも、わたしがそんなに恐ろしい人間なんでしょうか？」
　スヴィドリガイロフの顔は、しいて卑下するような微笑にゆがんだ。しかしその実、彼はいま笑うどころの沙汰でなかったのである。心臓はずきんずきんと打って、呼吸が喉につまりそうなのであった。彼はしだいに募って行く興奮を隠すために、わざと大きな声で話した。けれどドゥーニャは、この異常な興奮に気づく暇がなかった。『まるで子供のように私を恐れている、私はそれほ

ど恐ろしい人間に思われるか』という相手のことばが、もうすっかり彼女をいらいらさせたのである。

「わたしはあなたが……破廉恥(はれんち)な人だってことは知っていますけれど、少しも恐れてなんかいませんわ。どうぞ先へいらしてください」彼女は見たところ落ち着き払った様子でそう言ったが、その顔はひどく青ざめていた。

スヴィドリガイロフは、ソーニャの部屋の前に立ち止まった。

「ちょっと伺いますが、お宅でしょうか。留守だ。さあ困った！　しかし、あのひとはすぐ帰って来るでしょう。わかってますよ。あのひとが出たとしたら、それはみなし児(ご)たちのことで、あの婦人を訪問したに違いないから。あの子たちは母親をなくしたんでね。わたしもちょっと手を出して、世話をしてやったんですよ。もしソフィヤ・セミョーノヴナが十分たっても帰らなかったら、ご都合で今日にもすぐお宅の方へ差し向けますよ。さあ、これがわたしの住まいです。部屋が二つあります。ドアの向こうが、貸主のレスリッヒ夫人の部屋になってるのです。さあ、今度はこちらを見てください。わたしの重大な証拠物件をお目にかけますから。このドアが、わたしの寝室から、がら空きになっている二つの貸部屋へ通ずるようになってる。この部屋がそうです……これを少し念入りにごらんになる必要がありますよ……」

スヴィドリガイロフはかなり広い部屋を二間、家具つきで借りていた。ドゥーネチカはうさんくさそうにあたりを見回したが、部屋の飾りつけにも配置にも、かくべつ変わったものは目にはいらなかった。もっとも、スヴィドリガイロフの部屋が、ほとんど人の住んでいない二つの住居(アパート)に両方から挟まれているのに、ちょっと気がついたにはついた。彼の部屋へはいるには、直接廊下からでなく、ほとんどがら空きになっている主婦の部屋を二つ通らねばならなかった。スヴィドリガイロフは寝室から、鍵のかかっているドアをあけて、これもがら空きの貸間をドゥーネチカに見せた。ドゥーネチカは、なんのためにこんなものを見ろというのか合点がいかず、しきいの上に立ち止まろうとした。けれど、スヴィドリガイロフは急いで説明を始めた。

「さあこちらを、この二つ目の大きな部屋をごらんください。そして、このドアに注意していただきます。これには鍵(かぎ)がかかっているんです。それからドアの傍に椅子があるでしょう、二つの部屋を通じてたった一脚きりです。これは聞くのに便利なように、わたしが自分の部屋からもって来たのです。それから、あのドアのすぐ向こう側に、ソフィヤ・セミョーノヴナのテーブルがあるんです。あのひとはそこに腰をかけて、ロジオン・ロマーヌイチと話をしていたわけなので。わたしはこの椅子にかけながら、二晩続けて、しかも二度とも二時間くらい、ここで立聞きしたんですよ――だから、もちろん、わたしも何か少しは知ることができるだろうじゃありませんか。あなたはどうお考えですね？」

「あなたは立聞きなすったんですって？」

「さよう、立聞きしました。さあ、そろそろわたしの部

屋へ行きましょう。ここは腰をかける所もありませんから」

彼はアヴドーチャを導き、客間に当ててあるとっつきの部屋へ引っ返し、彼女に椅子にかけさせた。そして、自身はテーブルの反対の端に、少なくとも彼女から一間(けん)ばかり隔てて座を占めたが、どうやらその目の中には、いつかドゥーネチカを脅かした例の焔(ほのお)が、もうきらりと光ったらしい。彼女はぴくっと身震いして、も一度うさんくさそうにあたりを見回した。このしぐさは無意識なのであった。彼女は疑いの色を顔に出したくないらしかった。けれど、スヴィドリガイロフの住まいの世にも淋(さび)しい様子は、ついに彼女をぎょっとさせた。彼女はせめて主婦でも家にいるかと、尋ねてみたいと思ったが、結局尋ねはしなかった……つまり誇(プライド)のためである。その上、自分自身に対する不安とは比較にならぬほど大きな苦痛が、もう一つ彼女の心の中にあった。彼女は堪え難い苦痛を忍んでいたのである。

「これがあなたの手紙でございます」彼女はテーブルの上において、こう切り出した。「あなたの書いていらっしゃるようなことが、いったいあっていいものでしょうか？　あなたは兄が犯したという、犯罪のことをほのめかしていらっしゃいます。明瞭(めいりょう)すぎるくらい明瞭にほのめかしていらっしゃるのですから、今となってはごまかしも許されないくらいです。もっとも、お断わりしておきますが、わたしがあなたに伺う前に、このばかばかしい作り話を聞いていましたけど、そんな事これっから先も本当にしませんでした。それは汚らわしい滑稽(こっけい)な嫌疑です。わたしはそのいきさつも、またどうして、何が原因で、そんな噂が出て来たかって事も、ちゃんと存じています。あなたに何も証拠があろうはずはございません。あなたは証明してみせると約束なすったんですから、さあ言ってください！　けれど、前もってお断わりしておきますが、わたしはあなたを信じはしませんよ！　信じませんとも！」

ドゥーネチカはこれだけの事を、せきこんで早口に言い切った。一瞬間、彼女の顔には紅(くれない)がさっとさした。

「もしお信じにならないのなら、どうして一人でわたしのところへ来るなんて、そんな冒険がおできになるものですか？　いったいなんのためにいらっしたんです？　ただ好奇心のためですか？」

「わたしを苦しめないで、言ってください、言ってください！」

「あなたがしっかりしたお嬢さんなのは、申すまでもないことです。わたしは全くのところ、あなたがきっとラズーミヒン氏に頼んで、ここへついて来ておもらいになる事と思っていましたよ。ところが、あの人はあなたと一緒にもいなかったし、あなたのまわりにも見えなかった。わたしはよく見たんですからね。これは全く大胆ですよ。これでみると、あなたはつまりロジオン・ロマーヌイチをいたわりたかったんですね。もっとも、あなたの持っていらっしゃるものは、すべて神々しい……ところで、あなたの兄さんに関しては、この上何を話すこと

がありましょう？　あなたは今ご自分で、あの人をごらんになったじゃありませんか。まあ、どんな格好でした？」
「あなたはまさか、それだけのことを根拠にしてらっしゃるんじゃありますまいね？」
「いや、そんな事じゃありません。あの人自身のことばが根拠ですよ。現にここへ、ソフィヤ・セミョーノヴナのところへ、あの人は二晩つづけてやって来たんですよ。二人がどこに腰かけていたか、それは先刻お目にかけたとおりです。そこで兄さんはあのひとに一部始終を告白したんですよ。兄さんは人殺しです。自分で質を置きに行っていた、ある官吏の後家さんで、質屋をしている婆さんを殺したのです。それから、婆さんの殺されたところへ偶然はいって来た、妹のリザヴェータという古着商売の女もやはり殺してしまったのです。二人とも持って行った斧でやっつけたんです。つまり、もの取りのために殺したんで、それを実行したんですよ、金とそれから何やかやの品物を取ったんです……これを兄さんはそっくり詳しく、ソフィヤ・セミョーノヴナに話したんです。で、秘密を知ってるのはあのひと一人きりですが、しかしあのひとは口でも行ないでも、殺人に関係はありません。それどころか、今のあなたと同じように、ぞっとするほど驚いたくらいです。しかし、ご安心なさい、あのひとはけっして兄さんを売るようなことはしませんから」
「そんなことがあるはずはない！」ドゥーネチカは死人のような土色に変わった唇でつぶやいた。彼女ははあはあ息を切らしていた。「そんなことがあるはずはございません。まるでなんにも、これんばかりの理由もありません、少しも原因がありません……それは嘘です、嘘です！」
「兄さんはもの取りをなすった。これがいっさいの原因です。兄さんは金と品物を取ったんですよ。もっとも自分で白状なすったとこによると、金も品物も手をつけないで、どこかの石の下へ持って行ったとかで、今でもそこにあるそうですがね。しかし、これはただ手をつける勇気がなかったからです」
「だって兄がものを盗んだり、強奪したりするなんて、そんな事があっていいものですか？　兄はそんなことなんか、考えてみることもできる人じゃありません」とドゥーニャは叫んで、椅子からおどり上がった。「だって、あなたも兄をご存じじゃありませんか。お会いになったでしょう？　いったい兄に泥棒ができるとお思いになって？」
　彼女はまるでスヴィドリガイロフに、嘆願でもしているような風情だった。自分の恐怖などことごとく忘れつくしていた。
「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、こういうことには、幾千、幾百万という組合せや分類があるものですよ。泥棒はものを盗むが、その代わり内心ひそかに、自分は卑劣漢だと承知しています。ところでわたしは、郵便物を掠奪したある高潔な人間のことを聞きましたよ。いや、

全くその男はほんとうに立派なことをしたと、思っていたのかもしれませんて！　もちろんわたしにしても、これがもし脇から聞いた話なら、あなた同様、けっして本当にはしなかったでしょう。しかし、現在自分の耳を信じないわけにはいかなかったのです。兄さんはソフィヤ・セミョーノヴナに、ありたけの原因を説明なすったけれど、あのひとは初め自分の耳さえ信じませんでしたよ。しかし、とうとう目を信じました。自分自身の目を信用したのです、何しろ兄さんが自分であのひとに話したんですからね」

「いったいどんな……理由なんですの？」

「話せば長い事ですよ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ。そこには、さあなんと言ったらいいか、一種の理論があるんですよ。つまり、こういうわけなんです。たとえば、おもな目的さえよければ、一つぐらいの悪業は許さるべきだという、あれと同じ理屈なんですね。一つの悪業と百の善行！　その上に、もちろん、はかりしれないほど自尊心の強い才能のある青年にとって、たとえば、三千ルーブリかそこいらの金がありさえすれば、生活の行程も将来もすっかり別なものになってしまうはずだのに、その三千ルーブリがないと意識したら、屈辱を感ぜざるを得ないですからな。そこへもってきて、飢えと、狭苦しい部屋と、ぼろぼろの服と、自分の社会的地位のみじめさに対する明瞭な自覚と、それと同時に妹や母の境遇を思う心、こういうものから起こる焦燥を勘定に入れてごらんなさい。しかし、何よりも一番の原因は虚栄心です、自負心と虚栄心です。もっとも、こりゃあるいはいい傾向のものかもしれませんがね……わたしは何も兄さんを責めてるんじゃありませんよ。どうかそんなことを思わないでください。それにわたしの知ったことじゃないんですからね。そこにはもう一つ独特の理論があったんです――一とおりまとまった理論ですがね――それによると、いいですか、人間は単なる材料と特殊な人間に分類されるんです。そのうち後者は、生存の高い地位のお蔭で掟の制裁を受けないのみか、かえってその他の人間――つまり材料、塵あくたに対して、掟を作ってやるというわけです。なに、一とおりものになった理論ですよ。〔Une theorie comme une autre〕（その他の理論と同じような理論です）それに兄さんは、ナポレオンにすっかり参ったんですね。というより、多くの天才が個々の悪にとらわれないで、ためらうことなく踏み越して行った、ということにひきつけられたんですね。兄さんはどうやら、自分も天才だと考えたらしい――つまり、しばらくの間そう確信しておられたんですよ。兄さんはひどく苦しまれた、そして現に今も苦しんでいらっしゃる、というのは、理論を考え出すことはできたが、ちゅうちょなく踏み越えて行くことができない、したがって自分は天才ではない、とそう考えたからです。もうこれなどは自尊心の強い青年にとって、それこそ屈辱ですからね。ことに現代では特別……」

「でも、良心の呵責ってものが？　そうすると、あなたは兄に道徳的な感情がまるっきりないと思ってらっしゃ

るんですね？　まあ、いったい兄がそんな人間でしょうか？」
「ああ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、現代は何もかもが溷濁（こんだく）してしまってるんですよ。もっとも、今までだって、特にきちんとしていたことはありませんがね。元来ロシア人てやつはね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ、ちょうどその国土と同じように広漠とした人間で、幻想的（ファンタスチック）なだらしのないことにひきつけられる傾向を、やたらに持っているんです。しかし、特殊な天才もなくて、ただ広漠としてるんじゃ困りものですからね。あなたも覚えてらっしゃるでしょう、毎晩いつも夕食のあとで、あなたと二人、庭の露台（テラース）に腰かけて、よくこれと同じような題目（テーマ）で、これと同じようなことを、盛んに話したものじゃありませんか。おまけにあなたはその広漠性で、わたしを攻撃なすったものですが、ねえ、もしかすると、兄さんがここで横になって、自分の理論を考えていたのとちょうど同じ時刻に、わたし達もそれをしゃべっていたのかもしれませんよ。われわれ教養階級には、特に神聖な伝統というものがないんですからね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ。ただ誰かがどうやらこうやら、本を頼りに組み立てるか……それとも、年代記から何か引張り出して来るのが関の山です。しかし、そんなのはどっちかといえば学者だから、たいていはまあ一種のやぼなまぬけです。従って社交界の人にはぶしつけなくらいですよ。概してわたしの考えはあなたもご承知ですが、わたしはけっして人を責めない人間です。わたし自身が白手（ホワイトハンド）で、またそれを固守してるんですからね。しかしこのことは、わたし達もう一再ならずお話ししましたっけ。それどころか、わたしの議論があなたの興味をひいたことすらあったくらいです……あなた、大へん顔色が悪いじゃありませんか、アヴドーチャ・ロマーノヴナ」
「わたしもその理論は知っています。いっさいを許されている人間を論じた兄の文章を、わたし雑誌で読みました……ラズーミヒンさんが持って来てくだすったので……」
「ラズーミヒン氏が？　あなたの兄さんの論文を？　雑誌にのった？　そんな論文があるんですか？　わたしは知らなかった。それはきっと面白いに違いない！　ですが、あなたはどこへいらっしゃるんです、アヴドーチャ・ロマーノヴナ」
「わたしはソフィヤ・セミョーノヴナに会いたいんですの」とドゥーネチカは弱々しい声で言った。「あのひとのとこへは、どう行ったらいいんでしょう？　もう帰ってらっしゃるかもしれませんわ。わたしはぜひ今すぐあのひとに会いたいんですの。あの人の口から……」
　アヴドーチャ・ロマーノヴナはしまいまで言うことができなかった。息が文字通り切れたのである。
「ソフィヤ・セミョーノヴナは、夜までは帰りますまいよ。わたしはそう思いますね。あのひとはずっと早く帰らなきゃならんはずですが、もしそうでないとすると、うんと遅くなるでしょうよ……」
「ああ、それじゃお前は嘘をついたんだね！　今こそわ

かった……お前は嘘をついたんだ……お前は嘘ばかりついてたんだ！　わたしはお前なんか信用しやしない！　信じない！　信じない！」とドゥーネチカはすっかり夢中になって、もの狂わしげに叫んだ。

彼女はほとんど失神したように、スヴィドリガイロフが急いで当てがった椅子の上へ倒れた。

「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、どうなすったんです、しっかりなさい！　さあ、水です。ひと口お飲みなさい……」

彼はドゥーネチカに水を吹きかけた。彼女はぶるっと身震いして、われに返った。

「ひどくきいたもんだな！」とスヴィドリガイロフは眉を寄せながらひとりごちた。「アヴドーチャ・ロマーノヴナ、気を落ち着けなさい！　兄さんには友達があるんですからね。わたし達は兄さんを救います、助け出します、なんなら、わたしが兄さんを連れて外国へ逃げましょうか？　わたしは金を持っています。三日の中に切符を手に入れます。たとえ兄さんは人殺しをしたって、そのうちにいい事をうんとしたら、何もかも帳消しができますからね。気を落ち着けてください。それどころか、偉い人になるかもしれませんよ。ええ、どうなすったんです？　気分はいかがです？」

「悪党！　まだ人をなぶってる。わたしを出してください……」

「あなたどこへ行くんです？　どこへ？」

「兄のところへ。兄はどこにいます？　あなたご存じでしょう？　どうしてこのドアに鍵がかかってるんです？　わたし達はこの戸口からはいって来たのに、それが今は鍵がかかってる。いつの間にあなたは鍵をかけたんです？」

「わたし達がここで話し合ったことを、家じゅうの部屋へ筒ぬけに聞かれちゃ困りますからね。わたしはけっしてなぶってなんかいません。唯わたしはあんな調子で話してるのに、あきあきしたのです。ねえ、あなたはそんな風をして、どこへいらっしゃるんです？　それとも、兄さんをわたしたいんですか？　あなたは兄さんを気ちがいにしてしまって、あの人が自分で自分をわたすようにしたいんですか？　兄さんはもう目をつけられて、手が回ってるんですからね。それを承知してください。そんな事をしたら、兄さんをわたすばかりですよ。まあおかけなさい。一緒によく考えようじゃありませんか。わたしがあなたをお呼びしたのは、あなたと二人きりでこの事を相談して、よく思案をするためなんですよ。まあ、おかけなさいったら！」

「どうして兄を救うことがおできになるんです？　ほんとうに兄を救うことができるんですの？」

ドゥーニャは腰をおろした。スヴィドリガイロフはそのそばにすわった。

「それは皆あなたのお心ひとつですよ。あなたの心、あなたの心ひとつです」彼は目をぎらぎら輝かしながら、興奮のあまりほかのことばが口に出ないで、どもりどもりささやくように言った。

ドゥーニャはぎょっとして、思わず一歩後へよろめいた。彼も同じように全身を戦(おのの)かせていた。
「あなたが……わずかあなたの一言で、兄さんは救われるんです！　わたしは……わたしは兄さんを救います。わたしには金と友人があります。わたしはすぐ兄さんを発(た)たせてあげます。自分で旅券を取ってあげます、旅券を二枚。一枚は兄さんので、もう一枚はわたしのです。わたしには友人があります。みんないい連中です……いかがです？　わたしはその上、あなたの旅券も取ってあげますよ……あなたのお母さんのも……あなたにはラズーミヒンなんかいりゃしません。わたしだってあなたを愛しています……限りなく愛しています。どうかあなたの着物の端を接吻(せっぷん)させてください、接吻させて！　接吻させて！　わたしはその衣(きぬ)ずれの音を聞いてもたまりません。どうかそれをしろと言ってください、わたしはちゃんとします。わたしは不可能を可能にして見せます。あなたの信じていらっしゃることは、わたしもきっと信じましょう。わたしはなんでも、なんでもします！　そんな風にわたしを見ないでください、見ないでください！　あなたは、わたしをなぶり殺しにしてらっしゃるのをご存じですか……」
彼はうわ言でも言ってるような風になってきた。それは、いきなり頭をがんと打たれた人にほうふつとしていた。ドゥーニャはおどり上がって、戸口の方へ駆け寄った。
「あけてください！　あけてください！」彼女は両手でドアをゆすぶり、誰にともなく助けを求めながら扉越しにこう叫んだ。「あけてくださいったら！　いったい誰もいないんですか？」
スヴィドリガイロフは立ち上がって、われに返った。毒々しい嘲(あざけ)るような微笑が、まだ震えもやまぬ彼の唇の上へ、そろそろと押し出された。
「あっちにゃ誰もいやしませんよ」と彼は低い声で間をおきながら言った。「かみさんは留守だから、そんな大きな声をしたって無駄ですよ。ただつまらなく自分で自分を興奮させるばかりですよ」
「鍵(かぎ)はどこ？　すぐドアをあけておくれ、今すぐ、なんて卑怯(ひきょう)な男だろう！」
「鍵はなくしてしまいました。どうしても見つかりません」
「ああ！　それじゃ人を手籠(てご)めにしようというんだね！」こう叫んだドゥーニャは、死人のように真青になって片隅へ飛びのくと、いきなり手もとにあった小卓を楯にとった。
彼女はもう叫び声こそ立てなかったが、食い入るようにひたと迫害者をみつめながら、その一挙一動を鋭く見守っていた。スヴィドリガイロフもその場を動かずに、彼女と向き合ったまま、部屋の反対側に突っ立っていた。彼は自分を統御するだけの余裕があった。少なくとも、表面だけはそう見えた。が、顔は依然として青ざめていた。嘲るような微笑は彼の顔を去らなかった。
「あなたは今『手籠め』とおっしゃいましたね、アヴド

ーチャ・ロマーノヴナ。もし暴力だとすると、わたしの処置が当を得ているのに、なるほどとお思いになりましょう。ソフィヤ・セミョーノヴナは留守だし、カペルナウモフの住まいまではずっと遠くて、しめ切った部屋が間に五つもあります。それから最後に、わたしはあなたより少なくも二倍は力が強いです。その上、わたしには何も恐れることなんかありません。なぜって、あなたはあとで訴えるってことができませんからね。何分、あなたもまさか兄さんをわたす気にはならないでしょう？　それに、誰もあなたを信じる人はありませんよ。そうじゃありませんか、若い娘さんが一人で独身者の男の所へ、出かけるわけがありませんからね。だから、よし兄さんを犠牲になすったところで、結局なにも証拠だてることはできませんよ。手籠めってことは、非常に証明しにくいものですからね、アヴドーチャ・ロマーノヴナ」

「悪党！」とドゥーニャは憤りのささやきを漏らした。

「なんとでもおっしゃい。しかしお断わりしておきますが、わたしはただ仮定の形で言っただけですよ。わたし自身の確信から言えば、たしかにあなたのおっしゃる通りです。暴力は卑劣な行為です。ただわたしが申し上げたのは、もしあなたが……たとえもしあなたがわたしの申し出に従って、進んで兄さんを救おうという気におなりになったとしても、あなたの良心には何もやましいところは無いという、ただそれだけのことなんです。あなたは単に状況（もしそう言わなくちゃ済まないのなら、暴力と言ってもよろしい）に屈服なすったというだけの話じゃありませんか。こういうことを考えてごらんなさい――兄さんとお母さんの運命は、あなたの掌中に握られてるんですよ。しかも、わたしはあなたの奴隷になります……一生涯……わたしはここにこうして待っています……」

スヴィドリガイロフはドゥーニャから八歩ばかり隔てた長椅子に腰をおろした。彼の決心を動かすことができないのは、彼女にとって疑う余地もなかった。それに、彼女は、彼の人となりを知っていた……

ふいに彼女はポケットから拳銃を取り出して、引金を上げ、拳銃を持った手をテーブルの上にのせた。スヴィドリガイロフは席からおどりあがった。

「ははあ！　そういうことですか！」と彼は驚きながらも、毒々しい微笑を浮かべてこう叫んだ。「いや、それでは事件の進行が一変してしまいますな！　あなたはたいへんわたしの仕事を楽にしてくださるわけですよ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ！　それに、その拳銃をどうして手にお入れになりましたね？　こりゃラズーミヒン氏の斡旋ですかね？　おや！　それはわたしの拳銃だ！　古い馴染の拳銃だ！　あの時わたしはそれをどんなに捜したかしれない！……わたしが田舎でご教授の光栄を有した射撃の稽古も、やっぱり無駄にはなりませんでしたな」

「お前の拳銃じゃない、お前の殺したマルファ・ペトローヴナのじゃないか、悪党！　あのひとの家の中には、お前の物なんか一つだってありゃしなかった。わたしは、

お前がどんなことをするかしれない人間だと思ったから、これを取っておいたんです。一足でも踏み出してみるがいい、わたし誓ってお前を殺すから！」
　ドゥーニャは半狂乱であった。彼女は拳銃を上げて身構えた。
「じゃ、兄さんはどうします？　ちょっと物ずきにお尋ねしますが」やはり同じ所に立ったまま、スヴィドリガイロフは尋ねた。
「したけりゃ告訴するがいい！　一足だってそこを動いたら！　撃ってしまうから！　お前は奥さんを毒殺したじゃないか、わたしはちゃんと知ってる、お前こそ人殺しだ……」
「じゃ、あなたはわたしがマルファを毒殺したと、はっきり確信していらっしゃるんですね！」
「お前だとも！　お前が自分でわたしにおわしたじゃないか。お前はわたしに毒のことを話した……お前が毒を買いに町まで行って来たのを……わたしはちゃんと知っている……お前は前から用意していたのだ……それはもうお前に違いない……悪党！」
「もし仮りにそれが事実だとしても、それもお前のためなんだ……やはりお前が因なんだ」
「嘘をつけ！　わたしはお前を憎んでいた、いつも、いつも……」
「ええっ、アヴドーチャ・ロマーノヴナ！　あなたは伝道熱で夢中になって、つい妙なそぞろ心になったのを、お忘れになったとみえますね……わたしはあなたの目つきでわかりましたよ。覚えてらっしゃるでしょう？　あの晩、月が照らして、おまけにうぐいすまで啼いていましたっけ……」
「嘘をつけ！　（ドゥーニャの目の中にはもの狂おしい憤怒がひらめいていた）。そんなことはない、嘘つき！」
「嘘だって？　いや、まあ嘘かもしれない。わたしは嘘を言いましたよ。女にこんなことを言うものじゃないんだ（と彼は薄笑いを漏らした）。おれもお前がぶっ放すのは知ってるよ、まるで可愛いい野獣だ。さあ、撃て！」
　ドゥーニャは拳銃を上げた。そして、死人のようにまっさおな顔をして、血の気を失った下唇をわなわなと震わせ、焔と燃える大きな黒い目で相手を見つめながら、彼の方からちょっとでも動き出すのを、心をけっして待っていた。彼はまだかつて一度も、これほど美しい彼女を見たことがなかった。彼女が拳銃をさし上げた瞬間に、その目の中からひらめき流れた焔は、彼を焼いたような気がした。彼の心臓は痛いほどしめつけられた。彼は一歩ふみ出した。と、発射の音が響き渡った。弾丸は彼の髪を掠めて、うしろの壁へあたった。彼は立ち止まって、低く笑った。
「蜂が刺した！　いきなり頭をねらってやがる……なんだこれは？　血だ！」
　彼は細くたらたらと右のこめかみに流れる血をふくために、ハンカチを取り出した。どうやら弾丸はちょっと上皮を掠めたばかりらしい。ドゥーニャは拳銃をおろして、恐怖というよりも、何かしらけうとい疑惑の表情で、

スヴィドリガイロフをみつめていた。彼女は自分でも何をしたのやら、またそれがどうなっているのやら、いっこうわからない様子だった。
「いや、射ち損じなら仕方がない！　もう一度おやんなさい、待ってますよ」とスヴィドリガイロフは低い声で言った。まだ薄笑いは依然として浮かべていたが、どことなく陰鬱な調子だった。
「そんな事をしていると、引金をお上げになる前に、あなたをつかまえてしまうことができますぜ！」
　ドゥーネチカはぴくりと身震いして、すばやく引金を上げ、再び拳銃をさし上げた。
「もう帰してください！」と彼女は絶望の調子で言った。
「わたし、誓ってまた撃ちますよ……わたし……殺しますよ！……」
「いや、やむを得ません……三歩の距離じゃ殺せないわけがない。が、もし殺せなかったら……その時は……」
　彼の目はぎらぎらと輝いた。彼は更に二歩すすんだ。
　ドゥーネチカは引金をおろした。ただかちりといっただけである！
「装填が不備だったんだな、なに、かまいません！　まだ雷管があるでしょう。お直しなさい、待っていますから」
　彼は二歩離れたところに立って待っていた。そして、情熱に燃える重苦しげな目つきで、野性的な決心を面に浮かべながら、彼女をみつめていた。ドゥーニャは悟った――彼は自分を手放すくらいなら、むしろ死を選ぶに相違ない。『だから……だからもうどうあっても、今度こそ二歩の距離で殺してしまわねばならぬ……』
　突然、彼女は拳銃をがらりと投げ捨てた。
「捨てたな！」とスヴィドリガイロフはびっくりしたように言って、息を吐いた。
　何かあるものが一度に彼の心から離れてしまったようなぐあいだった。しかも、それは死の恐怖の重荷ばかりではなかったかもしれない。それにこの瞬間、彼はほとんどそんなものを感じていなかった。それはおそらく彼自身も完全に定義できない、もっと痛ましい陰惨な別な感情からの解放であった。
　彼はドゥーニャの傍へ寄り、片手を静かに彼女の腰に回した。彼女はあらがおうとしなかったが、全身を木の葉のようにおののかせながら、祈るような目で彼を見た。彼は何か言おうとしたが、ただその唇がゆがんだばかりで、一言も発することができなかった。
「帰して！」とドゥーニャは祈るように言った。
　スヴィドリガイロフはぴくっと身震いした。この敬語を抜いたことばづかいには、どこやら前のとは違った響きがあった。
「じゃ、愛はないの？」と彼は小声に尋ねた。
　ドゥーニャは否定するように頭を振った。
「そして……愛することもできない？……どうしても？」と彼は絶望したようにささやいた。
「どうしても！」とドゥーニャもささやいた。
　スヴィドリガイロフの心の中では恐ろしい暗闇の一瞬

間が過ぎた。名状し難いまなざしで彼は女をみつめていた。突然彼は手をひいてくるりと背を向けると、すばやく窓の方へ離れて、その前に突っ立った。

また一瞬間が過ぎた。

「さあ鍵(かぎ)です！　（彼はそれを外套(がいとう)の左のポケットから取り出して、ドゥーニャの方は見もせず、ふり向きもしないで、うしろのテーブルの上へのせた）おとんなさい。そして早く出て行ってください……」

彼はしゅうねく窓の外を見ていた。

ドゥーニャは鍵をとろうと、テーブルに近づいた。

「早くして！　早くして！」いつまでも身動きもしなければ、ふり向こうともせず、スヴィドリガイロフはくり返した。

けれど、この『早くして』の中には、明らかに何か恐ろしい調子が響いていた。

ドゥーニャはそれを悟った。彼女は鍵をつかむと、戸口へ駆け寄って、手早く鍵をあけると、やにわに部屋から飛び出した。そして一分後には、気ちがいのように前後を忘れて、掘割通りへ走り出で、××橋の方をさして駆け出した。

スヴィドリガイロフはまだ三分ばかり窓の傍に立っていた。やがてのろのろと後ろをふり向いて、あたりを見回し、静かに手で額を撫(な)でた。奇怪な微笑が彼の顔をゆがませた。みじめな、もの悲しい、弱々しげな微笑、絶望の微笑。もう乾きかけていた血が手を汚した。彼は毒々しい目つきでその血をみつめていたが、やがてタオルを湿してこめかみをきれいにふいた。ドゥーニャにほうり出されてドアのそばへけし飛んだ拳銃が、ふと彼の目にはいった。彼はそれを拾い上げて検(あらた)めてみた。それは旧式な懐中持ちで、小型な三連発の回転拳銃だった。中にはまだ弾丸が三つと雷管が一つ残っていた。いま一度射てるわけだ。彼はしばらく考えて、拳銃をポケットへ押しこむと、帽子を取って出て行った。

六

その晩、彼は十時ころまで、次から次へといろんな料理屋や、曖昧宿(あいまいやど)を歩き回った。どこかでカーチャも捜しあてた。彼女はまたある『悪性者の女たらし』が『カーチャに接吻(せっぷん)し始めた』という、今度は違った下男趣味の歌をうたった。

スヴィドリガイロフは、カーチャにも、手風琴回しにも、給仕にも、どこかの書記二人にも、酒を飲ませた。この二人の書記と関係をつけたのは、ほかでもない、彼らが二人とも曲がり鼻をしていたからである。一人の鼻は右へ、一人の鼻は左の方へ曲がっていた。これがスヴィドリガイロフの目をひいたのである。二人はとうとう彼をある遊園地へ引っ張って行った。そこでは、彼はみんなに入場料を払ってやった。この遊園地には、ひょろひょろした三年もののもみの木が一本と、貧弱な植込みが三ところにあった。そのほか、実質は要するに酒場にすぎない『ホール』が設けてあった。しかし、お茶くらいは注文することができたし、その上にいくつかの緑色に塗った小卓と椅子が置いてあった。ひどい歌うたいの合唱団と、赤鼻の道化者じみた、しかしなぜか馬鹿に浮き立たない、酔っ払ったミュンヘン生まれのドイツ人が、精々見物のご機嫌を取り結んでいた。二人の書記はどこかのほかの書記連と喧嘩(けんか)をして危くつかみ合いが始まりそうになった。そこでスヴィドリガイロフは仲裁役に選ばれた。彼は十五分ばかりも調停してみたが、みんながあまりわめき立てるので、何が何やらまるでわからなかった。一ばん真相に近そうなのは、彼らの一人が何か盗んで、しかもすぐその場で、ちょうどそこに来合わせたあるユダヤ人にうまく売りつけた。ところが売っておきながら、仲間に山分けという段になって猫ばばしようとした、という事らしかった。結局、その盗んで売った品というのが、『ホール』のスプーンだと知れた。『ホール』の方でそれと気づいたのである。事はいよいよ面倒になってきた。スヴィドリガイロフは匙(さじ)の代を払って立ち上がると、遊園地から外へ出た。かれこれ十時ごろだった。彼自身はその間一滴も酒を飲まなかった。ただ『ホール』で茶を命じただけで、それもどちらかといえば体裁のためであった。むしむしするうっとうしい晩だった。十時ちかくなると、四方からもの凄い黒雲が押し寄せ、雷が轟然(ごうぜん)と鳴り始め、雨が滝のように降ってきた。水は一滴ずつ落ちるのではなく、つながった流れになって大地を鞭(むち)うった。稲妻は絶間なくひらめいて、ぱっと明るくなるたびに、五つまで数を読む事ができた。彼は骨の髄までずぶぬれになって家へ帰ると、部屋の戸に鍵をかけ、事務卓(ビューロー)の蓋(ふた)をあけて、ありたけの金を取り出した。それから二、三の書類を引き裂きもした。やがて、金をポケットへ押し込んで、服を着かえようとしかけたが、窓の外を見て、雷鳴と雨の音に耳を澄すと、諦めたように片手を振って帽子を手に取り、戸に鍵もかけずに部屋を出た。まっすぐにソーニャの部屋へ行ってみると、彼

女は家にいた。
　彼女は一人きりではなかった。カペルナウモフの小さい子供が四人、そのまわりをとり巻いていた。ソーニャに茶を飲ませてもらっていたのである。彼女は無言のまま、うやうやしくスヴィドリガイロフを迎えたが、びしょぬれになった彼の服をびっくりしたように見回した。が、一言も口はきかなかった。ところで子供たちは、筆紙に尽くし難い恐怖の体で、そうそうに逃げて行ってしまった。
　スヴィドリガイロフはテーブルの前に腰をおろし、ソーニャにも傍へかけてくれと頼んだ。彼女はおずおずと聞く身構えをした。
「私はね、ソフィヤ・セミョーノヴナ、ことによると、アメリカへ行ってしまうかもしれないんです」とスヴィドリガイロフは言った。「で、あなたとお目にかかるのも、多分これが最後でしょうから、何かの始末をつけておきたいと思って伺ったわけです。さて、あなたは今日あの奥さんに会いましたか？　私はあのひとがあなたに何を言ったか、ちゃんと承知しておりますから、改めて聞かせていただかなくてもいいです。（ソーニャはもじもじして、顔を赤らめた）。ああいう人たちには決まった流儀がありますからね。ところであなたの妹さんや弟さんの方は、もうほんとうに身の振り方がついたわけです。それからあの人たちに決めてあげた金は、一人ひとりべつべつに受取りをとって、確かな然るべきところへあずけておきましたから。もっとも、この証書はあなたあずかっておいてください。なに、ただ万一の場合のためですよ。さあ、お渡ししますよ！　さあ、もうこれでこっちは済んだと。それから、ここに五分利つきの債券が三枚あります。すっかりで三千ルーブリです。これはあなたご自分で、ご自分のものとしてとっといてください。これは私たち二人の間だけのことにして、たとえどんな事をお聞きになっても、誰にも知られないように願います。この金はあなたのお役に立ちますよ。だって、ソフィヤ・セミョーノヴナ、今までのような生活をするのは――汚らわしいことですからね。それに、もうこの先そんな必要もないんですから」
「わたし、あなたにはいろいろご恩になりまして、子供たちも、なくなった母も」とソーニャはせきこみながら言った。「それだのに、今まではろくろくお礼も申し上げないでいましたけど、それは……どうぞあしからず……」
「ええっ、もうたくさんですよ、たくさんですよ」
「で、この金は、アルカージイ・イヴァーヌイチ、まことに有難うはございますけど、わたし、今のところ差し向き入用ございませんの。わたし一人だけの糊口（くちすぎ）はいつでもできますから。どうか恩知らずだなどとお思いくださいませんように。あなたはそれほどお情ぶかい方でしたら、どうぞこのお金は……」
「あなたのものです、あなたのものです。ソフィヤ・セミョーノヴナ、どうかもうとかくの押し問答はぬきにしてください。それに私は暇もないんですから。あなたに

は入用になりますよ。ロジオン・ロマーヌイチの行く道は二つしかありません――額へ弾丸を撃ち込むか、それともウラジーミルカ行きです（ソーニャは気うとい目つきで相手を見て、わなわなと震え出した）。ご心配には及びません。私はあの人自身の口から、何もかも知ったんですが、しかし私はそんなおしゃべりじゃありませんからね。誰にも言やしません。あなたがいつかあの人に、自首しろとおすすめなすったのはいいことでした。その方があの人のためにずっと有利ですよ。ところで、ウラジーミルカ行きの宣告がおりて、あの人がそちらに行ったら、あなたもあとを追っていらっしゃるでしょう？　ね、そうでしょう？　そうでしょう？　ねえ、もしそうとすれば、つまりさっそく金がいるわけじゃありませんか。あの人のためにいるんですよ、わかりましたか？　あなたに差し上げるのは、あの人に上げるも同じことなんです。それに、あなたはほらアマリヤ・イヴァーノヴナに、借金を払う約束をなすったじゃありませんか。私は聞いていましたよ。いったいなんだってあなたはいつも無考えに、そんな約束や義務をお引受けになるんです？　だって、カチェリーナ・イヴァーノヴナこそ、あのドイツ女に借金しておられたけれど、それはあなたの借金じゃないじゃありませんか。だから、あなたはあのドイツ女なんかには、唾でもひっかけてやればよかったんです。そんな風では世渡りはできやしませんよ。さてそこで、もしいつか、誰かがあなたに――まあ、明日なり明後日なり――私のことでなければ、私に関係した事を尋ねたとしても（あなたは必ずきかれるでしょうよ）、私が今ここへお寄りしたことは言わないように、そして金も見せないようにしてください。また私があなたに差し上げたということを、けっして誰にも言っちゃいけませんよ。では、もうお暇します（彼は椅子から立ち上がった）。ロジオン・ロマーヌイチによろしく。それからついでですが、金は入用の時まで、ラズーミヒン氏のところへでもあずけておおきなさい。ラズーミヒン氏をご存じでしょう？　いや、むろんご存じのはずです。なに、なかなかいい男ですよ。あの人のところへ明日にでも、つまり……時が来たら、持っていらっしゃい。それまでは、なるべくしっかり隠しておおきになるといい」

　ソーニャも同様に椅子からおどり上がり、おびえたように彼を見つめていた。彼女はしきりに何か言いたい、何か尋ねたいような気がしたけれど、初め一、二分はその勇気もなかったし、それにどう口を切っていいかもわからなかった。

「どうしてあなたは……どうしてあなたは、今こんな雨の中を出ていらっしゃいますの？」

「なあに、アメリカまで行こうというものが、雨を恐れていてどうしますか、へ、へ！　さようなら、可愛いいソフィヤ・セミョーノヴナ！　生きてらっしゃい、いつまでも生きてらっしゃい。あなたは他人のためになる人ですからね。ついでに……どうかラズーミヒン氏に、私からよろしくとお伝えください。どうかこのとおりに伝えてくださいませんか――アルカージイ・イヴァーヌイ

チ・スヴィドリガイロフがよろしくって。ぜひともね」
彼はソーニャを驚愕と、畏怖と、何かぼんやりとした重苦しい疑惑の中に取り残して、そのまま出て行った。
あとになってわかったことだが、彼はこの夜の十一時過ぎに、いま一つきわめて突飛な、思いがけない訪問をした。雨はまだやんでいなかった。彼は全身ずぶぬれになって、十一時二十分というのに、ヴァシーリエフスキイ島のマールイ通り三丁目にある許嫁の両親の手狭な住まいへはいって行った。彼はやたらに表をたたいて、無理に戸をあけさせたので、初めは少なからず恐慌を起こしかけたが、スヴィドリガイロフは自分でその気になると、きわめて魅力に富んだものごしをとれる人だったので、多分どこかでふんだんに酒をあおって、前後不覚に酔っ払ったのだろうという、許嫁の両親のそそっかしい推量も（もっともなかなかうがった推測ではあったが）、たちまち自然と解消してしまった。気だての優しい分別のある母親は、衰弱した父親を車のついた肘椅子に載せて、スヴィドリガイロフの所へ押して来た。そしていつもの伝で、何かと遠回しな質問を始めた（この婦人はけっしてまともな質問をしたことがなく、いつも初めは微笑と揉み手というようなものから始めて、やがて何かぜひ確かに知らねばならぬことがあると――たとえばアルカージイ・イヴァーヌイチの方では婚礼をいつにしたらご都合がいいか、というようなことをきこうと思うと、まずパリやそこの宮中生活について、好奇心のあふれそうな、ほとんど貪婪といいたいくらいな質問を皮切りに、それからだんだんと順序を追って、ヴァシーリエフスキイ島三丁目まで持って来るのであった）。もちろんほかの場合なら、それもこれも多大の尊敬を相手に感じさせるのであったが、この時のアルカージイ・イヴァーヌイチは、どうしたのか格別せっかちになっていて、一刻も早く許嫁を見たいと、命令するような調子で言い出した。そのくせ、彼は一番はじめから、もう娘は寝についたと断わられていたのである。もちろん許嫁は出て来た。アルカージイ・イヴァーヌイチは、いきなり彼女に向かって、実はあるきわめて重大な用件のために、一時ペテルブルグを離れなければならないから、いろんな紙幣をとりまぜて一万五千ルーブリを彼女に持参した。つまらないものだが、かねて結婚前に贈呈しようと思っていたのだから、贈物として受けてもらいたいと言った。この贈物と、火急な出発と、夜遅く雨の中をどうしても持って来なければならなかった事情と、これらの間の論理的関係は、もちろんこの説明では出て来ようがなかった。けれど、話はいたってすらすらと進んだ。こういう場合なくてならぬ『おお』とか『ああ』とかいう叫びや、さまざまな質問や驚きさえ、なんだか急に不思議なほどおとなしく控え目になった。その代わり燃ゆるがごとき熱烈な感謝が表示され、それがこの上もなく分別のある母親の涙で裏書された。アルカージイ・イヴァーヌイチは立ち上がってからからと笑い、許嫁を接吻してその頬を軽くたたき、じき帰って来るからとくり返したが、娘の目の中に子供らしい好奇心と、同時に何かしら恐ろし

くまじめな、ことばに出さぬ疑惑の色を認めると、ちょっと考えて、もう一度彼女を接吻した。そしてせっかくの贈物がたちまちのうちに、世界じゅうの母親の中でも一ばん分別のある母親に鍵(かぎ)をかけてしまわれてしまうだろうと思うと、すぐ心底からいまいましくなってきた。彼は一同を並々ならぬ興奮の中に取り残して、ぷいと出て行った。けれど、気だての優しい母親は半ばささやくような早口で、すぐに二、三の重大な疑惑を解決した。ほかでもない、アルカージイ・イヴァーヌイチはえらい人で、いろいろ事業にも関係し、親戚(しんせき)知己も多い金持だから――頭の中で何を考えているかわかるものじゃない。思い立つとどこかへ出かけるし、思い立つと金をくれる。だから、何も驚くことはない。もちろん、全身ずぶぬれなのは奇妙だけれど、たとえばイギリス人などはあれよりもっと突飛なことをやる。それに、ああした身分のある人は誰でも、みんな世間で何を言おうと平気なもので、遠慮気兼ねなどしないものである。事によったらあの人は、誰もこわくないということを見せるために、わざわざあんな格好をして歩いているのかもしれない。が、何よりかんじんなのは、これを一言(ひとこと)も他人にもらさないことだ。なぜといって、これからどんなことが起こるかしれないからである。金は一刻も早く錠をかけてしまわなければならぬ。それにつけても、一ばん都合がよかったのは、女中のフェドーシャがずっと台所にいてくれたことだ。とにかくかんじんなのは、けっして、けっして、何によらず、あの海千山千のレスリッヒに何一つ知らせてはならない――等々であった。彼らは夜中の二時ころまですわり込んだまま、ひそひそと話し合っていた。もっとも、許嫁の娘はずっと早く床にはいったが、呆気(あっけ)にとられたような、少しもの淋しいような風をしていた。

その間にスヴィドリガイロフは、ちょうど真夜中にペテルブルグスキイ区をさして、××橋を渡っていた。雨はあがったが、風がごうごう鳴っていた。彼はぶるぶる震え出した。そして、ちょっとの間ある特殊な好奇心と、疑惑の色さえ浮かべながら、小(マーラヤ)ネヴァ河の黒い水をながめた。けれど間もなく、水の上に立っているのがやけに寒く思われてきた。彼はくびすを転じて××通りの方へ足を向けた。彼は暗い板敷きの歩道で何べんとなくつまずきながら、果てしのない××通りをもうだいぶ長く、ほとんど三十分も歩いて行った。そして好奇の表情で通りの右側に何かを捜し続けていた。彼は近ごろ通りすがりにどこかこのあたりで、もう通りのはずれに近い所に、木造ながら広そうな宿屋を見つけたことがある。その名は、彼の覚えている限りでは、何かアドリアノーポリといった風のものだった。彼の見当は間違っていなかった。くだんの宿屋はこんな場末では、暗闇の中でさえ見つけずにはいられないほど、きわ立った目じるしになっていた。それは長い木造の黒ずんだ建物で、もう時刻も遅いのに、中ではまだ灯(あかり)がついており、なんとなくにぎやかそうな気配が感じられた。彼ははいって行って、廊下で出会ったぼろ服の男に部屋を尋ねた。ぼろ服はスヴィ

ドリガイロフに一べつを投げると、ぶるっと武者震いをし、どこか廊下のはずれで、隅っこの階段下に当たる陰気な狭い部屋へ、すぐに客を案内した。そのほかにはもう部屋がなかった。全部ふさがっているのであった。ぼろ服は問いかけるようにスヴィドリガイロフを見た。
「茶はあるかい？」とスヴィドリガイロフは尋ねた。
「そりゃできます」
「それから何がある？」
「こ牛肉と、ウォートカと前菜（ザクースカ）で」
「こ牛肉と茶を持って来てくれ」
「そのほかにゃ何もご注文はございませんか？」とぼろ服はけげんそうな顔をして尋ねた。
「何もない、何もない！」
ぼろ服はすっかり当てがはずれて出て行った。
『こりゃきっといい場所に相違ない』とスヴィドリガイロフは考えた。『どうして俺はこれを知らなかったろう。どうやら、俺もどこかカフェー・シャンタンの帰りで、しかも何か途中でひと騒動やったという様子をしているらしい。だがそれにしても、いったいここはどんなやつが泊まって行くのだろう、ちょっと興味があるな』
彼はろうそくをつけて、しさいに部屋を見回した。それはほとんどスヴィドリガイロフの背丈にも足りない、窓の一つしかない、小さな檻（おり）のような部屋だった。恐ろしくきたならしい寝台と粗末な塗りテーブルと椅子一脚がほとんど部屋じゅうを占領していた。壁は板でも打ちつけたような外観を呈していた。壁紙は色（黄色）こそどうにかまだ察せられるが、模様にいたっては、まるっきり見分けがつかないほどほこりにまみれて、裂け傷だらけで、見るかげもなくなっていた。壁と天井の一部はよく屋根部屋に見かけられるように、斜めに断ち切られていたが、ここではこの傾斜の上が、階段になっているのだった。スヴィドリガイロフはろうそくを置いて、寝台の上に腰をおろし、じっと考え込んだ。けれど、どうかすると叫び声といってもいいくらい高くなる、奇体な絶え間のない隣室のひそひそ話が、とうとう彼の注意をひいた。このひそひそ話は、彼がはいって来た時から、やみ間なく続いていたのである。彼は聞耳を立てた。誰かもう一人の相手を罵（ののし）ったり、ほとんど涙を流さんばかりに責めたりしているのだ。しかし、聞こえるのはただその声ばかりだった。スヴィドリガイロフは立ち上がって、手でろうそくのかげをした。と、すぐ壁にちらと隙間（すきま）が光った。彼はその傍へ寄って、隙見を始めた。彼自身のよりいくらか大きい部屋の中には、二人の客がいた。恐ろしくもしゃもしゃと渦巻いた頭に、真っ赤な燃えるような顔をした中の一人は、上着なしで、弁士のような姿勢を取りながら、体の平均を保つために、両足をひろげて突っ立ったまま、片手で胸をたたきながら、相手の男を責めていた。彼がまる裸の乞食（こじき）で、なんの官等も持っていないのを、自分が泥沼の中から引上げてやったのだから、いつでも好きな時に追い出せるのだが、それもこれも天帝のみが見そなわすだけだ――というようなことだった。責められている方は椅子に腰かけて、く

しゃみが出たくてたまらないのに、どうしてもうまく出ないような顔をしていた。彼は時々羊のような、どんよりした目で弁士を見やったが、いまなんの話をしているのやら、かいもくわからないらしい様子が見え透いていた。それに、ほとんど何一つ耳にはいらないらしかった。テーブルの上にはろうそくが危うく燃え残って、大方からになったウォートカのびんや、さかずきや、パンや、コップや、きゅうりや、もうとっくに飲みほされた茶器などがのっていた。この光景を注意深く見てとると、スヴィドリガイロフは気のない様子で隙間から離れ、再び長椅子に腰を下した。

茶とこ牛肉をもって引っ返したぼろ服は、いま一度『まだ何かご注文はありませんか？』と問いかけずにはいられなかったが、またもや『ない』という返辞を聞くと、もうすっかり引っ込んでしまった。スヴィドリガイロフは暖まるために、急いで茶に飛びかかった。そして、コップ一杯飲みほしてしまったが、食欲がまるでないので、料理の方は一きれも口に入れなかった。どうやら熱が出てきたらしい。彼は外套（がいとう）とジャケツを脱ぎ、毛布にくるまって、寝台へ横になった。彼はいまいましい気がした。『なんといっても今だけは健康でいたかったのに』と彼は考えて苦笑した。部屋の中は息苦しかった。ろうそくはうす暗く燃え、外では風が吹き荒れ、どこか隅の方では二十日鼠ががりがりいわせていた。それに部屋じゅう鼠と、革らしいもののにおいがしていた。彼は横になったまま、まるで熱にでも浮かされているような思いであった。想念はあとからあとへと入れ変わった。彼はなんでもいいから、想像のすがりつく所がほしくてたまらないらしかった。『この窓の下はきっと庭になってるに違いない』と彼は考えた。『樹のざわざわいう音がしている。俺は夜あらしの吹く真っ暗な中で、樹の騒ぐ音を聞くのは大きらいだ。実にいやな感じだ！』ふと彼は今しがたペトローフスキイ公園の傍を通りながら、いやあな気持でそのことを考えたのを思い起こした。すると、それに関連して、××橋のことや、小（マーラヤ）ネヴァ河のことを思い出した。と、彼はまたなんとなく、さっき水の上に立っていた時と同様、身内が寒くなってきたような気がした。『おれは生まれてこのかた水が嫌いだった。絵で見てもいやだ』と彼は再び考えたが、ふとまたもやある奇妙な想念に苦笑した。『もう今となっては、こんな美学や快感なんかどうだっていいはずなのに、この場に及んでよけいより好みが強くなってる。まるで……こういったような場合に、必ずいい場所を選ぶ野獣みたいなものだ。全くおれはさっきあの時、ペトローフスキイ公園へ曲がってしまうべきだったのだ！　たぶん暗くて、寒そうに思えたんだろうよ、へへ！　それどころか、ほとんど気持のいい感じまでほしくなったのだからな……それはそうと、なぜ俺はろうそくを消さないんだろう？』（彼はふっと吹き消した）『隣りでも寝たらしいな』とさっきの隙間に明りが見えないので、彼はこう考えた。『さあ、マルファ・ペトローヴナ、今こそご光栄にもってこいの時だに。暗くはあり、場所も似つかわしいし、

場合も奇抜なんだからな。今こんな時にやって来ないなんて……』

彼はふいにどうしたわけか、先ほどドゥーネチカに対する計画を実行する一時間前に、ラスコーリニコフをつかまえて、妹をラズーミヒンの保護に託すがよいとすすめた、あのことが思い出された。『実際俺はあの時、何よりも自分で自分の傷をつっつくために、あんなことを言ったのかもしれないぞ。ラスコーリニコフの察した通りにな！　だがそれにしても、あのラスコーリニコフはずぶといやつだ！　ずいぶん大きな荷を背負って行ったものだ。あのくだらない考えが頭から飛び出したら、やがてそのうちに大した悪党になれるかもしれない。が、今はあまり生きたがりすぎる！　この点にかけたら、ああした手合は卑劣漢ぞろいだ。が、まあ、あんなやつのことはどうだっていいや。勝手にしやがれ、俺の知ったことじゃない』

彼は眠れなかった。しだいしだいに、先ほどのドゥーニャの姿が目の前に立ち現われ始めた。と、ふいに戦慄が彼の体を流れ走った。『いや、こんな事はもううっちゃってしまわなけりゃいかん』と彼はわれに返って考った。『何かほかのことを考えなけりゃならん。どうも不思議でもあれば、滑稽でもあるが、俺はこれまで誰に対しても、大きな憎しみを感じたことがなかったのみか、かくべつ復讐したいと考えたことさえない。これは悪い徴候だ、悪い徴候だ、悪い徴候だ！　議論するのも好きでなく、熱くなるということがなかった。これもやはり悪い徴候だ！　ところで、さっき俺はあの女に、どれだけのことを約束したろう――ちょっ、ばかな！　まったく、あの女がなんとかして俺を鍛え直してくれたらよかったんだがなあ……』彼はまた黙りこんで、歯を食いしばった。またもやドゥーネチカの幻が彼の目の前に立ち現われた。彼女が初めに一つ火蓋を切ってから、ひどくおびえて拳銃を下げ、死人のように青くなって彼を凝視していた、あの時と寸分ちがわぬ姿だった。彼はあのとき二度でも彼女を抱く暇があったが、もし彼が自分で注意してやらなかったら、彼女は防御の手を上げさえしなかったろう。その瞬間に、彼女が可哀想でたまらなくなり、胸をしめつけられるような気がしたことを、彼は思い出した……『ええ！　くそっ！　またこんな考えが、こんなのは皆うっちゃってしまわなくちゃ駄目だ、うっちゃってしまわなくちゃ！……』

彼はもう昏睡状態に落ちかけた。熱病的な戦慄はだんだん収まっていった。とふいに何かしら毛布の下で、手や足をかけ回るものがあった。彼はぴくっとした。『ええっちくしょう、こりゃねずみらしいぞ！』と彼は考えた。『そうだ、俺はこ牛肉をテーブルの上にうっちゃっといたっけ……』けれど、せっかくくるまった毛布をはねて起き上がり、寒い目をする気になれなかった。けれど、急にまた何かが足の上で、気持わるくごそりとした。彼は毛布をはねのけて、ろうそくをともした。熱病的な悪寒に震えながら、寝床を調べに身をかがめた――何もいない。彼は毛布をふるった。とふいに、敷布の上へ二

十日ねずみが一匹飛び出した。彼は飛びかかってつかまえようとした。が、ねずみは寝台から駆けおりないで、ちょろちょろ四方八方へジグザグを描きながら、彼の指の間をすべり抜けたり、手を伝って走ったりして、急に枕の下へちょろりともぐり込んだ。彼は枕をほうり投げた。と、そのせつな、何やら彼の懐へとび込んで、体じゅうちょろちょろし、あっと思うまに、もうシャツの下から背中へ回った。彼は神経的に身震いして、目をさました。部屋の中は真っ暗で、彼はさっきの通り毛布にくるまったまま、寝台の上で横になっていた。窓の下には風がほえている。『なんていやなこった！』と彼はいましくこう考えた。

彼は起き上がって、窓に背を向けながら、寝台の端に腰をかけた。『もういっそ寝ない方がいい』と彼は腹を決めた。しかし窓からは、寒さと湿気が伝わってきた。彼はその場を立たないで、毛布を引き寄せてくるまった。ろうそくはつけなかった。彼は何ごとも考えなかったし、また考えようともしなかった。しかし妄想はつぎからつぎと起こって、初めもなければ終わりもなく、連絡もない思想の断片が、ちらちらとひらめき過ぎた。なんだかしだいしだいに、半ば仮睡の状態に落ちていくようだった。寒さか、闇か、湿気か、または窓の下でほえながら木々をゆすっている風か、とまれ彼の心の中に一種の執拗（しつよう）な幻想的な傾向と、願望を呼び起こすものがあった。けれど、やがてしきりに花が目の前に現われ始め、やがて花咲きみちた美しい景色が心に描き出された。明るくて暖かい、ほとんど暑いくらいな祭の日で、五旬節である。家のぐるりの花壇に植えてある香りの高い花に包まれた、贅（ぜい）を尽くした立派な英国風の木造コッテージ。つたがからみついて、ばらの花壇をめぐらした玄関。ぜいたくな絨毯（じゅうたん）を敷きつめて、シナ焼の花瓶にさした珍奇な花で飾られた明るくすがすがしい階段。ことに窓の上におかれた水のはいった鉢の中で、あざやかな緑色をしたみずみずしく長い茎の先に頭をかしげている、薫（かお）りの高い白水仙の花束が、彼の目をひいた。その傍が離れたくないくらいである。しかし、彼は階段を上って、天井の高い大きな広間へはいって行った。するとそこにもまたいたるところに――窓際にも、テラスへ向けてあけ放された戸口にも、そのテラスの上にも――花があった。床（ゆか）には刈り立ての香ばしい草がまかれて、あけ放した窓からはさわやかなすがすがしい微風が部屋をおとずれ、窓の下では小鳥がさえずっていた。ところが、広間のまんなかには白いしゅすのクロースでおおわれたテーブルの上に柩（ひつぎ）がのっていた。その柩は絹織物（グロドナプル）で包まれ、白い分厚な飾り襞（ひだ）が一面に縫いつけてあった。長い花房が四方からそれを囲んでいる。棺の中には、白いレースの服を着た娘が全身花に包まれて、さながら大理石で彫ったかと疑われる手を、胸の上にしっかり組み合せていた。けれど、そのばらばらに解いた明るいブロンドの髪は、しとどにぬれて、ばらの花の冠がその頭をとりまいていた。もう堅くなったきびしい横顔は、同じく大理石で刻まれたようであった。けれどその青ざめた唇に浮かんで

いる微笑は、なんとなく子供らしくない無限の悲哀と、偉大な哀訴の表情をたたえている。スヴィドリガイロフはこの娘を知っていた。この柩の傍には聖像もなければ、ろうそくの灯もなく、祈祷の声も聞こえない。この娘は身投げをした自殺者であった。彼女はまだやっと十四でありながら、その心はすでに破れていた。この心は堪えがたい凌辱を受けたために、われとわが身をほろぼしたのである。その若々しく子供らしい意識を脅かし、慄然と恐れおののかしめた凌辱は、天使のように清らかな彼女の魂を羞恥の念に浸して、風吹きすさぶ湿っぽい雪どけの夜に、闇と寒さの中で、誰の耳にもはいらない絶望の叫びを一声ふりしぼって、容赦ない悪魔の嘲笑とともに身を滅ぼしたのである。

スヴィドリガイロフは目をさまして、寝台から立ち上がると、窓の傍へ歩みよった。彼は手探りで栓を見つけ窓をあけた。風はすさまじい勢いで狭い部屋へ流れ込み、まるで凍った霜のようなものを、彼の顔とシャツ一枚の胸へ吹きつけた。果して窓の下には庭のようなものがあった。しかも、やはり遊園地風のものらしかった。たぶん昼間は、ここでも歌うたいが歌をうたったり、小テーブルの上へは茶が運ばれたりしたのだろう。けれど今は立木やくさむらからしぶきが窓へ飛んでくるばかりで、穴倉のようにまっくらである。何かしらところどころに暗い斑点が見分けられて、何かそこにあるなと想像されるくらいなものであった。スヴィドリガイロフはかがみこんで、両肘を窓じきりに突いたまま、もう五分ばかり目も放さずにこのもやの中を見つめていた。と、闇と夜をつんざいて、大砲の音が響き渡った、続いてまた一つ。『ああ号砲だ！　水が出たんだな』と彼は考えた。『夜明け方には、低いところは往来へ水がのって地下室や穴倉は水浸しになるだろう。穴倉の鼠どもがぶくぶく浮き出すんだ。人間は雨と風の中を罵りさわぎながらずぶぬれになって、めいめい自分のがらくたを二階へ引っ張り上げるのだ……それにしても、もうなん時かな？』彼がこう考えたとたんに、どこか近くでちくたくと一生懸命に急ぎながら柱時計が三つ打った。『ははあ、もう一時間たつと明るくなるんだ！　何を待つことがいるもんか？　これからすぐ出かけて、いきなりペトローフスキイ公園へ行こう。そこでどこか雨にびっしょりぬれた大きな茂みを捜そう。ちょっと肩が触ると、幾百万ともしれぬ滴を頭の上へ降らせるようなやつをな……』彼は窓を離れて、ろうそくをつけ、チョッキや外套をまとって、帽子をかぶり、ろうそくを持って廊下へ出た。どこかそこいらの小部屋で、がらくた道具やろうそくの燃えさしの間で寝ているぼろ服を見つけ、勘定を済まして外へ出ようと思ったのである。『一番いい折だ、これよりいい折ってあるもんじゃない！』

彼はしばらく細長い廊下を端から端まで、なん度も歩き回ったが、誰ひとり見つからなかったので、すんでの事に大きな声で呼ぼうとした。と、その時暗い片隅の古ぼけた戸棚とドアの間に、何か生きものらしい妙なものが目にはいった。ろうそくを持ったまま身をかがめてみ

ると、それは一人の子供だった。五つそこそこくらいの女の子が、雑巾(ぞうきん)みたいなびしょぬれのぼろ着物を着て、震えながら泣いているのだ。スヴィドリガイロフを恐れる様子もなく、大きな黒目に鈍い驚きを浮かべて、彼をみつめていた。そして、長い間泣いて、やっと泣きやんだ子供が、もうすっかり気がまぎれていながら、何かの拍子でまたすすり上げるように、時々しくしく泣いていた。娘の顔は青白くやせこけて、寒さのためにこちこちしていた。だが、『どうしてこんなところへ来たんだろうきっとここへ隠れ込んで、一晩じゅう寝なかったに違いない』彼はいろいろ娘に問いかけた。娘は急に元気づいて、子供らしい回らぬ舌で、何やら早口に片言を言い出した。その中には『母ちゃん』とか、『母ちゃんがぶちゅんだもの』とか、茶わんを『こわちた』などというのが聞き分けられた。娘はひっきりなくしゃべった。そうした話の全体から、やっとどうにかこうにか次のことが察せられた。この娘は親にきらわれている子供らしかった。おそらくこの宿屋の台所で働いて、年じゅう酔っ払っている母親に、ぶたれたりおどされたりしているに相違ない。きょう娘は母親の茶わんをこわしたので、すっかりおびえ上がってしまい、もう夕方から逃げ出したものらしい。おそらく長い間雨の降る中を裏庭のどこかに隠れていたあげく、やっとここまではいり込んで、戸棚の陰に身をひそめ、湿気と闇と、それからこんなことをしたために今にもぶたれるだろうという恐怖の念に震えながら、泣き泣きこの片隅に夜っぴてすわりとおしていたのだろう。彼は娘を抱き上げて、自分の部屋へ連れて帰り、寝台の上へすわらして、着物を脱がせにかかった。素足にはいた穴だらけの靴は、まるで一晩じゅう水溜(みずたま)りにつかっていたように、ぐしょぐしょになっていた。着物を脱がせてから、彼は娘をベッドに寝かせ、頭からすっぽり毛布に包んでやった。娘はすぐ寝入ってしまった。これだけのことをし終わると、彼はまた難かしい顔をして考え込んだ。

『まだこんな事にかかわり合う気になってる！』と彼は突然重苦しく、毒々しい気持でそう考えた。『なんてばかばかしいことだ！』彼はいまいましそうにろうそくを取り上げて、是が非でもぼろ服を見つけ、少しも早くここを出ようと考えた。『ええ、あんな娘なんか！』もうドアをあけながら、彼はのろわしげに考えたが、もう一度娘を見に引っ返した。寝ているだろうか、どんな寝ぶりだろうか？　こう思って、彼はそっと毛布を持ち上げた。娘はさも気持よさそうにぐっすり眠っていた。毛布の中であたたまったので、もう青白い頬に紅がみなぎっていた。ところが不思議なことには、その紅が普通の子供の赤みから見ると、なんだかどぎつく濃いように思われた。『これは熱の赤みだ』とスヴィドリガイロフは考えた。『これはまるで酒を飲んだ赤さだ、まるでコップに一杯も飲ませたようだ。赤い唇はかっかと燃えて、火を吹いてるようだ、いったいどうしたというのだろう？』ふと彼は娘の長い黒いまつ毛が、震えながらぽちぽちして、なんだか心もち持ち上がるような気がした。そして

その下からずるそうな、鋭い、どこか子供らしくない、合図でもするような目がのぞいた。娘は寝ているのでなく、寝たふりをしているらしく思われた。と、はたしてそうだった。娘の唇は微笑にひろがっていったが、まだがまんしようとでもするように、唇の端がかすかに震えている。けれど、やがて彼女はもうがまんするのをやめてしまった。それはもう笑いである、まがうことなき笑いである。何かしらずうずうしい挑発的なものが、まるで子供らしくないその顔に光っている。それは淫蕩である、それは娼婦（カメリヤ）の顔である。フランスの娼婦の無恥な顔である。おお、もうてんで隠そうともせず、両の目を開いている。その目は火のような無恥な視線で彼を見回し、彼を呼び、彼に笑いかけている……この笑い、この目、子供の顔に浮かんだこうしたすべてのけがらわしい表情の中には、何かしら無限に醜悪な、良心を侮辱するようなものがあった。『これはどうだ！　五つばかりの子供のくせに！』とスヴィドリガイロフは心からぞっとしてつぶやいた。『これは……これはいったいどうしたことだ？』けれど、彼女は燃えるような顔をもうすっかり彼の方へ向け、両手を差し伸べている……『ええ、この汚らわしい女め！』娘に手を振り上げながら、スヴィドリガイロフはぞっとしてこう叫んだ。……けれど、その瞬間に目がさめた。

彼は同じ寝台の上に、同じように毛布にくるまっている。ろうそくはついていなかったが、窓にはもうあけ放れた朝の光が白んでいた。

『夜通し悪夢の見つづけだ！』全身たたきのめされたように感じながら、彼は毒々しい表情で身を起こした。体の節々が痛んだ。外は一面に深い霧で、何一つ見分けることができなかった。もう五時ちかい刻限である。寝過ごした！　彼は起き上がって、まだ湿っぽいジャケツと外套（がいとう）を見につけた。ポケットの中で手が拳銃（けんじゅう）にさわると、それを引出して雷管を直した。それから腰をおろして、ポケットから手帳を取り出し、最初の一ばん目につきやすい頁へ、大きく二、三行書きつけた。それを読み直してから、彼はテーブルに肘（ひじ）突きしながら考え込んだ。拳銃と手帳は、すぐ傍の肘のところにほうり出されていた。目をさましたはえは、同じテーブルの上におき放しになっている、手もつけてないこ牛肉にたかっていた。彼は長いことそれをみつめていたが、やがてあいている右手で、はえを一匹つかまえにかかった。彼は長い間へとへとになるほど骨を折ったが、どうしてもつかまえられなかった。やがてふと、この面白い仕事に夢中になっている自分に気がつくと、ぶるっと身震いして立ち上がり、思い切って部屋を出て行った。一分の後には彼はもう往来に立っていた。

乳のような濃い霧が、街の上一面に立ちこめていた。スヴィドリガイロフはすべっこい泥だらけの板敷歩道を小ネヴァ河の方へ向けて歩き出した。彼の頭の中には、一夜のうちに水嵩（みずかさ）の増した小ネヴァの流れや、ペトロフスキイ島や、湿った公園の小道や、ぬれた草や、ぬれた木立や、灌木（かんぼく）の茂みや、果てはあの例の茂みまで、幻

のごとく浮かぶのであった……彼はいまいましそうな顔をして、何かほかのことを考えようと、家々を見回しはじめた。通りには一人の通行人も、一台の辻馬車も見えなかった。けばけばした黄色に塗った木造の家々は、窓の鎧戸(よろいど)をしめたまま、ものうげにきたならしいかっこうをしていた。寒さと湿気が体の中までしみとおって、彼は悪寒を感じ始めた。時々小店や八百屋の看板にぶっつかると、彼はいちいちていねいにそれを読んだ。もう板敷の歩道は尽きて、彼はとある大きな石造の家の前へ来ていた。きたならしい小犬がぶるぶる震えながら、尻尾をまいて彼の行く手を横切った。誰やら死んだように酔っ払った外套の男が、うつ向きに倒れて歩道いっぱいに巾をしている。彼はそれを一べつして先へ進んだ。高い火の見やぐらが左手にちらと目にうつった。

『あっ！』と彼は考えた。『これはいい場所だ。ペトローフスキイなんか行くことはありゃしない？　少なくとも、官憲の証人がいるわけだからな……』

彼はこの新しい思いつきに、ちょっとにやりと笑って、××通りの方へ曲がった。そこには火の見やぐらのある大きな家があった。しまった大きな門の傍に、灰色の兵隊外套を着てアキレスめいた真鍮(しんちゅう)のかぶとをかぶった小がらな男が、一方の肩で門にもたれながら立っていた。彼はとろんとした目で、近づいて来るスヴィドリガイロフに冷やかな流し目を与えた。その顔の上には、あらゆるユダヤ族の顔に一人の例外もなく不景気に刻みつけられている、気むずかしげな永遠の悲しみが見えていた。

スヴィドリガイロフとアキレスの二人は、しばらく無言のままたがいに相手を見回していた。とうとうアキレスは、別に酔ってもいない男が人の鼻っ先に突っ立ったまま、ものも言わずにじっとにらみつけているのが、尋常でないように思われてきた。

「いったいあんたここになんの用ある？」彼は依然として身動きもしなければ、姿勢を変えようともしないでこう口を切った。

「いや、なんでもないよ、君、こんちは！」とスヴィドリガイロフは答えた。

「ここ場所ない」

「僕はね、君、これからよその国へ行こうとしてるんだよ」

「よその国へ？」

「アメリカへ」

「アメリカへ？」

スヴィドリガイロフは拳銃を取り出して、引金を上げた。アキレスは肩をつり上げた。

「いったいなにする、ここそんな冗談、場所ない！」

「どうして場所でないんだろう？」

「どうしても、場所ない」

「なあに、君、そんなことはどうでもいいんだよ。いい場所じゃないか。もし聞かれたら、アメリカへ行ったと答えときなさい」

彼は拳銃を右のこめかみへ押し当てた。

「ああ、ここいけない、ここ場所ない！」アキレスはま

すます大きく瞳(ひとみ)を開きながら、ぴくりと震え上がった。
スヴィドリガイロフは引金をおろした……

七

それと同じ日ではあるが、もう晩の六時過ぎに、ラスコーリニコフは母と妹の住まいへ近づいていた。それはラズーミヒンが世話をした例のバカレーエフの持家の中の貸間である。階段の上がり口は往来に向いていた。ラスコーリニコフははいろうかはいるまいか、と思い惑うさまで、いつまでも歩みを控え目にしながら近づいて行った。しかし、彼はどんなことがあっても、けっして引っ返しはしなかった。決心は堅くついていたのである。『それにどっちだって同じことだ、二人はまだなんにも知らないのだから』と彼は考えた。『そしておれのことは、前から変わりもの扱いにし慣れてるんだし……』

彼の身なりは恐ろしいものだった。一晩じゅう雨に打たれたために、何もかも汚れ、方々裂け傷だらけのぼろぼろである。彼の顔に疲労と、悪天候と、肉体の困憊(こんぱい)と、ほとんど一昼夜も続いた自分自身との闘争のために、ほとんど醜いくらいになっていた。彼は夜っぴて、どこともしらずさまよい続けたが、少なくとも決心だけはついていた。

彼がノックすると、母親がドアをあけた。ドゥーネチカは家にいなかった。女中までがちょうどこの時留守だった。プリヘーリヤは初めうれしさのあまり、興奮して口もきけなかった。やがてわが子の手をとって部屋の中へ引っ張って行った。

「ああ、やっと来ておくれだったねえ！」と彼女はうれしさにどもりどもり言い出した。「ねえ、ロージャ、こんな涙なんかこぼしたり、ばかばかしいまねをするのを、怒らないでおくれね。これはわたし泣いてるんじゃなくて、笑ってるんだから。お前はわたしが泣いてるとお思いかえ？　いいえ、わたしは喜んでるんだよ。わたしはどうもこういう馬鹿げたくせがあってね、すぐ涙が出るんだよ。これはね、お前のお父さんがなくなった時からで、何かというとすぐ泣けるんだよ。まあ、おかけ、お前さぞお疲れだろうね。ちゃんとわかるよ。あらまあ、なんて汚れ方だろう」

「僕きのう雨の中を歩き回ってたからですよ、お母さん……」とラスコーリニコフは言いかけた。

「なに、いいんだよ、いいんだよ！」とプリヘーリヤはわが子をさえぎりながら叫んだ。「お前はわたしが昔からの年寄りのくせで、いろんなことをうるさく尋ね出すかとお思いだろうが、心配しないでおくれ。わたしはわかったんだから、すっかりわかったんだから。わたしはもうこのごろ、こっちの風を飲み込んでしまったよ。それになるほど、ここの人の方がりこうだよ。わたしははっきり合点がいった――どうしてわたしなんかにお前の考えることがわかったり、お前にわけを尋ねたりする力があるものかね。お前には、なんだか知らないけれど、いろんな仕事や計画があるだろうし、思想とやらも頭に浮かぶんだろうからね。だもの、何を考えてるかなんて、お前の手を取ってこづきまわしたり、そんな事がどうしてできるものかね。わたしはそれでね……ああ、まあなんてことだろう！　どうしてわたしはこう気ちがいみたいに、あれこれといろんなことを言い出すんだろう……わたしはね、ロージャ、あの雑誌にのったお前の論文をもう三度も読み返してるんだよ。ドミートリイ・プロコーフィッチが持って来てくださったのでね。わたしはそれを見ると、ああなるほどと思ったよ。ほんとにわたしはばかだったと、心の中で考えたのさ。あの子はこういう事をしているのだ。これで謎は解けた！　学者というものは、誰でもこうなのだ。あの子の頭にはいま何か新しい想が浮かんで、あの子はそれを考えているのかもしれない。それだのにわたしは、あの子を苦しめたり、うるさがらせたりしている、とこんなに思ったんだよ。読むには読んでもそりゃもうわからない事がたくさんある。もっとも、それは当たり前のことで、わたしなんかにわかってたまるものじゃないよ」

「ちょっと見せてくれませんか、お母さん」

ラスコーリニコフは新聞を取り上げて、自分の文章にちらと目を走らせた。彼の状態にも境遇にも矛盾した事ながら、自分の書いたものを印刷で初めて見た筆者の経験する、あの不思議な刺すような甘い気持を、彼も同様に感じたのである。それに、二十三という年齢のせいもあった。しかし、それはほんの一瞬間で、二、三行読むと、彼は顔をしかめた。恐ろしい憂愁が心臓をしめつけたのである。この二、三か月間の内部の闘争が、一時にことごとく思い起こされた。嫌悪の念をいだきながら、

彼はいまいましそうに論文をテーブルの上へほうり出した。

「でもねえ、ロージャ、わたしがどんなに馬鹿でも、それでもお前が近いうちに、今の学者仲間で、よしんば一番えらい人でなくても、えらい人の一人になれるってことは、ちゃんと見分けがつくよ。それだのにあの人たちは、お前の気が狂ったなんて、よくも考えられたものだね。ほ、ほ、ほ！　お前は知らないだろうけれど――でも、あの人たちはそんなことを考えたんだよ！　なんの、あんな卑しい虫けらみたいな連中に、偉い人の頭がどうしてわかるもんかね！　でもドゥーネチカがね、ドゥーネチカまでが、すんでのことでそれを本当にするとこだったのさ――ほんとになんということだろう！　お前のなくなったお父様もね、二度ばかり雑誌へ原稿をお送りになったことがあるんだよ――初めは詩で（わたしはちゃんと原稿をしまってるから、いつかお前にも見せてあげようね）、二度めのはもうまとまった小説だった（わたしは無理にお父様にお願いして、それを清書させてもらったんだよ）。それからわたしたちは二人で、どうか載りますようにと祈ったんだけれど――載らなかったっけ！　わたしはね、ロージャ、六、七日前までは、お前の身なりや、お前の住まいや、食べているものや、はいて歩くものなどを見て、どんなにつらかったかしれないんだよ。でも、今になってみると、これもやはりわたしが馬鹿だったと、合点がいったよ。だってお前はその気にさえなれば、今だってなんでも頭と腕で手に入れることができるんだものね。つまり、お前は今のところ、そんなものが欲しくないので、ずっとずっと偉いことをしているわけだわね……」

「ドゥーニャは家にいないんですか、お母さん？」

「いないんだよ、ロージャ。このごろあの子はしょっちゅう家をあけて、わたしを一人ぽっちにするんだよ。でも、有難いことに、ドミートリイ・プロコーフィッチがちょいちょい来てくだすってね、わたしの相手をしてくださるんだよ。いつもお前の話が出るが、あの人はお前を好いて、そして尊敬していらっしゃるね、ロージャ。妹の方は、大してわたしを粗末にするなんて、そういうわけじゃないんだよ。わたしは別に不足なんかありません。あの子の気性はああだし、わたしの性分はまた別なんだからね。あれには何やら秘密ができたらしいが、わたしはお前たちに隠すことは一つもありません。もっとも、わたしはドゥーニャが十分かしこい人間だってことも知っているし、おまけにわたしやお前を愛していることもよくわかってはいるがね……でも、結局これがどうなることだか、まるで見当がつかないんだよ。今もね、ロージャ、お前はこうして出かけて来て、わたしを喜ばせておくれだけれど、あの子はこのとおりふらふら出てしまった。帰って来たら、わたしそう言ってやるよ――お前の留守に兄さんが見えたが、いったいお前はどこで暇をつぶしておいでだった？　ってね。でも、ロージャ、あまりわたしを甘やかさないでおくれ。お前の都合がよかったら――寄っておくれ。悪かったら――どうも仕方

がない。わたしは待っているよ。だって、なんといっても、お前がわたしを愛してくれるのは、わたしも知っているから、わたしはそれでたくさんだもの。こんな風にお前の文章を読んだり、みんなからお前の噂を聞いたりしていると、そのうち、ひょっこり自分で訪ねて来てくれる。ね、それよりけっこうなことはないじゃないか！

現に今だってこの通り、お母さんを慰めに来てくれたんだものね。わたしは自分でもわかるよ……」

ここまで言うと、プリヘーリヤはふいに泣き出した。

「またわたしとしたことが！　どうかわたしを、こんな馬鹿を気にかけないでおくれ！　ああ、どうしよう、なんだってわたしはぼんやりすわりこんでるんだろう」いきなり席から飛び上がりながら、彼女は叫んだ。「ちゃんとコーヒーがあるのに、わたしお前にごちそうしようともしないでさ！　ほんに年寄りの身勝手って方図のないものだね。すぐあげるよ、すぐ！」

「お母さん、うっちゃっといてください、僕はすぐ帰りますから。僕そんなことで来たんじゃありません。どうか僕の言うことを聞いてください」

プリヘーリヤはおずおずとわが子の傍へ寄った。

「お母さん、たとえどんなことが起ころうとも、また僕のことでどんな話をお聞きになろうとも、また僕のことで人があなたに何を言っても、お母さんは今と同じように僕を愛してくださいますか？」彼は自分のことばを考えもしなければ、細心に大事をとろうともせず、胸からあふれ出るまま、いきなりこうたずねた。

「ロージャ、ロージャ、お前どうしたの？　それに、よくもお前はそんなことがきけるもんだね？　誰がお前のことをわたしにかれこれ言うものかね？　わたしは誰の言うことだって信用しやしないよ。誰がやって来たって、わたしいきなり追い返してしまうから」

「僕はね、お母さん、僕がいつもお母さんを愛していたことを、はっきり知っていただくためにやって来たのです。だから、いま僕たち二人きりなのがうれしいんです。ドゥーネチカのいないのさえ、かえってうれしいくらいなんです」と彼は前と同じ興奮した調子で、ことばを続けた。「僕はお母さんにざっくばらんに言いに来たんです――たとえあなたが不幸におなりになっても、やっぱりあなたの息子は、自分自身よりもあなたを愛しているということを、承知してください。僕が冷酷な人間で、あなたを愛していないなどとお思いになるとしても、それはみんな間違いです。僕があなたを愛しなくなるようなことは、けっしてけっしてありません……さあ、もうたくさんです。僕はこういう風にして、これから始めなけりゃならないって、そういう気がしたんです……」

プリヘーリヤは無言のまま、わが子を胸に抱きしめながら、忍び音に泣いた。

「いったいお前どうしたの、ロージャ、わたしにはわからないんだよ」とうとう彼女はこう言った。「わたしはこの間じゅうから、ただお前がわたし達をうるさがっているのだとばかり思っていたけれど、今こそいろいろのことでわかりました――お前には大きな悲しみがあっ

て、そのためにお前は悩んでいるのです。こんなことを言い出して悪かったね、かんにんしておくれ。わたし、こんなことばかり考えてるものだから、夜もおちおち眠れないんだよ。昨夜はドゥーニャも、一晩じゅううなされていた様子で、始終お前のことを言っていたっけ。わたしも何やかや聞き分けはしたものの、いっこうなんにもわからなかった。今日も朝のうちずっと、死刑でも受けに行く前のようにそわそわして、何かしら待つような気持になっていたんだよ。虫が知らせるような風でね。ところが案のじょう、このとおり徴(しるし)があった！　ロージャ、ロージャ、お前どこへ行くの？　どこか旅にでも行くの？」

「旅に行くんですよ」

「わたしもそうだろうと思っていた！　わたしだってね、もしそうした方がよければ、お前と一緒に行ってもいいんだよ。ドゥーニャだってそうです。あの子はお前を愛していますよ、それはそれは愛していますよ。それからソフィヤ・セミョーノヴナも、なんなら一緒に連れて行ってもいいよ。わたしは喜んであの人を娘の代わりにしますよ。ドミートリイ・プロコーフィッチが一緒に出立の手伝いをしてくださるから……だが……いったいお前は……どこへ行くの？」

「では、さようなら、お母さん」

「え！　今日すぐなの！」永久にわが子を失おうとでもしているように、彼女は思わず叫んだ。「僕ゆっくりしていられないんです、僕は行かなくちゃならない。たいへんな用があるんですから……」

「わたしが一緒に行ってはいけないの？」

「いや、それよりお母さん、膝(ひざ)をついて僕のため祈ってください。あなたのお祈りはきっと届くでしょうから」

「じゃ、お前に十字を切らしておくれ、お前を祝福して上げるから！　これでいい、これでいい。ああ、まあいったいわたしたちは何をしているのだろう！」

そうだ、彼はうれしかった、誰もいあわさないで、母と二人きりでいられたのが、心からうれしかった。この恐ろしい一週間ばかりを通じて、彼の心は初めて一度にやわらげられたような気がした。彼は母の前に身を投げて、その足に接吻(せっぷん)した。二人は抱き合って泣いた。彼女も今度は驚きもしなければ、くどくどと尋ねもしなかった。彼女はもう前から、わが子の身に何か恐ろしいことが持ち上がっていて、今こそ彼にとって恐るべき瞬間が到来したのだ、ということを悟っていた。

「ロージャ、かわいい、かわいいロージャ」と彼女はしゃくり上げながら言った。「今お前がそうしていると、お前の小さい時分そっくりだよ。お前はいつもこんな風にわたしの傍へ来て、わたしを抱いて接吻しておくれだった。まだお父さまも生きていらして、貧乏で困っていた時分、ただお前だけが、お前が一緒にいてくれるということだけで、わたしたちを慰めてくれたものです。それからお父様を見送ってからというものは――なん度いまのように、抱き合って、お墓のそばで泣いたかしれやしない。わたしが前からこんなに泣いてばかりいるのは、

親心で災難の来るのがわかったからだよ。わたしはあの晩、覚えておいでだろう、わたしたちがこっちへ着くとすぐ、初めてお前を見た時に、お前の目つき一つで何もかも察したんだよ。あの時わたしの心臓は思わずどきっとしたものだ。ところが、今日もお前にドアをあけて上げて、ちょっと一目見るが早いか、いよいよ悲しい時が来たらしい、とそう思ったんだよ。ロージャ、ロージャ、でもお前は今すぐ行くんじゃないだろうね？」

「いいえ」

「お前また来ておくれだろうね！」

「ええ……来ます」

「ロージャ、腹を立てないでおくれ、わたしは別に、くどくどきこうとしやしないから。そんなことができないのは、よく承知しているんだから。でも、ちょっと、たった一言でいいから言っておくれ。お前はどこか遠いところに行くの？」

「非常に遠くです」

「すると、そこに勤め口とか、出世の道とか、何かそんな風のものでもあるの？」

「何ごとも神様の思召(おぼしめ)ししだいです……ただ僕のために祈ってください……」

ラスコーリニコフは戸口へ向かって歩き出した。けれど、母は彼にしがみついて、絶望のまなざしで彼の目を見つめた。彼女の顔は恐怖にゆがんでいた。

「もうたくさんですよ、お母さん」ここへ来る気になったのを、深く心に悔みながら、ラスコーリニコフは言った。

「一生の別れじゃないだろうね？　まさか一生の別れじゃないだろうね？　ね、お前来ておくれだろうね、明日にも来ておくれだろうね？」

「来ますよ、来ますよ、さようなら」

彼はとうとう振り切って出て行った。

それはさわやかな、はればれした、暖かい夕暮れだった。天気はもう朝から持ち直っていた。ラスコーリニコフは自分の住まいをさして歩き出した。彼は急いだ。いっさいを日没までに片づけてしまいたかったのである。で、それまでは誰にも会いたくなかった。自分の部屋へ上って行く途中、ナスターシャがサモワールの傍を離れて、じっと目をすえながら、一生懸命に自分を見送っているのに、ふと気がついた。『こりゃ誰かおれのところへ来ているのじゃないかな？』と彼は考えた。嫌悪の念と共に、ポルフィーリイの顔がちらと頭にうつった。が、自分の部屋へのぼりついて、ドアをあけると、ドゥーネチカの姿が目にはいった。彼女はたった一人ぼっちで、深い物思いに沈みながら腰かけていた。もう前から待っていたらしい。彼はしきいの上に立ち止まった。彼女はぎくっとして長椅子から腰を持ち上げ、彼の前に棒立ちになった。じっと兄の顔にそそがれた彼女の視線は恐怖の情と、かぎりない悲しみを現わしていた。このまなざしだけで、彼はたちまち妹が何もかも知っているのを悟った。

「どうだろう、お前の所へはいって行ってもいいかい、

それとも出て行こうか？」と彼は疑ぐり深い調子で尋ねた。
「わたしね、きょう一日ソフィヤ・セミョーノヴナのところにいましたの。わたしたちは二人で兄さんを待ってたんですのよ。兄さんがきっとあすこへいらっしゃると思ったもんですから」
ラスコーリニコフは部屋へはいって、ぐったり椅子に腰をおろした。
「僕はなんだか精がないんだよ。ドゥーニャ。もうすっかりへとへとになったんだ。実はちょっと今だけでも十分冷静に、落ち着いていたいと思うんだけれど」
彼は疑わしげな視線をちらと妹に投げた。
「いったい兄さんは一晩じゅうどこにいらしたの？」
「よく覚えていない。ねえ、ドゥーニャ、僕はいよいよ決心しようと思って、幾度も幾度もネヴァ河の付近を歩き回ったんだ。それだけは覚えている。僕はそれでいっさいの片をつけようと思ったんだが……しかし思い切れなかった……」またもや疑わしげにドゥーニャを見ながら、彼はささやくように言った。
「まあ、よかった！　わたしたちもつまりそれを心配したのよ、わたしもソフィヤ・セミョーノヴナも！　してみると、兄さんはまだ生を信じてらっしゃるのね。まあ、よかった、ほんとうによかった！」
ラスコーリニコフは苦い笑いを漏らした。
「僕は信じはしなかった。だが、今お母さんと抱き合って、一緒に泣いたよ。僕は信じてはいないが、お母さんに僕のことを祈ってくださいと頼んできた。これはいったいどうなっているのか、わけがわからないよ、ドゥーネチカ。僕もそのことになると、まるで見当が立たない」
「お母さんのところへいらしたの？　そして、お母さんにお話しなすったの？」とドゥーニャはぎょっとして叫んだ。「ほんとに兄さんは思い切ってお話しになったの？」
「いや、話はしなかった……ことばでは。けれど、お母さんは大分もう察しがついたよ、お母さんはね、夜中にお前の言ったうわ言を聞いたんだよ。お母さんはもう半分くらいわかっていると思うね。僕が行ったのはよくなかったかもしれない。なんのために行ったんだか、それさえわからないほどだ。僕は下劣な人間だよ、ドゥーニャ」
「下劣な人間ですって、でも、苦しみを受けに行く覚悟がついてらっしゃるんでしょう！　兄さんはいらっしゃるんでしょう？」
「行くよ、今すぐ。僕はこの恥辱をのがれるために、身を投げようと思ったんだよ、ドゥーニャ。しかし、もう水の上にかがみながら立ってから、こう思ったんだ。もしおれが今まで自分を強者と思っていたんなら、今だってこんな恥辱を恐れるものかってね」と彼は先回りしながら言った。
「しかし、これはごうまんというものだろうか、ドゥーニャ？」
「ごうまんだわ、ロージャ」

彼の消沈した目の中に、火花がひらめいたように感じられた。自分がまだごうまんなのが、愉快だとでもいうようなぐあいだった。
「だが、ドゥーニャ、お前は僕が単にこれだけを恐れたのだ、などと思いはしないかい？」とみにくい微笑を浮かべて、妹の顔をのぞき込みながら彼は尋ねた。
「ああ、ロージャ、そんなことよして！」とドゥーニャは叫んだ。
二分ばかり沈黙が続いた。彼はうなだれて腰かけたまま、じっと床を見つめていた。ドゥーネチカはテーブルの反対側に立って、なやましげに兄をみつめていた。ふいに彼は立ち上がった。
「もう遅い、そろそろ時刻だ。僕はこれから自首しに行く。だが、いったいなんのために自首しに行くのか、自分でもわからない」
大粒な涙がはらはらと、彼女の頬を伝って流れた。
「ドゥーニャ、お前は泣いてるね。では、お前ぼくに手がのばされるね！」
「兄さんはそんなことまでお疑いになったの？」
彼女はしっかり兄を抱いた。
「兄さんはこれから苦しみを受けにいらっしゃるんですもの、もう半分くらい罪を洗い落としていらっしゃるんじゃなくって？」兄を抱きしめて接吻しながらも、彼女はこう叫んだ。
「罪？　いったいどんな罪だい？」急に何やら思いがけない興奮のさまで彼は叫んだ。「それは僕があの汚らわしい有害なしらみを――誰の役にも立たない金貸婆あばあを殺したことなのかい。あんな貧乏人の汁を吸っていた婆あを殺すのは、かえって四十の罪が許されるくらいだ、それだのに、これが罪なのかい？　僕は罪なんてことは考えない。だから、それを洗い落とそうとも思わないよ。それをなんだってみんな四方八方から、『罪だ、罪だ！』とつっつくんだろう。今になって、こんな役にも立たぬ恥辱を受けに行こうと決心した今になって、僕はやっと初めて自分の小胆さと愚かさかげんがはっきりわかったよ！　僕はただ卑屈で無能なために決心したのだ。それから事によったら、あの……ポルフィーリイがすすめたように、自首の有利ということのためかもしれない……」
「兄さん、兄さん、あなた何をおっしゃるの！　だって、兄さんは血を流したんじゃありませんか！」とドゥーニャは絶望したように叫んだ。
「すべての人が流している血かい！」彼はほとんど前後を忘れたような調子でことばじりをとった。「世間で滝のように流されている血かい、今までたえまなく流れていた血かい？　みんながシャンパンみたいに流している血かい？　おおよく流したといって、下手人に神殿カピトルで月桂冠を授け、後には人類の恩人よばわりするその血かい？　お前ももう少し目をすえて、しっかり見分けるがいい！　僕は人類のために善を望んだのだ。また実際、幾百幾千の善を行なったかもしれないのだ。ところが結果は、こんな愚劣なこと――いや、愚劣ではない、ただ単に拙劣なこと一つに終わってしまった。だって、この

思想は全体的に見て、今この失敗が明瞭になってから考えられるように、けっしてそれほど愚劣なものじゃないからね（どんなことでも、失敗すると愚劣に見えるものだよ！）この愚劣な行為で、僕は自分を独立不羈な立場において、生活の第一歩を踏み出し、資金を得ようと思ったのだ。そうすれば、それから先は何もかも、比較上はかるべからざる利益によって埋合せがつくと考えたのだ……ところが、僕は、僕は第一歩さえ持ちこたえることができなかった。それはつまり、僕が卑劣漢だからだ！　問題はすべてこの点にあるんだ！　が、とにかく、僕はお前たちの見方は取りゃしないよ。もしあれが成功してたら、僕は名誉の冠を受けていたに相違ないんだが、今はもうわなに引っかかってしまった！」

「だって、それは見当ちがいよ、まるっきり見当ちがいよ！　兄さん、それはいったい、なにをおっしゃるの！」

「ははあ！　それじゃ形式が違うというんだね、審美的に気持のいい形式じゃないというんだね！　だが、僕はまるっきり合点がいかないよ――大勢の人間を爆弾や、正規の包囲攻撃でやっつけるのがより多く尊敬すべき形式なんだろうか？　審美的な恐怖は、無力を示す第一の徴候だよ！……僕は一度も、まったくただの一度も、今ほどこれをはっきり意識したことはない。そして、今までにもまして、いっそう自分の犯罪理由を解しないよ！

僕は一度も、まったくただの一度も、今ほど強くなったことはない、今ほど確信を持ったことはない！……」

彼の青ざめてやつれはてた顔には、さっと紅の色さえさしてきた。しかし、この最後の叫びを発しながらも、彼はふとドゥーニャの視線にぶっつかった。そしてこのまなざしの中に、兄を思う深い深い苦悩を認め、思わずはっとわれに返った。彼はなんといっても、この二人の哀れな女たちを不幸なものにしたのだと感じた。なんといっても、やはり自分が原因なのだ……

「ドゥーニャ、かわいいドゥーニャ！　もし僕に罪があったら、どうか許しておくれ（もっとも、もし罪があるとしたら許すことなんかできないけれど）。じゃ、さようなら！　もう議論はよそう！　出かける時だ、もう時が過ぎてるくらいだ。僕のあとからついて来ないでおくれ、後生だから。僕はまだ寄る所があるんだから……お前はこれからすぐ帰って、お母さんの傍についててておくれ。これはお前に折り入って頼む！　これは僕がお前にたのむ一ばん最後の、一ばん大きなお願いだ。お母さんの傍を一刻も離れないようにしておくれ。僕はお母さんを不安の中に取り残して来たんだ。それはお母さんにとても堪えきれそうもないほどの不安なのだ。お母さんは死んでしまわなければ、気が狂うに決まってる。傍についてあげておくれ、ラズーミヒンが力になってくれるから。あの男には僕から話しておいた……僕のために泣くのはよしておくれ。僕はたとえ人殺しでも、生涯男らしい潔白な人間でいるように努力するから。事によったら、いつか僕の名を聞くことがあるかもしれないが、僕はお前のつらよごしになるようなことはしない、まあ見ていてくれ、今にそれを証明して見せるから……が、今

は当分さよならだ」兄の言った最後の数語と約束を聞いたとき、またもやドゥーニャの目に現われた一種異様な表情を見てとって、彼は急いでこうことばを結んだ。
「なんだってお前はそんなに泣くの？　泣かないでおくれ、泣かないで。まだこれきり別れてしまうわけでもないんだから！……ああ、そうだ、ちょっと待っておくれ、僕は忘れていた！……」
　彼はテーブルに近より、埃（ほこり）まみれになった一冊の厚い書物をとり上げて、ぱたりと開くと、象牙（ぞうげ）に水彩で描いた小さな肖像を、頁の間から抜き出した。それは例の熱病で死んだ下宿のおかみの娘で、もと彼の許嫁（いいなずけ）だった女――あの尼寺へ行きたがっていた風変りな娘の肖像だった。彼はちょっとの間、その表情に富んだ病的な顔を見つめていたが、やがてそれに接吻（せっぷん）して、ドゥーネチカに渡した。
「実はね、僕はこの女を相手に、たびたびあのことを話し合ったんだよ。ただこの女ひとりだけと」と彼は考え深そうに言った。「僕はこの女の胸へ、後になってああもみにくい実現を見たことを、いろいろと伝えたものだ。だが、心配しなくってもいいよ」と彼はドゥーニャの方へふり向いた。「この女もお前と同じように同意はしなかったよ。だから僕も、あの女が今いないのを喜んでいる。大切なことは、大切なことは、すべてがこれから新しく始まって、まず二つに屈折するということだ」急にまたしても自分の憂悶（ゆうもん）の方へ帰って行きながら、彼はこう叫んだ。「何もかも、何もかもみんな。だが僕はこんなことに対して用意ができてるだろうか！　自分でこんなことを望んでいるだろうか？　人は、これが僕の試練に必要だと言う！　しかし、なんのために、なんのために、この無意味な試練が必要なんだ？　そんなものがいったい何になるんだ？　僕が二十年の流刑を勤め上げて、老いぼれのよぼよぼになってから、苦痛に虐げられてふぬけのようになってから、やっとそれを自覚した方が、いま意識してるよりもいいのだろうか？　もしそうだったら、僕はなんのために生きていくんだ？　どうして今さらそんな生き方に同意できよう？　ああ、僕は今日の夜明けに、ネヴァの川ぶちに立っていた時、おれは卑劣漢だなと悟ったよ！」
　二人はとうとう外へ出た。ドゥーニャは苦しかったが、でも彼女は兄を愛していたのである！　彼女は歩き出した。が、五十歩ばかり離れてから、もう一度彼を見ようと思って振り返った。彼の姿はまだ見えた。けれど、曲がり角まで行ったとき、彼の方でも振り返った。二人は最後の目を見かわした。しかし、妹が自分を見ているのに気がつくと、彼はじれったそうに、というよりむしろいまいましげに、行けというように片手を振って見せた。そして、自分はいきなり角を曲がってしまった。
『おれは意地悪だ、それは自分でもわかる』すぐ一分もたった時、ドゥーニャにいまいましそうな身振りなど見せたのを恥じながら、彼は心に思った。『だが、どうしてあれたちはおれをこんなに愛してくれるのだろう、俺にそれだけの価値もないのに！　ああ、もしおれが一人

ぼっちで、誰一人愛してくれるものもなく、また自身もけっして人を愛さないとしたら、その時はこんなことなどいっさい起こらなかったろう！　だが、はたして今後十五年か二十年の間に、俺の心がすっかり折れてしまって、二言目には自分を強盗よばわりしながら、みんなの前でうやうやしく頭を下げたり、めそめそ泣いたりするようになるだろうか？　こりゃ面白い問題だぞ。いやきっとそうなる、そうなるに違いない！　つまりそれが目的で、やつらは今おれを流刑にしようとしてるんだ、それがやつらに必要なんだ……現にやつらはみな町をあちこちしているが、やつらは一人ひとり例外なしに、生まれながらの卑劣漢か泥棒だ。いや、それよりもっと悪い――白痴だ！　ところが、もし俺が流刑を許されたら、やつらはみんな公憤を起こして、気ちがいのように騒ぐだろう！　ああ、おれはやつらがどれもこれも憎くて憎くてたまらない！』

　彼は深く考えこんだ。『いったいどういう経路をとって、俺がいよいよやつらすべての前に、理くつも何もなく屈従してしまうなんて、そんなことが起こりうるのだろう！　確信をもって屈従するなんてことが！　だがしかし、どうして絶対にないといえるか？　もちろん、そうなるに決まってる。何しろ二十年間の絶間ない圧迫が、徹底的に俺をぶちのめしてしまわないはずがない？　雨だれだって石に穴をあけるじゃないか。それならなぜ、いったいなぜこんなにしてまで生きていかなくちゃならんのだろう？　それがすっかり本にでも書かれているように、必ずちゃんとそうなって、それ以外になりようがないと承知しながら、なぜ今その方へ進んでいるのだろう！』

　彼は昨日の晩から、おそらくもう百ぺんくらいも、この問いを自ら発していたのだが、それでもやはりまだ足を止めなかった。

八

彼がソーニャの部屋へはいった時は、もうたそがれになりかかっていた。ソーニャはいちんち恐ろしい興奮の中に彼を待ち通したのである。彼女はドゥーニャと一緒に待っていた。ドゥーニャは、『ソーニャがこのことを知っている』というスヴィドリガイロフの昨日のことばを思い出して、もう朝から彼女を訪ねて行ったのである。二人の女のこまごました会話や、涙。それから、二人がどれだけへだてのない仲になったか？　というようなことは、今さらここに述べ立てまい。ドゥーニャはこの会見によって、少なくとも兄は一人ではない、という一つの慰めを得た。兄は彼女ソーニャのところへ、まず第一番に懺悔（ざんげ）に来た。してみると、兄は人間が必要になったとき、彼女の中に人間を求めたのである。彼女は運命の導くところへ、どこまでも兄に従って行くだろう。彼女は何もきかなかったけれど、これがそうなるに違いないのを知り抜いていた。彼女はソーニャに対して、一種敬虔（けいけん）ともいうべき態度を見せたので、初めはその敬虔の情で相手を当惑させたくらいである。ソーニャは危うく泣き出さないばかりだった。彼女はそれどころか、自分という人間が、ドゥーニャを見上げるだけの値打ちもないように考えていたのである。ラスコーリニコフの部屋で初めて会った時、ドゥーニャが非常な注意深い尊敬にみちた態度で会釈をしたその瞬間から、彼女の美しい面影は、ソーニャの生涯を通じてもっとも美しい、及び難い幻影の一つとして、永久に彼女の心に残ったのである。

そのうちドゥーネチカは、とうとう辛抱を切らして、兄の住まいで彼を待つために、ソーニャを残して立ち去った。兄が先にそちらへ行くような気がして、仕様がなかったのである。一人になったとき、ソーニャは急に彼が本当に自殺したのではないかと、心配でたまらなくなって来た。そのことはドゥーニャも同様に恐れていた。けれど二人はいちんちじゅう、ありたけの理由を数えあげて、そんなことはあるはずがないと、お互いに一生懸命うち消し合っていた。で、二人一緒にいる間は、いくらか気が落ち着いていた。けれど、今こうして別れてみると、ふたりともただこの事ばかり考え始めた。ソーニャは昨日スヴィドリガイロフが、ラスコーリニコフには二つしかとるべき道がない――ウラジーミルカか、さもなくばと言ったことばを思い出した。その上ソーニャは彼の虚栄心が強く、ごうまんで、自尊心がさかんで、無信者なのをよく知っていた。

『いったいただ小胆で、死ぬのが恐ろしいというだけのことが、あの人を無理に生きさせる力を持っているんだろうか！』彼女はついに絶望の気持でこう考えた。

そのうちに、太陽はいつしか西に沈み始めた。彼女はうれわしげに窓の前にたたずんで、じっと窓外を見つめた――けれどこの窓からは、ただ隣家の大きな荒壁が見えるばかりだった。いよいよ彼女が、不幸な男の死を完全に信じ込んだとき――当人が部屋へはいって来たので

ある。
　よろこびの叫びが思わず彼女の胸からもれた。しかし、じっと彼の顔を見やったとき、彼女はたちまちさっと青くなった。
「ああ、そうなんだ！」とラスコーリニコフは苦笑しながら言った。「僕はお前の十字架をもらいに来たんだよ。ソーニャ。お前は自分で僕に、四つ辻へ行けと言ったじゃないか。それだのに今、いよいよ実行という段になると、急におじ気がついたのかい？」
　ソーニャは愕然として彼を見やった。彼女の耳にはその調子が変に聞えたのである。冷たい戦慄が彼女の背筋を流れた。しかし、すぐ次の瞬間には、この調子もこのことばもみな付焼刃なのだと察した。彼は彼女と話すのにも、なんだか隅の方ばかり見ていて彼女の顔をまともにながめるのを、避けるようにしていた。
「僕はね、ソーニャ、どうもそうした方が得らしいと考えたんだよ。それには、一つの事情があって……いや、話せば長いことだし、また話したって仕様がない。ただね、何が僕の癇に触るかといえばほかでもない！　あの愚劣な畜生づらをした連中が、たちまち僕をとり巻いて、目を皿のようにして、まともに人の顔をじろじろ見ながら、愚劣な質問を持ちかけて、それに答弁を強いたり――うしろ指さしたりするかと思うと……それがいまいましいんだ。ちょっ！　僕はね、ポルフィーリイのところへは行かないよ。あいつにはもうあきあきしちゃった。僕はいっそ仲好しの火薬中尉のところへ行く。さぞびっくりすることだろうな。それこそまた一種の効果があろうというものだ。だが、もっと冷静でなくちゃならない。近ごろ僕はあまりに癇が強くなり過ぎたよ。お前は、本当にしないだろうが、今も僕は危うく拳固を振り上げて、妹を脅かしそうにしたんだよ。それも、ただちょっと妹がお名残りに僕を見ようとして、振り返ったからにすぎないのさ。実に下劣きわまる――なんという見下げ果てた気持だ！　ああ、僕もこんなにまでなってしまったか！　さあ、こんなことを言ったって仕様がない、十字架はどこにある？」
　彼はまるで心も空の様子であった。一つ所に一分と立っていることもできなければ、一つのものに注意を集中することもできなかった。彼の想念はたがいに追っかけ合ったり、飛びこし合ったりしていた。彼は夢中にしゃべり始めた。その手はかすかに震えていた。
　ソーニャは無言のまま箱の中から糸杉のと真鍮のと、二つの十字架を取り出した。そして自分も十字を切り、彼にも十字を切ってやった後、その胸へ糸杉の方をかけてやった。
「これはつまり、僕が十字架の苦しみを背負うという象徴だね、へ、へ！　まるで僕が今までに、苦しみ方が足りなかったとでもいうようだね！　糸杉のは、つまり民間に行なわれるものなんだね。そして真鍮の方はリザヴェータので、それを自分でとるんだね――どれお見せ！　なるほど、これがあの女の胸にあったんだな……あの時？　僕はこれと同じような十字架を二つ知って

る、銀のと肌守りの聖像と。僕はそれをあの時婆(ばば)あの胸に投げつけてきた。いっそ僕は今あれでもかけるとよかったんだがなあ、まったく、あれをかけるとよかったんだ……だが、僕はでたらめばかり言って、これじゃかんじんの用を忘れてしまう。僕はなんだかぼんやりしている！……実はねえ、ソーニャ、僕はただお前に予告しようと思って、お前に知っててもらおうと思って、つまりそのために来たんだよ……まあ、それっきりだ……ただそれだけのために来たのさ（ふむ、だが、もう少し話すことがあるような気がしてたんだがなあ）。だって、お前は自分でも僕に行かせたかったんじゃないか。だからさ、僕はこれから監獄住まいをするんだ。これでお前の望みも実現されるわけだよ。それだのに、いったい、お前は何を泣くんだい？　お前までも？　よしてくれ、たくさんだ。ああ、そういうことが僕にとってどんなにつらいと思う！」

　とはいえ、ある感情が彼の心中に生まれ出た。彼女を見ていると、彼の心臓はしめつけられるようであった。『この女は、この女はいったいなんだろう？』と彼は心の中で考えた。『この女にとっておれは何者なんだ？　なんだってこの女は泣いているのだ。なんのためにこの女は、母やドゥーニャと同じようにおれをかばおうとするのだ？　おれのためにはいい乳母になるだろうよ！』

「せめてたった一度でも十字を切って、お祈りをしてくださいまし」おどおどした震え声でソーニャは願うように言った。

「ああ、いいとも、そんなことならいくらでも、お前の好きなだけやるよ！　それはほんとうに心からだよ、ソーニャ、心からだよ……」

　とはいえ、彼は何かほかのことが話したかったのである。

　彼は幾度か十字を切った。ソーニャは襟巻(ショール)をとって、それを頭にかぶった。それも緑色のドラデダームの襟巻(ショール)だった、おそらくいつぞやマルメラードフが話した例の『家族用』のものらしい。ラスコーリニコフの頭には、ふとこうした想念がちらとひらめいたが、別に尋ねもしなかった。実際かれはもう自分でも、自分が恐ろしくぼんやりして、なんだか見苦しいほどそわそわしているのに、気がつきかかっていたのである。彼はそれにぎょっとした。と同時に、ソーニャが一緒に出かけようとしていることも、思いがけなく彼の心を打った。

「お前どうするの！　どこへ行くの？　よしておくれ、よしておくれ！　僕は一人で行く」と彼は狭量ないまいましさを覚え、ほとんど腹立たしげにこう叫ぶと、戸口の方へ足を向けた。「それに、なんだってそんなお供がいるんだ！」と彼は出て行きながらつぶやいた。

　ソーニャは部屋のまんなかにとり残された。彼は別れを告げようとさえしなかった。もう彼女のことさえ忘れていた。ただ毒々しい反抗的な疑惑が、心の中ににえくり返っていたのである。

『いったいこれでいいのだろうか、何もかもこれでいいのだろうか？』彼は階段をおりながら、またしてもそう

考えた。『実際もう一度立ち止まって、万事をやり直すわけにいかないのだろうか……そして、自訴しないですますわけにいかないだろうか？』

しかしそれでも、彼は歩いて行った。と、ふいに彼ははっきりと、何も自分に問いを発する必要はないと感じた。通りへ出たとき、彼はソーニャに別れを告げなかったのを思い出した。彼女は彼の一喝に身動きもなし得ず、例の緑色の襟巻（ショール）をかぶったまま、部屋のまんなかにとり残された。こう思うと、彼は一瞬間そこに立ち止まった。すると同時に、ふとある想念がまざまざと彼の心を照らした――それはちょうど、彼を底の底まで驚かそうと待ち構えてでもいたような風であった。

『いったい俺はいまなんのために、なんの用であの女のとこへ行ったのだろう？　俺はあれに、用があって来たと言った。いったいどんな用なんだ？　なんの用もありゃしなかったんだ！　これから行くと断わるためか？　いったいそれがなんだろう！　そんな必要がどこにあるのだ！　それとも、俺はあの女を愛してでもいるのだろうか？　だって、そんなことはないじゃないか？　そんなことはないはずだ！　現に今もあの女を、犬のように追っ払ったじゃないか。ではほんとうにあの女から十字架を、もらわねばならぬ必要があったのだろうか？　ああ、どこまでおれは堕落したものだろう！　いや、俺はあの女の涙がほしかったのだ！　俺はあの女のびっくりする様子が見たかったのだ！　あの女の心が痛み苦しむところが見たかったのだ！　なんでもいいすがりついて、時間が延ばしたかったのだ、人が見たかったのだ！

ああ、俺はよくも自分に望みをかけようとしたものだ、よくもあんなうぬぼれが持てたものだ！　俺はゑ食だ、俺はやくざな卑劣漢だ。卑劣漢だ！』

彼は掘割の河岸通りを歩いていた。もう歩くところはいくらも残っていなかった。けれど、橋まで行きつくと、彼はしばし立ち止まった。と、ふいに脇へそれて橋を渡り、乾草広場（センナヤ）の方へ歩いて行った。

彼はむさぼるように左右を見回して、一つ一つのものに緊張した視線を向けたが、何ものにも注意を集中することができなかった。何もかもすべり抜けるのであった。

『今に一週間か一月たったら、俺はあの囚人馬車に乗せられてこの橋を渡り、どこかへ連れられて行くのだろう。その時俺はどんな風にこの掘割をながめるだろう――これを覚えておきたいものだ？』こういう考えが彼の頭にひらめいた。『ほら、あの看板にしても、その時俺はあの字をどんな気持で読むだろう？　ああ、あすこに「会社」と書いてある。ところであのAを、Aという字を覚えておいて、一か月後にあのAの字を見たら、その時俺はどんな気持で見るだろう？　その時俺はいったいなんと感じるだろう、何を考えるだろう？……だが、こんなことはみな実に下劣なものに相違ない――今の俺のこうした心配は！　もちろん、これはみんな興味のあることに相違ない……一風変わったものとして……（は、は、は！　いったい俺は何を考えているのだろう！）俺は子供になってしまった。俺は自分で自分に空（から）いばりして見

せているのだ。ふん、なんのために俺は自分で自分を恥じてるんだろう？　ちょっ、やたらにみんなぶっつかりやがる！　ほら、いま突き当たったあの太っちょは、きっとドイツ人に違いない、いったい誰に突き当たったのか知ってるだろうか？　それから、子供を連れた女房が物ごいをしてるが、あの女、俺を自分より幸福だと思ってるから面白いて！　どうだろう。一つ面白半分に施しをしてみたら。や、ポケットにまだ五カペイカ残っているぞ、どこから出て来たのだろう？　さあ、さあ……とっておおき、おっ母さん！』

「神さまのご守護がありますように！」こういう女乞食の泣くような声が聞こえた。

乾草広場へはいった。彼は人混みにまじるのが不愉快だった。たまらなく不愉快だったけれど、彼はわざと人のたくさん見える方へ進んで行った。彼はたった一人でいるためには、この世のあらゆるものを投げ出したいくらいだったが、しかしもう一分間も一人でいられないのを、彼は自分でも感じていた。人混みの中で、一人の酔漢が醜態を演じていた。なんだかしきりに踊りたがっていたが、のべつ横の方へ倒れかかってばかりいるのだ。群衆が男をとり巻いた。ラスコーリニコフは人々を押し分けて、しばらく酔漢をながめていたが、ふいに短かい引っちぎったような笑い声を立てた。しかし一分もたつと、彼はもうそんなことなど忘れてしまい、現にその男を見ていながら、目にはいらないほどであった。とうとう彼は、自分が今どこにいるかさえ覚えないで、そこを離れた。が、広場のまんなかまで行った時、突然彼の内部にある衝動が起こった。ある感じが一時に彼を領して、身心の全幅をとらえつくした。

彼は急にソーニャのことばを思い出したのである。「四つ辻へ行って、みんなにおじぎをして、地面へ接吻なさい。だって、あなたは大地に対しても罪を犯しなすったんですもの。そして、大きな声で世間の人みんなに、『わたしは人殺しです！』とおっしゃい」このことばを思い出すと、彼は全身をわなわなと震わせ始めた。この日ごろ、ことにこの四、五時間の、出口もないような悩ましさと不安は、すっかり彼を圧倒しつくしたので、彼はこの新しい、充実した渾然たる感情の可能性へ飛び込んでいった。それは一種の発作のように、突如として彼を襲い、彼の心の中で一つの火花をなして燃え上がり、たちまち火焔のごとく彼の全幅をつかんだのである。そのせつな、彼の内部にあるいっさいが解きほぐれて、涙がはらはらとほとばしり出た。彼は立っていたままその場も動かず、地面へどうと打倒れた……

彼は広場のまんなかに膝を突いて、土のおもてに頭をかがめ、歓喜と幸福を感じながら、そのきたない土に接吻した。彼は立ち上がって、もう一度身をかがめた。

「どうだ、酔いくらいやがって！」と彼のそばにいる一人の若者が言った。

どっと笑い声が起こった。

「こりゃエルサレムへ行くんだよ、皆の衆。子供たちや生まれ故郷に別れを告げて、世間の人たちに挨拶してる

んだよ。サンクト・ペテルブルグの都と、その地面に接吻しているんだ」と町人の中で誰か一杯きげんらしいのが、こう言い足した。

「まだ生若(なまわか)い男だぜ！」ともう一人が口をはさんだ。

「ただの平民じゃないよ！」と誰かがもったいぶった声で言った。

「いまどき、誰が平民で誰が士族か、そんな見分けがつくもんか」

すべてこうした叫びや話し声が、ラスコーリニコフの気持を控えた。もう舌の先まで出かかっていた『わたしは人を殺しました』ということばも、そのまま消えてしまった。とはいえ、彼は落ち着き払って、こうした叫び声を聞き流しながら、あたりを見向きもせずに横町を通り抜け、まっすぐに警察をさして歩き出した。途中あるいつの幻がちらと目に映ったが、彼は別に驚きもしなかった。それはもうそうなければならぬ、と予感していたのである。彼が乾草広場(センナヤ)で二度目に地面へ身をかがめた時、ふと左の方をふり向いた拍子に、五十歩ばかりへだてたところにソーニャの姿を認めたのである。彼女は広場にある木造バラックの一つに、彼の目にかからぬよう身をひそめていた。してみると、彼女はずっと始終、彼の悲しい歩みにしたがっていたのである！　ラスコーリニコフはこの瞬間、今こそソーニャが永久に自分を離れることなく、運命がどこへ彼を導いて行こうと、世界の果てまでもついて来るに違いないとはっきり直感し、了解したのである。彼の心はにえ返るようであった……けれど、もうのっぴきならぬ場所にたどり着いていた……

彼はかなり元気よく構内へはいって行った。三階まで上らなければならなかった。『まだのぼって行く間がちょっとあるな』と彼は考えた。概して、運命的(フェータル)な瞬間はまだ遠く彼方にあって、だいぶ時間が残っている、まだいろいろなことを考え直すことができる、というような気がしていた。

またしてもらせん形の階段は、依然として埃(ほこり)だらけで、依然として何かの殻がごろごろしていた。またしても各アパートのドアがあけ放しになっていい、またしても方々の台所からは、依然たる炭気と臭気が漏れてくる。ラスコーリニコフはあの時以来、ここへ来るのは初めてだった。彼の足は麻痺(まひ)してがくがくと膝頭が曲がったけれど、それでも歩き続けた。彼は身なりを正して、人間らしくはいって行くために、一息入れようと、わずかの間立ち止まった。『だがいったいなんのためだ？　どういうつもりだ？』自分の動作の意味を考えてみて、突然彼は考えた。『もうどうせこの杯を飲みほさなくちゃならんとすれば、要するに同じことじゃないか？　見苦しければ見苦しいほど、結局かえっていいのだ』この瞬間かれの想像裡(そうぞうり)に、火薬中尉イリヤー・ペトローヴィッチの姿がちらと映った。『いったいほんとうにあの男のところへ行ったものだろうか？　ほかの人じゃいけないのか？　ニコジーム・フォミッチ（署長）じゃいけないだろうか？　すぐに引っ返して、まっすぐに署長の家へ行こうか？　少なくとも、家庭的に事がすむわけだ……い

や、いや！　火薬中尉のところがいい、火薬中尉のところが！　どうせ飲むなら、何もかも一度に飲みほしてしまえ……』

総身にさっと寒けを感じながら、ほとんどおのれを意識しないほどの気持で、彼は警察の事務室のドアをあけた。今度は署内にもいたって人は少なく、ただ庭番が一人と、ほかに平民らしいのが一人いるきりだった。小使も自分の居場所になっている仕切りの陰から、顔を出そうともしない。ラスコーリニコフは次の間へ通った。『ことによると、まだ言わなくてもいいかもしれんな』という想念が彼の頭にひらめいた。そこには一人平服を着た書記らしい男が、事務卓（ビュロー）に向かって何やら書く身構えをしていたし、隅の方にはもう一人の書記が尻（しり）の落ち着きを直していた。ザミョートフはいなかった。ニコジーム・フォミッチもむろんやはり来ていない。

「どなたもおられないんですか？」とラスコーリニコフは事務卓（ビュロー）の男に問いかけた。

「誰にご用なんです？」

「や、や、や！　声も聞かず、顔も見ないが、ロシア人のにおいがする！　という文句が何かの昔ばなしにありますな……忘れてしまったが、やあ、いらっしゃい！」

突然聞き覚えのある声がこうどなった。

ラスコーリニコフの体はぶるぶる震え出した。彼の前に火薬中尉が立っていた。彼はだしぬけに三つ目の部屋から出て来たのである。『これはまったく運命の仕業だ』とラスコーリニコフは考えた。『なぜこの男がここにいるんだ？』

「われわれを訪ねてみえたんですか？　なんのご用で？」とイリヤー・ペトローヴィッチは叫んだ（彼は見たところごくごくの上きげんで、ほんの心もち興奮しているらしかった）。「もし用で見えたのなら、まだ早すぎましたよ。こういう我輩も偶然来合わしたようなわけでね……しかし、できることならなんでも。我輩は正直なところあなたに……ええと、ええと？　失礼ですが……」

「ラスコーリニコフです」

「ああ、そう、ラスコーリニコフ！　あなたはまさか、我輩が忘れたのだなんて、お考えになりゃしないでしょうな！　どうかお願いですから、我輩をそんな人間とお思いなさらんように……ロジオン・ロ……ロ……　ロジオーヌイチ、確かそうでしたな？」

「ロジオン・ロマーヌイチです」

「そう、そう、そう！　ロジオン・ロマーヌイチ！　ロジオン・ロマーヌイチ、それを我輩もいろいろ苦心して、なん度も調べたくらいですよ。我輩は白状しますが、あの時以来、心から遺憾（いかん）に思っていたのです。あの時われわれがあなたに対して、その……我輩はあとで説明を聞きましたが、あなたは青年文学者というより、学者といってもいいくらいで……いわば……その第一の試みだということで……まったく、そうですとも！　ねえ、いったい文学者や学者で、手はじめに奇想天外的な第一歩を踏み出さない人が、およそ誰かあるでしょうか！　我輩も家内も――二人とも文学を尊重している方でしてな、

ことに家内などは夢中なくらいですよ！　文学と芸術にね！　人間ただ高潔でさえあれば、ほかのものはすべてなんでも、才能と、知識と、理性と、天才で獲得できますからね！　帽子――たとえば、帽子なんかいったいなんです？　帽子は薄餅（プリン）も同じことで、そんなものはチムメルマンの店で買えます。けれど、帽子の下に守られるもの、帽子でおおわれるものになると、もう買うわけにいきませんて！……実をいうと、我輩はあなたのお宅へ釈明に上がろうとさえ思ったのです。けれど、また事によったら、あなたもなんだろう……と思いましてな。いや、それはそうと、お尋ねもしないでおりましたが、あなたはほんとうに何かご用ですか？　聞けば、あなたのところへ身内の方がみえたそうですね？」

「え、母と妹が」

「いや、お妹さんにはもう拝顔の光栄と幸福を得ましたよ――教養のある美しい方ですな。実をいうと、我輩はあの時あなたを相手に、ああまで興奮し合ったのを、遺憾千万に思いましたよ。変な事でしたな！　あの時我輩はあなたの卒倒を一種特別な目で見ましたが――それもあとで、きわめて明瞭（めいりょう）な解釈が得られましたよ！　狂信です、ファナチズムです！　あなたが憤慨されたのもごもっともですよ。で、ご家族がみえたのを機会に、住まいでもお変わりになるのですかな！」

「い、いや、僕はただその……僕はちょっとお尋ねしようと思って寄ったんです……ザミョートフ君が来ておられるかと思って」

「ああ、そうですか！　あなた方は仲よしになられたんでしたっけね。聞きましたよ。ところが、ザミョートフはここにおりません――お気の毒さま、さよう、われわれはアレクサンドル・グリゴーリッチを失いましたよ！

昨日から現存しないわけです。転任したんで……しかも、転任して行きがけに皆と喧嘩（けんか）までしたんですからね……もう無作法と言っていいくらいですて……軽率な小僧っ子、それっきりですよ。将来のぞみを嘱するに足りそうでしたがね。しかしまあ、あの連中と――このごろの華々（はなばな）しい青年諸君と、ちょっとしばらく一緒にやってごらんなさい！　あの男は何か試験を受けるとか言ってるんだけれど、このごろのはちょっと何かしゃべって、少しばかり空威張りしてみせると、それで試験はおしまいなんですからな。そりゃ全く、たとえばあなたとか、あなたの親友のラズーミヒン氏なんかとはまるで違いますよ！　あなたの専門は学問の方だから、けっして失敗なんかにめげるようなことはありゃしません！　あなたにとっては人生のあらゆる美も、いわば――Nihil est（空の空で）で、あなたはつまり禁欲主義者であり、修道士であり、隠者であるわけでしょう！……あなたにとっては、本とか、耳にはさんだペンとか、学術的研究とかが大切なので、こういうものの間に精神が高翔（こうしょう）しているんです！　我輩も多少はその……ときに、あなたはリヴィングストンの手記をお読みになりましたか？」

「いや」

「ところが、我輩は読みましたよ。もっとも、このごろ

やたらに虚無主義者(ニヒリスト)がはびこってきましたな。しかし、それも当然な話で、時代がこういう時代ですからな。え、そうじゃありませんか？　もっとも、我輩はあなたと……ねえ、あなたはもうむろん、虚無主義者(ニヒリスト)じゃありますまいね？　どうか腹蔵なく答えてください、腹蔵なく！」

「い、いいや……」

「いや、どうぞ我輩には腹蔵なくやってください、どうぞ自分一人きりのつもりで、遠慮なく話してください！

但し、職務(スルージバ)は別問題ですがな、こりゃ別問題です……あなたは我輩が友情(ドルージバ)を言いそこなったとお思いですか。いや、そりゃご想像ちがい！　友情(ドルージバ)じゃありません。市民として、人間としての感情です。人道的感情、全能なる神に対する愛の感情です。我輩も職務に当たっては、一個の公人にもなり得ますが、しかし、我輩は常におのれを市民であり、人間であると感じ、その責任を完了せんけりゃならんのです……今あなたはザミョートフのことを言われましたが、ザミョートフなんか、あの男はけしからぬ場所へ出入りして、シャンパンやぶどう酒などを飲みながら、フランス風の醜態を演じようというやつです――あなたのザミョートフはこんな男ですよ！　ところが、我輩は忠誠と高潔な感情に燃えておりましてな、その上に身分もあり、官等もあり、ちゃんとした地位も占めております！　それに家内もあって、子供も持っている。市民として、人間としての義務をも履行しております。ところでお尋ねしますが、あのザミョートフはそもそも何ものです？　我輩はあなたを教養のある、品位の高い人としてお話ししてるんですよ。ときに、あの産婆ってやつがやたらにふえていきますなあ」

ラスコーリニコフはいぶかしげに眉を上げた。見うけたところ、つい今しがた食卓を離れたばかりらしいイリヤー・ペトローヴィッチのことばは、大部分空(くう)なそうぞうしい響きとなって、彼の前にまき散らされるのであった。しかし、一部はそれでもどうにかこうにか頭へはいった。彼はいぶかしげに相手をながめながら、この結末がいったいどうつくのか見当が立たなかった。

「我輩が言うのは、例の髪を短かく切った娘たちのことなんで」と話ずきなイリヤー・ペトローヴィッチはことばを続けた。「我輩はやつらに産婆とあだ名をつけてやったんですよ。そして、このあだ名が実によくはまってると思うんで、へ、へ！　あの連中はずうずうしく大学へはいって、解剖学なんか習ってる。しかしねえ、どうでしょう、もし我輩が病気にかかるとしたら、あんな娘っ子を治療に呼べるものですかね、へ、へ！」

イリヤー・ペトローヴィッチは自分の洒落(しゃれ)にすっかり満足して、からからと高笑いした。

「そりゃまあ、文明開化に対する限りない渇望のためかもしれませんさ。しかし、開化したんだから、それでたくさんじゃありませんか。何も濫用することはないはずだ。あのやくざ者のザミョートフみたいに、何も高潔なる人格を辱しめる必要はないはずだ。なんのためにあの男は我輩を侮辱したのでしょう？　一つうかがいたいもんで。ああ、それからまたあの自殺のふえたことはどう

です――とてもあなた方の想像も及ばんくらいですよ。それが皆一カペイカもなくなるまで使ってしまって、自分で自分を処決するんです。ちっぽけな娘っ子も、小僧っ子も、老人も……現につい今朝も、最近上京したある紳士のことで報告がありましたっけ。ニール・パーヴルイチ、おい、ニール・パーヴルイチ、さっき報告の来た紳士は、なんといったっけね？　ほら、ペテルブルグ区で拳銃自殺をした」

「スヴィドリガイロフです」と誰やら隣りの部屋から、しゃがれ声でにべもなく答えた。

ラスコーリニコフは思わずぴくりとした。

「スヴィドリガイロフ！　スヴィドリガイロフが自殺した！」と彼は叫んだ。

「え！　あなたはスヴィドリガイロフをご存じなんですか？」

「ええ……知ってます……ついこのあいだ来たばかりです……」

「そう、このごろ上京したばかりです。細君をなくしたんだが、身持のよくない男でしてね。それが急に拳銃自殺をやったんです。しかも、お話にならないような醜態でしてな……手帳の中には、自分は正気で死ぬのだから、自分の死因で人を疑ってくれるなということが、二言三言書き残してありました。この男は金を持っておったそうですがね。どうしてあなたはご存じなんです？」

「僕は……知合いなんです……妹がその男のところへ家庭教師で住みこんでいたので……」

「おや、おや、おや……してみると、あなたはあの男のことで、何かお話しくださることがおできですね。あなたはそんな風の疑いをいだかれたことはありませんか？」

「僕は昨日あの男に会いました……酒を飲んでいましたが……僕なんにも知りません」

ラスコーリニコフは何やら上から落ちてきて、自分をおしつけたような気がした。

「あなたはまた顔色が悪くなられたようだ。ここはどうも空気の流通が悪いから……」

「ええ、僕もうお暇しなくちゃ」とラスコーリニコフはつぶやいた。「では、ごめんください、おじゃましました……」

「どういたしまして、どうぞいくらでも……おかげで愉快でした。我輩よろこんでそう言明しますよ……」

イリヤー・ペトローヴィッチは、手まで差し伸ばした。

「僕はただ……僕はザミョートフ君のところへ……」

「わかってます、わかってます。おかげで愉快でした」

「僕も……非常にうれしいです……さようなら……」ラスコーリニコフはにこりと笑った。

外へ出た。彼はよろよろしていた。頭がぐるぐる回るようだった。彼は自分が立っているのかどうか、それさえ感じなかった。右手を壁に突っぱりながら、彼は階段をおり始めた。帳簿を手に持ったどこかの庭番が、下から警察をさして上がってきながら、とんと突き当たったような気がした。犬がどこか下の階段でけたたましくほ

え立てていると、一人の女がそれに麺棒を投げつけて、わめいていたような気もした。彼は下までおりきって構内へ出た。と、そこには出口のかたわら近く、死人のように真っ青な顔をしたソーニャが立っていて、なんともいえない恐ろしい目つきで彼を見つめていた。彼はその前に立ち止まった。何かしらいたましい、悩み抜いたような表情が、彼女の顔に浮かんでいた。それは一種絶望的な表情である。彼女ははたと両手をうち合せた。見ぐるしい途方にくれたような微笑が、彼の唇に押し出された。彼はしばらく立っていて、やがてにたりと笑うと、また階上の警察へ引き返した。

イリヤー・ペトローヴィッチはどっしりすわりこんで、何かの書類をかき回していた。その前には、今しがた階段を上りながら、ラスコーリニコフに突き当たった、例の百姓男が立っていた。

「あーあーあ！　あなたはまた！　何か忘れものでもなすった？……だが、いったいあなたはどうなすったんです？」

ラスコーリニコフは血の気のうせた唇をして、目をじっとすえたまま、静かに彼の方へ近づいた。テーブルのすぐ傍まで行くと、それに片手を突っぱって、何か言おうとしたが、言えなかった。ただ何かとりとめのない響きが聞こえるばかりだった。

「あなたは気分が悪いんでしょう、おい椅子だ！　さあ、この椅子へおかけなさい！　おい、水！」

ラスコーリニコフは椅子の上へぐたりと腰をおろしたが、きわめて不愉快な驚きに打たれている火薬中尉の顔から少しも目を離さなかった。二人は一分間ほど互いに顔を見合わせながら待っていた。水が来た。

「あれは僕が……」とラスコーリニコフは言いかけた。

「水をお飲みなさい」

ラスコーリニコフは片手で水をおしのけ、低い声で一語一語間をおきながらもはっきりと言いきった。

「あれは僕があの時官吏の後家の婆さんと、妹のリザヴェータを斧で殺して、金や品物を強奪したのです」

イリヤー・ペトローヴィッチはあっとばかり口をあけた。四方から人々がはせ集まった。

ラスコーリニコフは自分の口供をくり返した……